第66回　全道造形教育研究大会　札幌大会

大会テーマ・研究主題

“すき”が輝く造形活動

会期　2016年7月28日(木)・29日(金)

会場　札幌市立新陵東小学校

主催　北海道造形教育連盟
　　札幌市造形教育連盟

第66回　全道造形教育研究大会　札幌大会

“すき”が輝く造形活動

大会テーマ・研究主題

SAPPORO

2016

CONTENTS

3 会長あいさつ
三井　哲（北海道造形教育連盟会長）

4 実行委員長あいさつ
伊藤正敏（札幌市造形教育連盟会長）

5 大会日程

6 授業一覧

7 会場図

8 講演者プロフィール

9 北海道造形教育連盟　研究主題について

15 札幌市造形教育連盟　授業テーマについて

33 大会指導案

51 提言集

73 各地区サークル活動報告

85 資料 ～連盟規約・研究大会のあゆみ・名簿～

ご挨拶

次の時代に向かって

北海道造形教育連盟会長　三　井　　哲

『"すき"が輝く造形活動』をテーマに第66回全道造形教育研究大会札幌大会が、どっしりとした手稲山を正面に臨む札幌市立新陵東小学校を会場に開催されます。

北海道造形教育連盟の歩みをひもといてみると、1950年に北海道造形教育連盟の前身である北海道美術教育会が、「情操教育の一環としての本道図画教育の進展を図るために」をテーマとして第１回全道図画工作教育集会を、この札幌で開催しました。1951年には、北海道図画工作連盟が創立され、1952年に「図画工作教育の新思潮である創造主義美術教育の諸問題について」をテーマに、札幌で研究大会が開催されました。以来、札幌市の造形教育連盟は、「子どもの創造力とはなにか」「瑞々しい中味でしなやかな子どもを育てる造形実践」「子どもの個性的表現を授ける造形教育の充実」「"わたし"を創る～自立と共生の造形教育をめざして～」等、造形教育の本質を問うテーマやその時代を映すテーマのもと、13回の全道研究大会を開催し、札幌市の造形教育の到達点を示すことで造形教育を進める全道の仲間と共有してきました。

第66回全道造形教育研究大会札幌大会は、この歴史の重さを受け止めながら、現行学習指導要領の折り返し地点となった第65回全道造形教育研究大会函館大会の成果と課題を踏まえ、平成30年より実施される次期学習指導要領が示す造形教育の姿を模索する重要な大会となります。文部科学省の教育課程部会の学校段階等別部会・各教科等別ワーキンググループでは、『「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」に向けた学習・指導の改善充実』について検討しています。このような課題は、全道造形教育研究大会においても話題にされてきた課題ではありますが、まだ十分な手ごたえを掴んでいるとは言えません。

これまで、私たちは、子ども一人一人の主体性を大切にして、指導方法を『型』にはめたり『型』にとらわれたりして子どもたちが受け身にしてしまわない授業や、言語活動を積極的に取り入れた授業の研究を進めてきました。これからは、子ども一人一人がもっと主体的に学ぶことができる授業や対話的な活動を取り入れながらより深い学びや質の高い学びを実現する授業を追究すること等が求められると思います。私は、現在注目されている「アクティブ・ラーニング」や「カリキュラムマネジメント」を視野に入れて、『型』や『やり方』を求めるのではなく、図画工作科や美術科で育成すべき資質や能力を育むことができる授業をきめの細かい児童生徒理解や教科の本質を貫いた教材化、子どもの主体性を生かす場の設定や教師のかかわりによって、子どもたちが夢中になって造形活動に取り組む授業を作っていくことが大切であると思います。教師が、子どもたちの息づかいを聞きながらデザインする一度きりのオリジナルの授業をこの札幌から全道に発信していただくことを期待しています。

最後になりましたが、本大会を開催するに当たりご支援いただきました北海道教育委員会、札幌市教育委員会始め関係の皆様、ご尽力くださいました札幌市造形教育連盟の皆様方に深く感謝申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

ご挨拶

“すき”が輝く造形活動

第66回全道造形教育研究大会札幌大会実行委員長
札幌市造形教育連盟会長　伊　藤　正　敏

北海道新幹線が開業し、北海道は新たに「試される大地　北海道。その先の、道へ　北海道。」と、キャッチコピーを加えました。延伸工事が始まった道都札幌市もまた、その先を求めて次なる歩みを進めています。

この度、全道各地から多くの皆様にご参加をいただき、札幌オリンピックが開催された手稲山を望むこの地において、第66回全道造形教育研究大会札幌大会を開催できますことは、私たち札幌市造形教育連盟にとりまして大きな喜びであり誇りでもあります。

さて、我が国においては、グローバルな社会の到来を踏まえ、これからの予測が困難な社会に乗り出していく子どもたちが備えるべき能力として、生き抜く力が重要になっています。変化の厳しい社会において、いかなる場面でも他人と協調しつつ、自律的に社会生活を送るとともに、答えのない問題に対して自分で解決方法を見いだす力が求められています。それは、「自ら学び、考え、行動する力」をはじめとする「生きる力」を確実に身に付けることに他なりません。

このようなことから、北海道造形教育連盟は、この新しい時代の要請に応える教育を推進するため、研究主題を「“わたし”を創る　～今を生きる、共に生きる造形教育～」と定めました。本大会主題は、子ども自らが自己選択し自己決定していく、主体的な造形活動を通して新たな見方・感じ方・表し方を獲得し、自己を更新していくというこれまでの研究の内容を踏襲しつつも、造形教育で育まれる固有の資質・能力だけでなく、汎用性のある未来に生きて働く資質・能力を育てたいという願いが込められています。

そのため、札幌市造形教育連盟は、「“すき”が輝く造形活動を展開すれば、子どもたちは『“わたし”を創る』」と研究仮説を立て、研究主題を「“すき”が輝く造形活動」としました。今回公開授業の他、ポスター発表やパネル展示、さらに動画等で幼稚園や特別支援学級の取組を発表し、今後の造形教育の在り方について、より具体的方策を語り合う場として充実させ、併せて、題材屋台村で各地区の創造性溢れた実践の成果の交流を図り、図工美術教師としての職能向上と、交流の成果を明日の造形教育の財産として持ち帰っていただく大会になることを願います。

私たち札幌市造形教育連盟は、会員152名の力を結集し、昨年２月に札幌大会準備委員会を立ち上げ、６月からは実行委員会として大会準備を進めてきました。「札幌らしいおもてなし」で参加会員の皆様が満足いただける大会運営にしたいと考えております。何かと行き届かない点もありご不便をおかけする場面が多々あろうかとは存じますが、私たちの大会成功に向けた最善の誠意と努力に免じ、ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

結びになりますが、本大会の開催にあたり、ご指導・ご助言を賜りました北海道造形教育連盟をはじめ、北海道教育委員会、札幌市教育委員会、並びにご支援・ご協力いただきました関係各位の皆様に心から感謝を申し上げ、大会実行委員会からのご挨拶とさせていただきます。

大会日程

1日目 7月28日(木)

8:30	9:00	9:50～授業公開・提言	11:15～分科会
受付	開会式	10:30 ① 幼稚園 プレゼン提言 上田 克美 (提言後分科会) 2階 1年1組教室 「子どものまなざしで」～造形遊び・ごっこ遊び～	
		9:50 ② 小3 三浦真奈美 2階 2年2組教室 「クリスタル星のなかまたち」	② 小3 三浦真奈美 2階 2年1組教室
		10:00 ③ 小2 篠原 貴 3階 テラス前 「ようこそ！空の国へ！」	③ 小2 篠原 貴 3階 5年2組教室
		10:10 ④ 小3 菊地 惟史 3階 視聴覚室 「感じて！ココロの形・色」	④ 小3 菊地 惟史 3階 会議室
		10:20 ⑤ 小3 佐藤 和音 1階 多目的ホール 「つないでいくと…」	⑤ 小3 佐藤 和音 1階 3年1組教室
		10:00 ⑥ 中3 武井 りえ 1階 4年1組教室 「15歳の自我像」	⑥ 中3 武井 りえ 1階 学習室
		10:00 11:00 ⑦ 特別支援 提言 久蔵美和子 3階 5年1組教室 「一人一人の窓から見る造形活動」	

12:30	13:30 授業公開(体育館にて)	14:40 講演	18:30
昼食	⑧ 小4 矢野 宜利 「開くとそこにある自分だけの宝物」 ⑨ 中1 寺林 陽子 「TOWER OF LIFE ～人生の塔～」	講演 「造形教育の未来を考える ～新しい時代と社会に開かれた教育課程の視点から～」 東良 雅人氏 (文部科学省 教科調査官)	参加者交流会

2日目 7月29日(金)

8:30	10:00	12:00
準備	題材屋台村 (体育館)	閉会

題材名・授業分科会一覧

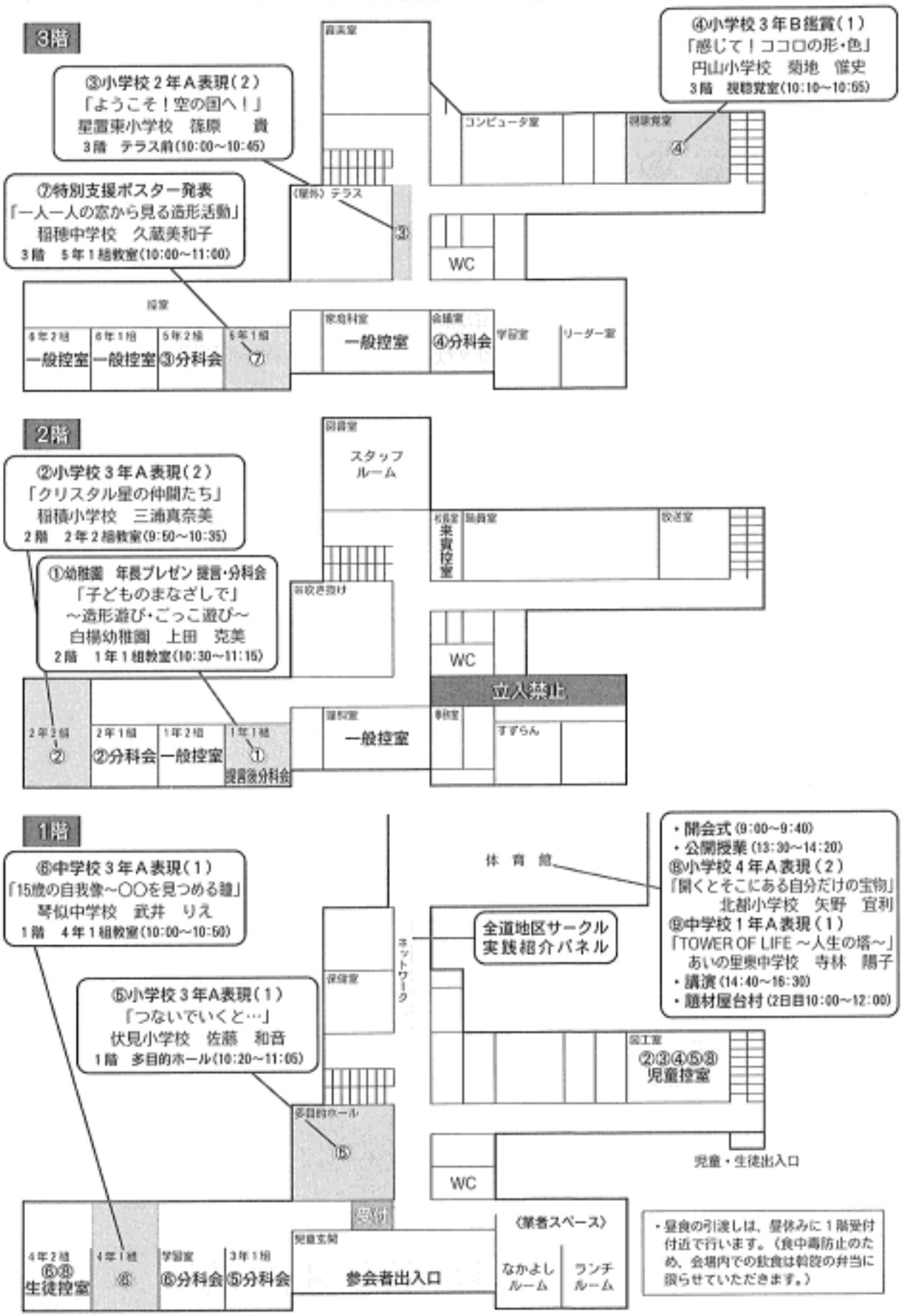
	校種 学年領域	会場	タイトル	授業者・発表者	助言者
①	幼稚園 年長 プレゼン・提言	2階 1年1組 教室	子どものまなざしで ～造形遊び・ごっこ遊び～	白楊幼稚園 上田　克美　教諭	北海道教育大学教授 阿部　宏行 元西小校長 篠原　　寛
②	小学校 3年 A表現（2）	2階 2年2組 教室	クリスタル星の 仲間たち	稲積小学校 三浦真奈美　教諭	元福住小校長 今　　裕子 元幌西小校長 菅原　清貴
③	小学校 2年 A表現（2）	3階 テラス前	ようこそ！空の国へ！	星置東小学校 篠原　　貴　教諭	元資生館小校長 益村　　豊 札幌大谷大学准教授 平向　功一
④	小学校 3年 B鑑賞（1）	3階 視聴覚室	感じて！ ココロの形・色	円山小学校 菊地　惟史　教諭	元光陽小校長 土井　善範 元旭小校長 稲實　　順
⑤	小学校 3年 A表現（1）	1階 多目的ホール	つないでいくと…	伏見小学校 佐藤　和音　教諭	元八軒西小校長 櫻田　　豊 札幌学院大学教授 安木　尚博
⑥	中学校 3年 A表現（1）	1階 4年1組 教室	15歳の自我像 ～○○を見つめる瞳～	琴似中学校 武井　りえ　教諭	元札苗北中校長 富田　賢司 元向陵中校長 塚野　昭臣
⑦	特別支援 特別支援 ポスター発表	3階 5年1組 教室	一人一人の窓から見る 造形活動	稲穂中学校 久蔵美和子　教諭 （他　2校　教諭）	
⑧	小学校 4年 A表現（2）	体育館	開くとそこにある 自分だけの宝物	北都小学校 矢野　宜利　教諭	文部科学省　教育課程課 教科調査官 東良　雅人
⑨	中学校 1年 A表現（1）	体育館	TOWER OF LIFE ～人生の塔～	あいの里東中学校 寺林　陽子　教諭	

★①～⑥までは分科会があります。

　また、⑦は会場にて10：00～11：00まで発表者がいて交流が行われています。

★⑧⑨については講演会の時に、授業の話にもふれてお話しいただきます。

新陵東小学校　会場図


3階
④小学校３年Ｂ鑑賞（１）
「感じて！ココロの形・色」
円山小学校　菊地　催史
3階　視聴覚室(10:10～10:55)
③小学校２年Ａ表現（２）
「ようこそ！空の国へ！」
星置東小学校　篠原　貴
3階　テラス前(10:00～10:45)
⑦特別支援ポスター発表
「一人一人の窓から見る造形活動」
稲穂中学校　久蔵美和子
3階　5年1組教室(10:00～11:00)
音楽室
コンピュータ室
視聴覚室
④
(屋外) テラス
③
WC
教室
6年2組
一般控室
6年1組
一般控室
5年2組
③分科会
5年1組
⑦
家庭科室
一般控室
会議室
④分科会
学習室
リーダー室
2階
②小学校３年Ａ表現（２）
「クリスタル星の仲間たち」
稲積小学校　三浦真奈美
2階　2年2組教室(9:50～10:35)
①幼稚園　年長プレゼン提言・分科会
「子どものまなざしで」
～造形遊び・ごっこ遊び～
白楊幼稚園　上田　克美
2階　1年1組教室(10:30～11:15)
図書室
スタッフ
ルーム
来賓控室
職員室
放送室
※吹き抜け
WC
立入禁止
2年2組
②
2年1組
②分科会
1年2組
一般控室
1年1組
①
授業後分科会
保健室
一般控室
事務室
すずらん
1階
⑥中学校３年Ａ表現（１）
「15歳の自我像～○○を見つめる瞳」
琴似中学校　武井　りえ
1階　4年1組教室(10:00～10:50)
⑤小学校３年Ａ表現（１）
「つないでいくと…」
伏見小学校　佐藤　和音
1階　多目的ホール(10:20～11:05)
体育館
・開会式 (9:00～9:40)
・公開授業 (13:30～14:20)
⑧小学校４年Ａ表現（２）
「開くとそこにある自分だけの宝物」
北都小学校　矢野　宜利
⑨中学校１年Ａ表現（１）
「TOWER OF LIFE ～人生の塔～」
あいの里東中学校　寺林　陽子
・講演 (14:40～16:30)
・題材屋台村 (2日目10:00～12:00)
全道地区サークル
実践紹介パネル
ネットワーク
保健室
図工室
②③④⑤⑧
児童控室
多目的ホール
⑤
WC
児童・生徒出入口
受付
4年2組
⑥⑨
生徒控室
4年1組
⑥
学習室
⑥分科会
3年1組
⑤分科会
児童玄関
参会者出入口
〈業者スペース〉
なかよし
ルーム
ランチ
ルーム
・昼食の引渡しは、昼休みに１階受付付近で行います。（食中毒防止のため、会場内での飲食は斡旋の弁当に限らせていただきます。）

講　演

講　師

文部科学省初等中等教育局教育課程課　教科調査官
教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官（国立教育政策研究所）

東良　雅人（ひがしら・まさひと）氏

プロフィール

昭和62年に京都市立の公立中学校の美術科教諭として赴任。
その後、京都市の公立小学校図画工作の専科を担当。
平成14年から平成23年３月まで京都市の教育委員会で指導主事を務める。
平成23年４月より現職。

演　題

「造形教育の未来を考える
～新しい時代と社会に開かれた
教育課程の視点から～」

MEMO

北海道造形教育連盟の研究

北海道造形教育連盟の研究　北海道造形教育連盟研究部

1　研究主題設定の背景

見えない未来を生き抜く子ども

急速に進む超少子高齢化と人口減少社会を迎えた現在、社会・経済的、文化活動が地球規模で拡大し様々な影響を及ぼすグローバル化の大波にも晒されている。

さらに、23年３月11日の東日本大震災以降、未曾有の自然災害や原発事故、エネルギー資源の有限化などの社会状況の変化の中で、未来を担う子どもたちにはこれまで経験したことない新たな課題を見出し、それらの最善解を生み出す力が求められるだろう。

「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65％は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」という、米デューク大学の研究者であるキャシー・デビッドソン氏が2011年８月、ニューヨークタイムズ紙のインタビューで語った予測が波紋を呼んだことも記憶に新しいところである。

今を生きる子どもたちが、これらの時代に求められる「生きる力」を確実に身に付け、一人一人の可能性を最大限に伸ばすよう、育成すべき「資質・能力」及びそのための「教育目標・内容」、「評価」の在り方を明確にする必要が学校教育に求められている。

知識基盤社会の中の造形教育

「ゆとりからの脱却」と言われた、平成14年度の学習指導要領の改定では図工・美術の年間指導時数は小学校高学年では70から50時間（－20時間）に、中１では70から45時間（－35時間）に、中２では70（含む選択授業）から35時間（－35時間）と大幅に削減された。

造形教育を担う私たちは、知識基盤社会と言われ学力の向上が教育界の命題となっている今だからこそ、表現・図画工作・美術・工芸といった造形教育が今教室で生き、未来に社会で生きる子どもたちに培うことができる「資質・能力」を明確に意識し、一つ一つの授業の中で「目標と評価」を位置付けることを通して、教科としての造形教育の存在意義を主張していくことが、子どもたちのために必要であると考える。

では、知識基盤社会の中で造形教育が育むことができる「資質・能力」とはどんなことであろうか。教育学者である上智大学の奈須正裕氏は著書「教科の本質から迫るコンピテンシー・ベイスの授業づくり」（2015年）の中で次のように述べている。

> 図画工作の「材料を基に造形遊びをする」では、あらかじめの意図や計画ではなく、材料との間にその都度生じるたぶん偶発的な出会いと、その子どもによる闊達自在な必然化や絶えざる繰り返しにより、美的な創造の営みが展開されていく。そこでは、本来異なるカテゴリーに属するもの同士を独自の視点や理路により大胆に「つなげる」「見立てる」「たとえる」といった思考の様式、かつてレヴィ＝ストロースが「野生の思考」と呼んだものが豊かに作動している。要素技術の思いもかけない新領域への適用や限られたリソースを駆使して

造形活動に内在する知識基盤社会を生きる「知」

高い付加価値を有する商品開発をする場合など、知識基盤社会での新たな知や価値の創造において、この「野生の思考」が豊かに発揮され、目覚ましい成果を挙げていることは疑いの余地がない。それは産業社会を支えてきた近代合理主義に基づく一方的で等速直線運動的な発想や構想の様式とはすっかり異なるものであり、従来の学校教育がおよそ明晰な意図をもってしっかりと育んでこなかった類いの思考と言えよう。

造形遊びに潜在するこのようなコンピテンシー育成の可能性について、当の図画工作科が十分に自覚的でなく、現状ではそこで培われている豊かな発想・構想の力が美的造形以外の対象にも発動されることを想定しきれていないのは、何とももったいないことである。もし、この可能性が十分に追求され、さらに応分の成果を確認されたならば、図画工作科にはその成果に応じた時数を含むリソースの確保が検討されてしかるべきであろう。

フランスの文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースは、その著書「野生の思考」（みすず書房 1976年）の中で、素材や技術の思いもかけない新領域への適用や限られたリソースを駆使して高い付加価値を有するものをつくり出すことを「ブリコラージュ」と呼び、近代以降の「エンジニアリング」の思考＝「栽培された思考」と対比させ、人類が古くからもっている知であり、近代社会にも適用されている普遍的な知の在り方だと述べている。

北海道新聞のインタビューに第１回札幌国際芸術祭アートディレクター、音楽家の坂本龍一氏は以下のようにコメントしている。

> 僕は海外の偉い人が描いた絵を鑑賞するのがアートだと全然思っていません。（中略）例えば人口問題や食糧自給率だって十分アートになる。
>
> 2015年（平成27年）８月21日　朝刊

坂本氏のこの考えは、造形活動に内在している「ブリコラージュ」的思考が社会を覆う諸問題を解決していく可能性を秘めていることを示唆しているのであろう。（坂本氏は2006年に「ブリコラージュ」という題名のアルバムを発表している。）

この「資質・能力」の育成は、何も小学校の造形遊びでのみ可能なのではないと考える。幼児教育のごっこ遊びであったり、平面や立体と言った表現様式を組み合わせた題材であったり、平面表現であっても様々な材料を組み合わせた題材であったり、中学校や高等学校における具象的な表現と抽象的な表現を組み合わせ、心象や内面を表現する題材においても育成することができると考える。近年の教科書題材に領域の境目が無くなり多様な表現が多く扱われているのも、このようなコンピテンシー育成に基づいていると推察される。

コンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベース育成へ

このように、本来造形表現活動には「ブリコラージュ」の思考的要素が内在されており、私たち造形教育に携わるものは、「どのように造形的内容を教えるか」といった「コンテンツ・ベース」的な教育観から、「どのような資質・能力を育てるか」という「コンピンテシー・ベース」育成へ教育観のシフトが求められているのである。

しかしこれは何も新しいことではない。アメリカの教育学者ヴィクター＝ローエンフェルド著「美術による人間形成」（1947年）で述べた、「美術を教える」の

ではなく「美術を通して教える」という教育観と何ら変わることではなく、造形教育ではどんな「資質・能力」を育成するのかをより意識していこうというものである。また、同著から造形教育と子どもの発達の関係の重要性は周知の通りであり、子どもの「未来」を見据え「今」どのような学びが必要なのかを時間軸で捉え、「資質・能力」の育成という観点で再考していく必要がある。

造形教育における協働的な学び

加えて、造形教育が教科という学校教育としての集団での学びであることを踏まえ、一人一人の「資質・能力」の育成を「協働的な学び」の中で効果的に高めていけることも実践していけなくては、私たち自身が造形教育の存在価値を自覚し自信をもち子どもたちに授業を提供し、他に価値を主張することはできないと考える。

これまでも、共同制作という学習課題や造形遊びや〇〇ワールドづくりなどで自然に生まれた接点から偶発的に共同制作が始まる「協働的な学び」は存在した。しかし、そのようなある特定の学習内容ではなく日常の造形活動中で、子どもの必然が伴った「協働的な学び」を成立させていくにはどのような手立てが必要なのだろうか。

ロシアの心理学者レフ・セミョニビッチ＝ヴィゴツキーは、著書「思考と言語」（新読書社 2001年）の中で、有名な「発達の最近接領域」ということを提唱している。ヴィゴツキーは子どもの発達について二つの水準を分類している。ひとつは、既習などを生かし与えられた問題や技能を自主的に解決することができる領域である。今ひとつは、一つ目の領域に近接しながらも既習などでは自主的には解決できない問題や技能であっても、他者と交わることにより解決に成功する領域で、これを「発達の最近接領域」と呼んでいる。子どもが仲間と交わり協力し合うときのみ、その学びは多様な内的発達過程を覚醒し、いったんこのような過程が内化したならば、それらの過程は子どもの自立的な発達の成果の一部となる。その自立心がまた可能性を生み出し、その可能性が他者との交流を生み出し内化し、「自立のサイクル」を生み出すと提唱している。

自立と共生の新たな関係性

前次の研究「自立と共生の造形教育」では、一人一人の学びが「自立」していることで「共生」の学びが成立すると仮説を立てていた。しかし、「共生の学び」＝「協働的な学び」が子ども一人一人の「自立」を促すという、「自立した学び」と「協働的な学び」が双方向に相乗的に効果を有するという新たな研究の方向性が見えてきたのである。

以上のような新たな教育課題とこれまでの全道造形教育研究大会の研究成果から、研究主題を以下のように設定した。

“わたし”を創る ～今を生きる、共に生きる造形教育～

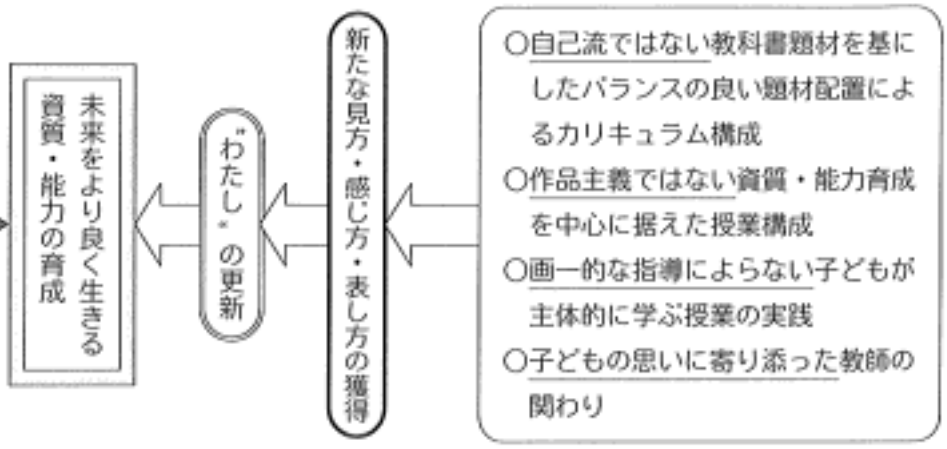
前次研究と同様に、この研究主題は「学習指導要領の改訂を見据え」チーム北海道の仲間と意見交流を繰り返した中から生まれている。また、前回同様、副主題は設定しない。各地区サークルの研究が、本研究主題を具現化するそれにあたるものと考えているからである。

2　研究内容Ⅰ

“今”“わたし”が生きる造形活動の在り方とは

“今”意味ある造形教育を通して“未来”を創る

子ども自らが自己選択し自己決定していく、主体的な造形活動を通して新たな見方・感じ方・表し方を獲得し、自己を更新していくというこれまでの研究の内容は踏襲しつつも、造形教育で育まれる固有の資質・能力だけではなく、汎用性のある未来に生きて働く資質・能力の育成をめざしていく。



3　研究内容Ⅱ

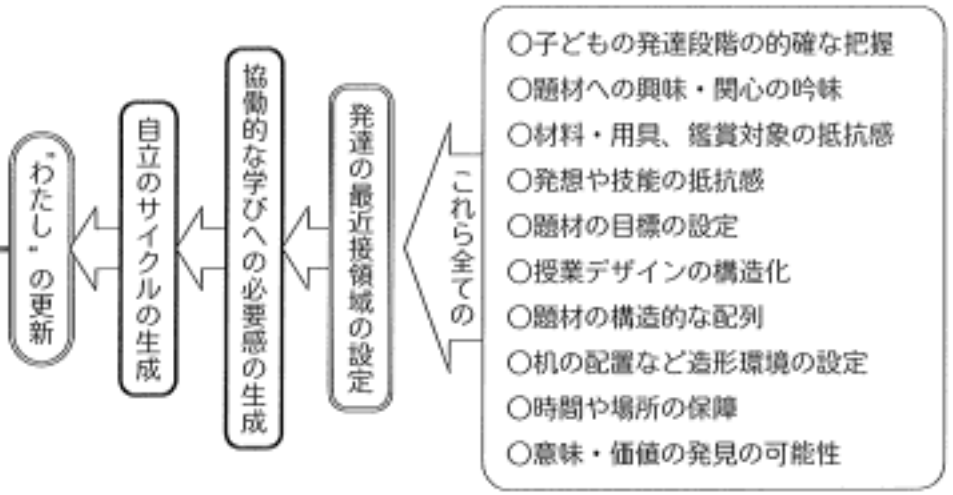
“わたし”が高まる“共に生きる”造形活動の在り方とは

発達と必要感に裏打ちされた協働的学び

人の世界観の最小単位が自分であり、成長と共に世界が広がっていく。そして、発達の最近接領域における協力者も成長に伴い親や先生から仲間に置き換わってくることを考えると、協働的な学びの在り方には発達ということが大きく関係している。

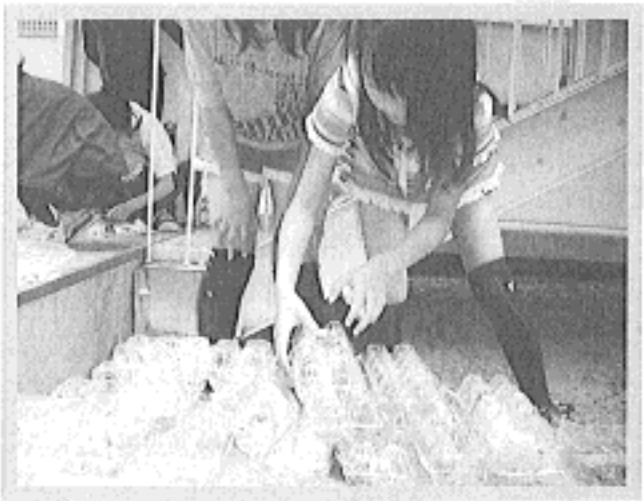
また、指導者が子どもの思いを可視化したいがために交流を促したり、一人の子の発想や技能のよさを他に広めたいがために交流を促すなど、指導者の必要感が子どもの必要感と一致していないと、単に子どもの造形活動の時間や意欲を奪う結果になりかねない。子どもの必要感から生まれる協働的な学びが成立していないと、お互いに自立を促す学びにはならないと考える。

そのためには、以下が達成されている必要がある。



MEMO

札幌市造形教育連盟の研究



“すき”が輝く造形活動

札幌市造形教育連盟研究部

0　大切にしたいのは、子ども主体の造形活動

造形教育で大切にしていること

Q．あなたが、子どもの造形活動において、大切にしていることは何でしょうか？（よろしければ、下に書いてみてください。）

〈わたしが大切にしていること〉

ありがとうございます。

子どもたちに育みたい資質や能力をどのようにお考えになったでしょうか。実際に取り組んだ造形活動を思い出したり、子どもの姿を思い浮かべたりした方もいらっしゃったのではないでしょうか。

本大会を通して、ぜひ皆様と「大切にしていること」を交流したいと考えています。

札幌市造形教育連盟では、これまで「子ども主体の造形活動」を大切にしてきました。そして、私たち教師が大切にすることについても考えてきました。

子ども主体の造形活動にするために、私たち教師が大切にすること

- **「子どもの力を信じます！」**
  …子どもは、自分で「表したいことを見付けることができる、表し方を工夫することができる、感じ取ることができる」ことを信じます。
- **「どのような力を育てたいのかを明確にします！」**
  …子どもの実態を捉え、ねらいを明確にして、子どもが資質や能力を十分に発揮することができる題材を考えます。
- **「子どもの思いを大切にします！」**
  …子ども一人一人の「こうしたい！」という思いや選んだことを受け止め、尊重します。
- **「子どもが学び合うことを大切にします！」**
  …子どもが協働的に学ぶことのよさを感じられるように、環境の構成を工夫します。
- **「つくりだす過程を大切にします！」**
  …子どもが「つくり、つくりかえ、つくる」過程の姿を見取り、評価することを大切にします。

「在り方」を大切にしてきたこれまでの歩み

≪札幌市造形教育連盟の全道大会までの軌跡≫

【研究授業】 研究理論の検証・発展のために、研究授業を積み重ねてきました。授業後の研究協議では、「子どもの姿」と「教師の手立て」を結び付けるよう心がけました。短冊等に意見を書き、視点毎に「見える化」をしながら、成果と課題を整理し、次に生かしました。

【作品を見る会】 毎年冬に開催。様々な校種の先生が集まり、図工や美術の時間の作品を持ち寄り、見合います。単なる題材の紹介に留まらず、子どもの学ぶ姿や思いの深さに感動し、先生方が授業の中で大切にしていることを学び合う機会となっています。

【研修会】
子どもの「すてき」
を引き出す
絵画指導の在り方

【文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官・
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官　岡田京子先生　講演会】
「授業を見るときは、まず子どもの姿を見る。その後に、その姿を引き出した教師の手立てを考える。」「『立ち止まっているのか、行き詰まっているのか』見極めて関わる」などの、子どもの見取り方・関わり方を学ばせていただきました。

【札造20周年記念講演会】「もっと子どもの素朴な感性や表現を大切にしたい」「題材主義から、子ども主義へ」「授業の最後にシェアする（他者のよさも、自分のよさもわかる）」「子どもの中に事実がある」「もの・身体・行為の重視」「子どもと向き合う教師が、あらためて、子ども主体の表現とは何かを考えたほうがよい」などの素敵な言葉をいただきました。その後は、札幌市造形教育連盟の歴代会長による座談会。先輩の思いを引き継いでいます。

参会者の皆様には本大会において、造形活動に取り組む子どもたちの姿を通して、子どもの素晴らしさや造形教育の可能性とともに、札幌市造形教育連盟が大切にしていることを感じていただけると幸いです。

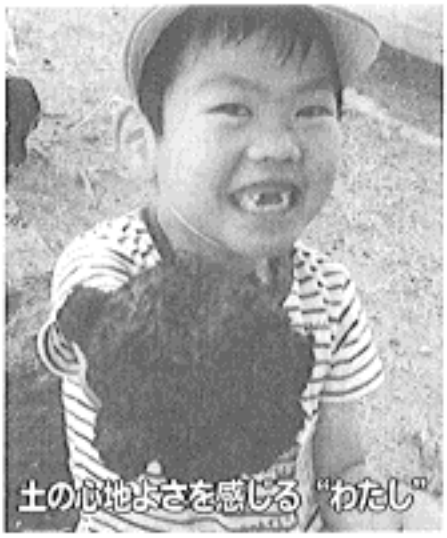
北海道造形教育連盟の研究主題

「“わたし”を創る　～今を生きる、共に生きる造形教育～」

を受け、札幌市造形教育連盟では、「“わたし”を創る」造形活動の在り方を考えました。

子どもは造形活動の中で、自分の思いを形や色などに表したり、対象からよさや美しさなどを感じたりしています。それらを通して、新しい意味や価値をつくりだしていきます。さらに、他者とそれらの共通点や相違点を認め合うことで、豊かな人間性を育んでいくと考えます。

そのような経験を積み重ねることで、子ども自身が“わたし”を創っていきます。そして、自己実現へと向かい自分の人生に豊かさや幸せを感じていけるようになると考えます。


土の心地よさを感じる“わたし”

教育課程企画特別部会「論点整理」において、現在の造形教育には、感性などを働かせ、思考・判断し表現したり鑑賞したりするなどの資質や能力を相互に関連させながら育成することや、主体的で創造的な学習活動の充実が求められています。さらに、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成することが求められています。

また、阿部宏行氏（北海道教育大学岩見沢校）は、「絵などの表現は成長に伴って発達し、自己を築く人格形成の大きな支えとなる」[※1]と述べています。子どもは創造活動を通して、自分はどんな存在なのかを感じていきます。

そんな子どものかけがえのない時間に寄り添う私たち教師は、作品という結果からだけではなく、子ども一人一人が自己の表現をつくりだす過程の学びを大切にします。

私たちは、子どもが自ら思いをもって表現したり、感じたりすることから自分なりの意味や価値をつくりだす、すなわち子どもが主体の造形活動を提案します。

そこで、札幌市造形教育連盟では造形活動を通して、「子ども一人一人が感性を働かせて、自分にとっての“すき”を表したり、感じたりする姿」を目指します。

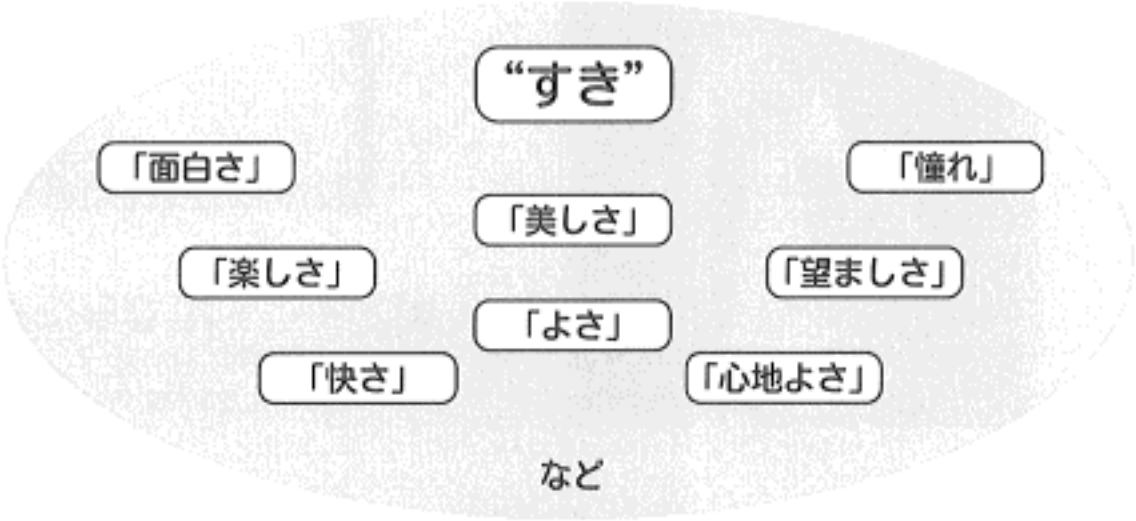
2　札幌市造形教育連盟　研究主題の設定に向けて

“すき”を追求する子ども

子ども一人一人が感性を働かせて自分にとっての“すき”を表したり、感じたりする姿を「“すき”を抱く姿」として考えました。

本研究では子ども一人一人が抱く“すき”を「よさ」や「美しさ」「面白さ」「楽しさ」「快さ」「心地よさ」「望ましさ」あるいは「憧れ」などとして捉えました。そして、創造活動の中でそれらを追求する子どもの姿を「“すき”が輝く姿」と設定しました。

以上のように本研究における“すき”とは、狭義の『好き嫌いの『好き（情動）』』を超えたものとします。そして、創造活動を通して、子どもが感性を働かせながら、よりよいものや美しさなどの価値に向かうことで、豊かな情操を養うと考えました。



“すき”を抱くだけではなく、創造活動を通して追求しさらに輝かせていきます。

- 「やってみたい」「みてみたい」と意欲を高める姿　（造形・美術への関心・意欲・態度）
- 「こうしたらいいかな」「いいこと考えた！」と思い付く姿　（発想や構想の能力）
- 「この材料や用具の使い方を変えて」「ここをはっきりと表わして！」と工夫する姿　（創造的な技能）
- 「～みたい」「まるで～だよ」「すごいな」「いいな」と味わう姿　（鑑賞の能力）

これらの資質や能力などの働きにより、子どもが“すき”を輝かせる姿を目指します。

以上から、札幌市造形教育連盟の研究主題を

「“すき”が輝く造形活動」

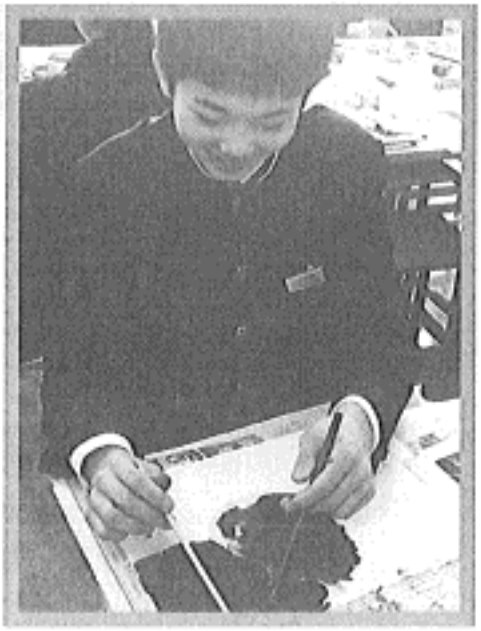
と設定しました。本大会では、札幌市造形教育連盟の研究主題を大会の授業テーマとし、授業づくりを行います。

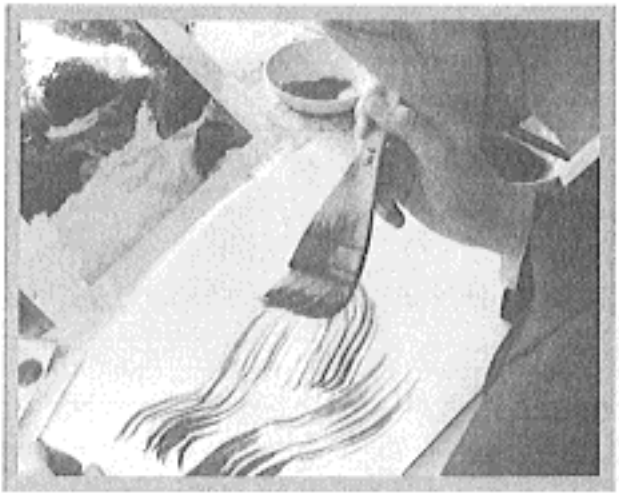
“すき”が輝く姿

・光を透過させる方法を思い付いたり考え付いたりする姿（発想や構想の能力）。
（2014.12 “ヒカリバ” より）

・材料の組み合わせ方を工夫し（創造的な技能）、光と影の美しさを求める姿。
（2014.12 “ヒカリバ” より）

・様々な表現方法を主体的に試す姿（造形への関心・意欲・態度）。
（2015.2 “書を描へ繋ぐ” より）





・思い付いた技法を基に、自分の表現意図に合わせて、筆の使い方を工夫しながら、表現を追求する姿（創造的な技能）。
（2015.2 “書を描へ繋ぐ” より）

3　授業テーマの具体化に向けた、授業づくりの視点について

視点１　シコウが生まれる題材の工夫

「どんな形がいいかなぁ」「ここは何色にしようかな」「なんかきれい」と、子どもは思い、考えながら表したり、対象からよさや美しさなどを感じたりします。

子どもが自分の思いをもって表したいことを考えたり、感じたことから自分なりの見方や考え方を深めたりすることを、思考する姿と捉えます。この姿は、子どもの視線やつぶやき、材料や場所などとの関わり方、具現化していく表現（作品）などから汲み取ることができます。そして、思考することで子どもの“すき”が輝くと考えます。

このような姿を目指し、研究の視点１を「シコウが生まれる題材の工夫」としました。

この「思考」を支えるために「ワクワク（嗜好）」「試し（試行）」「目的意識（志向）」を大切にした題材の工夫と環境構成を行います。

題材の工夫

○思考…子どもが「こうしたい」「こうあったらいいな」という自分なりの思いを基に表したいことを考えたり、感じたことから見方や考え方を深めたりする題材を設定する。

・ワクワク（嗜好）
子どもがワクワクするような、魅力ある題材との出合い方を設定する。

・試し（試行）
表し方や見方をいろいろと試したり、工夫したりできる場などを構成する。

・目的意識（志向）
目的や憧れをもって取り組めるように、活動のねらいを明確にする。

※題材の工夫が機能的に働くための環境の構成を行います。

・自分が表したいことを思い付く姿（発想や構想の能力）。
・墨がかすれるように、筆の水分を考えながら描く姿（創造的な技能）。

・プラコップを何度も並べかえ、LEDライトの照らし方を工夫する姿（創造的な技能）。
・表したい影や光の強さを思い付く姿（発想や構想の能力）。

自分の思いを基に、自己決定をする姿を大切にした授業を展開します。そのことにより、子どもが「やってみたい」「こうしたい」「もっと～したい」という思いをもち、表したいことを考えたり、感じ取り方を深めたりしながら追求する姿を目指します。

校種ごとの、シコウが生まれる姿

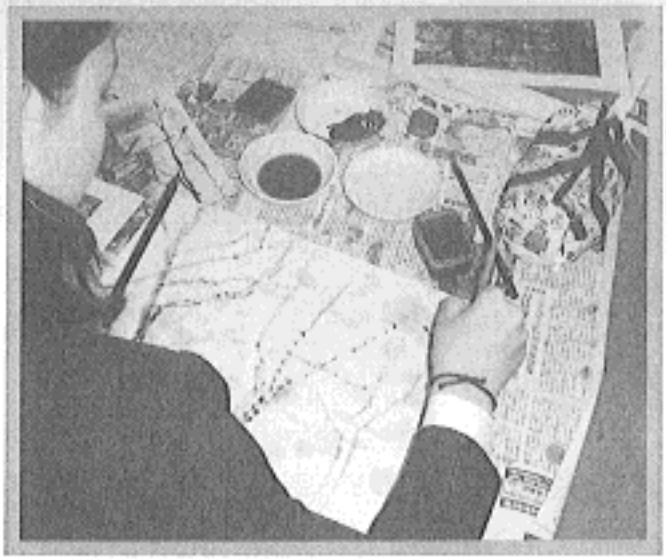
幼稚園

・細く切られた紙のふわふわとした感触を楽しみながら「どんな味のスパゲティをつくろうかな」と、思いを膨らませる姿（ワクワク）。

小学校

・球の形を表すために、用具の使い方を試し、石をカップに入れて固定しながら石の削り方を工夫する姿（試し）。

中学校



・筆につける墨と水とのバランスを調整するなど、自分が見付けた表現方法を使い、主題をより効果的に表す姿（目的意識）。

視点２　響き合いが生まれる場所・場面の工夫

授業では、周りに友人や教師などの他者がいます。その中で子どもが、他者と協働しながら新たな意味や価値を生み出す姿を目指します。そこで、刑部育子氏が著書で述べている『「表現者」であることは同時に『鑑賞者』を意味し、表すことと受け止めることの中で、違いを排除せずにつながりあえる関係性から成る学び』[*2]が生まれるような場所や場面を考えます。そのようにすることで、他者と思いや活動を共感し合ったり、互いの創造活動のよさや美しさなどの共通点や相違点を認め合ったりして、自分の表現や感じ方を深める姿を目指します。そして、これを「響き合いが生まれる姿」とし、響き合いが生まれることで子ども一人一人の“すき”がさらに輝くと考えました。

このような姿を目指し、研究の視点２を「響き合いが生まれる場所・場面の工夫」としました。他者と関わり、見たり・感じたりすることを通して、「響き合い」が生まれる姿を目指します。

場所・場面の工夫

・思いや願い	・ひらめき	・工夫
友人の活動から、「やってみたい」「こうしたい」という思いや願いをもつ。	友人の活動のよさや面白さなどから、表したいことを生み出したり、深めたりする。	友人の活動のよさなどを取り入れることで、自分の表現を追求したり、深めたりする。

・見る、感じる…鑑賞の能力を働かせながら、自他の表現からよさや美しさなどを感じる。

・題材の提示や学習課題の投げ掛けなど ・場所の設定	・イメージの根拠の理解 ・吟味・精選された材料の種類や数 ・関わり合いを生む場所	・他者からの承認や評価 ・試しを保障するための十分な材料や時間、場所など ・自分の表現の追求

※場所・場面の工夫が機能的に働くための環境の構成を行います。

光の当て方や箱の置き方を変えると、イメージが変わるね！

・LEDライトと、プラコップ、白い箱を組み合わせて投影された光と影のよさや美しさを共感する姿（鑑賞の能力）。

・友だちの筆使いを参考に、墨と水の量の調整や、筆の運び方などを自分の表現に取り入れる姿（創造的な技能）。

２本の筆を使って描くと、墨の微妙な濃淡が表現できるのか。

以上のように創造活動を他者と認め合い、深め合うようにすることで、いくつもの“すき”が響き合い、さらに一人一人の“すき”が輝く姿を目指します。

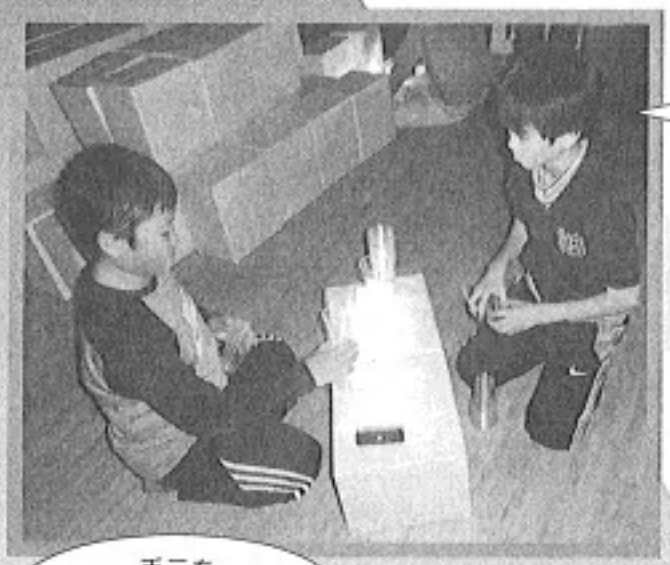
校種ごとの、響き合いが生まれる姿

幼稚園

ここにもお家を
たててみようよ！

・同じ画面に書き込むことで、友人との対話が生まれ、「もっとこうしてみたいな」と、思いを広げる姿（思いや願い）。

小学校



その積み方面白いね。
もっとたくさん積んで、
照らしてみようか！

・材料や用具を共有することで、互いの表現のよさを感じ、新たな表現方法を思い付く姿（ひらめき）。

中学校

手元を
じっと見つめて

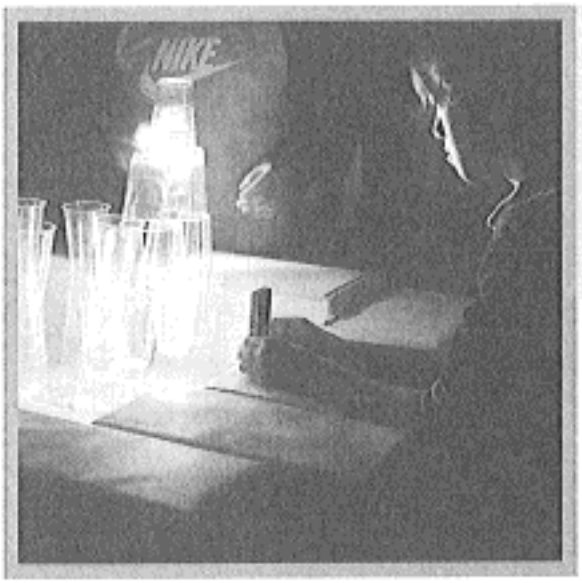
・４人のグループごとに活動する場の設定を行うことで、友人と表現のよさを共感しながら、自分の表現に生かす姿（工夫）。

4　視点が機能的に働くための環境の構成について

環境の構成

環境の構成において重要なことは、その環境を具体的なねらいや内容にふさわしいものとなるようにすることと考えます。子どもの中に「シコウ」や「響き合い」が生まれるためには、場や空間、物や人、身の回りに起こる事象、時間などを関連付けて、子どもが具体的な資質や能力を発揮するために必要な経験を得られるような環境の構成が大切であると考えます。

子どもの“すき”が輝くためには、前述した２つの視点がより機能的に働くような環境の構成が不可欠です。環境とは物的な環境だけでなく、教師や友人との関わりを含めた状況すべてと捉えます。



・プラコップとLEDライト光の光を使った造形遊びの活動において、光と影の投影面として白い箱を準備した。そうすることで、プラコップを組み合わせてできた形を様々な投影面に映し出す中で、LEDライトの光の当て方を色々と試しながら、光のよさや美しさを追求する姿が見られた。

・筆や、絵皿などの用具の数をあえて限定することで友人と用具を共有し、その中での友人との必然的なかかわりを通して響き合いが生まれ、友人の表現のよさや美しさを感じたり、自分の表現に生かそうとする姿が見られた。

指導計画を作成する際には、環境構成図として指導案に位置付けます。環境の構成図には、主に場所や物の配置などの空間にかかわるものについて、教師の手立てと目指す子どもの姿を併せて記述します。そのことにより、目指す子どもの姿に向かうように活動範囲や机の配置などといった場所や、材料や用具の種類や数、置き場所などを吟味することができると考えます。

5　研究仮説の設定と検証に向けて

【研究仮説】

〈北海道造形教育連盟の研究主題に向けた仮説（上位仮説（仮））〉

子どもたち一人一人の“すき”が輝く造形活動を展開すれば、「“わたし”を創る」授業が実現できるであろう。

〈札幌市造形教育連盟の研究主題に向けた仮説（下位仮説）（仮）〉

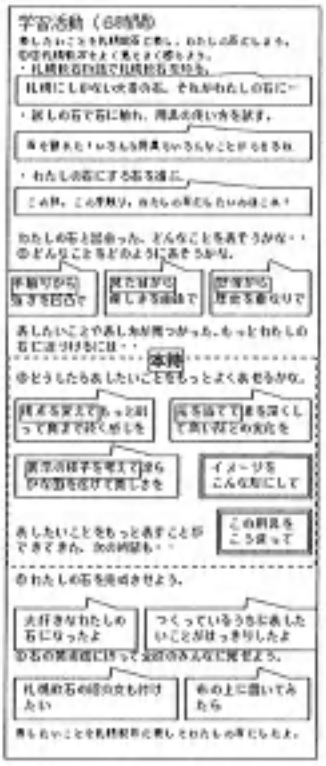
“シコウ”と“響き合い”が生まれる授業を展開すれば、子どもたちの“すき”が輝く姿として現れるであろう。

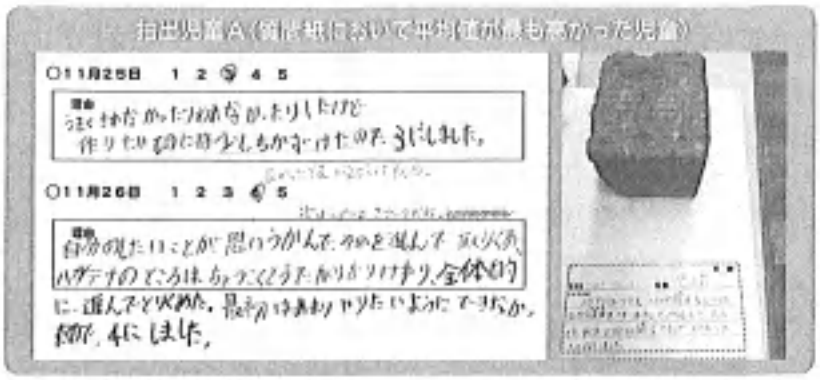
【研究仮説の検証に向けて（検証の方法）】

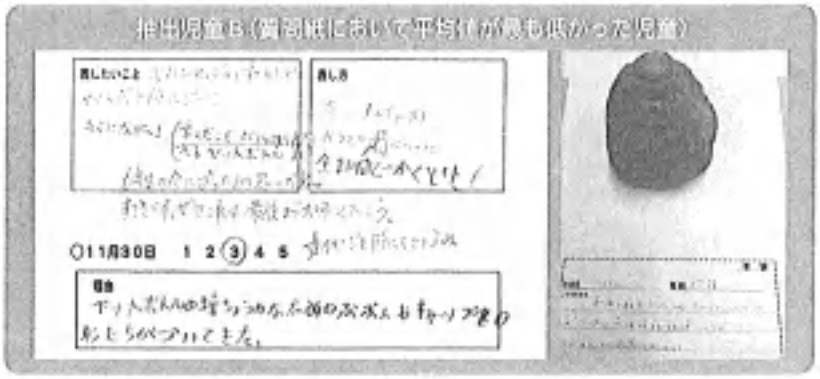
(1)　授業後の研究協議での討議の柱を“シコウ”と“響き合い”とし、それらの視点と子どもたちの“すき”が輝く姿との関連性について検討する。

(2)　研究授業の前後に、子どもたちを対象とした２つの視点に関する意識調査を行い、その推移や作品、ワークシートの記述から総合的に授業効果を検討する。

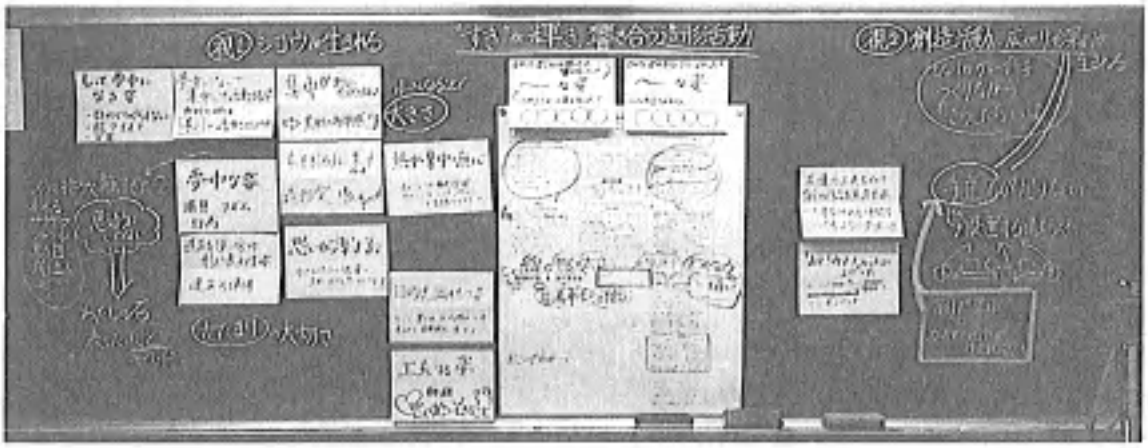
【研究授業の概要】







【仮説検証(1)】授業後の研究　協議より～視点毎に○成果と●課題



《視点１　シコウが生まれる題材化》

○導入の工夫で、石彫や札幌軟石と子どもとの出合いを生む。

⇒イサムノグチと安田侃の石彫刻の比較鑑賞、札幌軟石物語

○子どもが夢中になって素材に向かう姿があった。

⇒札幌軟石の素材感・抵抗感○、道具の準備○

●目的意識をもって、さらに工夫する姿に！　⇒「表したいこと=思い」をさらにふくらませたいが、素材の抵抗感が強くて「できること」に制限がかかってしまう。

《視点２　響き合いが生まれる学習展開》

○隣のグループの子との相談が自然に行われていた。⇒表現の場の構成

●鑑賞コーナーをほとんどの子が活用していなかった。

●自分の表現を見直す姿、互いによさを交流する姿が少なかった。

⇒石を加工する行為には夢中になっていたが、自分の思いを表すことにはまだ夢中になれていなかったのではないか。

⇒本時場面を何時間目に設定するかという問題もある。

【仮説検証(2)】

「シコウ（視点１）」と「響き合い（視点２）」について質問紙を作成して、授業の前後に調査して、両者を比較しました。下の表１が質問項目とその結果です。

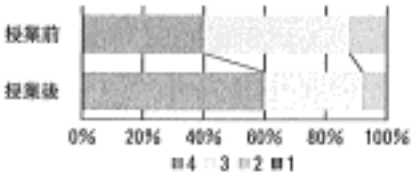
【表１】「授業前と授業後の図画工作（美術）の授業に対する意識調査及び結果」

	番号	質問項目	授業前平均		授業後平均
	1	材料の形や色を生かして、表したいことを考えたり、工夫したりすることがある。	3.20	−	3.24
	4	「こうしたい」「こうなったらいいな」などの想いを持つことがある。	3.24	・	3.52
視	8	表したいことについて、じっくりと考えることがある。	3.28	・	3.04
点	10	材料や題材との出会いにワクワクすることがある。	3.12	・	2.96
1	12	表したいことに合わせて、自分なりに工夫したり試したりすることがある。	3.20	−	3.17
	7	表したいことをはっきりとイメージして、活動に取り組むことがある。	2.29	・	3.00
	14	できるところまでは「一人でやりたい」と思うことがある。	3.56	−	3.60
視	5	友達と同じところやちがうところなどを認め合うことがある。	3.24	・	3.32
点	9	友達の作品から受けた印象やアドバイスをもとに、表したいことを考えたり、工夫したりすることがある。	3.12	・	3.20
2	13	友達や先生との関わり合いから、自分では気づけないことに気づくことがある。	3.36	−	3.40
	2	難しい課題にもチャレンジしたいと思うことがある。	3.04	・	3.12
共	3	授業が始まる前から取り組みたいと思うことがある。	3.00	・	3.16
通	6	もっとこの授業が続けばいいのにと思うことがある。	3.56	・	3.24
	11	「もっと描き（つくり）たい」「もっと観たい」などと思うことがある。	2.96	・	3.20

（４あてはまる－３まああてはまる－２あまりあてはまらない－１あてはまらない）

○　研究授業の前後における意識調査の人数比較から

【図１】
質問４「こうしたい」「こうなったらいいな」などの想いを持つことがある。



【図２】
質問６　もっとこの授業が続けばいいのにと思うことがある。

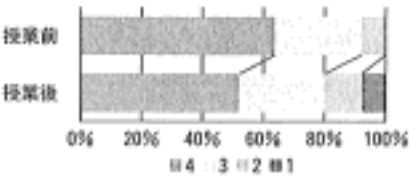


図１の質問４に関しては、１を選択する児童が日常的にいない状況にも関わらず、４を選択した指導の増加が２割程度見られます。研究の視点１で示した「シコウが生まれる題材化」に対する成果と捉えることができます。

その一方で、図２の質問６は解答の散らばりが見られました。４を選択した児童は半数程度いるものの、下位の評定を選択する児童の増加が見られます。また、表１の質問10の「材料や題材との出会いにワクワクすることがある」において、平均値の低下と分散の縮小が見られます。

これらのことから考えても、本調査では、児童の「願い」についての効果は見られたものの、それらを実現させていく過程において、特に下位の児童の形態や量感の追求の場や時間の保障が十分ではなかったと考えることができます。

【授業者より～本題材を終えて】

札幌という街に暮らし、ここにしかない札幌軟石という素材に触れたこと。また、石という決して可塑性の高くはない材料に道具を当て、自分の形に変えたこと。これらは、子どもたちにとって大きな経験であった。簡単に思い通りにできるものやことは子どもたちの周りに溢れている。簡単なものやことを扱って、自分の思い通りの結果が生まれると嬉しさを感じ、思い通りにならなければ面白くない、という状態がこの題材に取り組む前の子どもたちであった。この姿が、札幌軟石と子どもたちとを引き合わせたいと、私を動かす原動力となった。

「この一打でもしかしたら割れてしまうかもしれない。」と分かっていながら、ぎりぎりのところをノミでたたく姿。そして、やはり割れてしまった石から新たな形を思い付いてさらにつくる姿。こうした姿は、思い通りにいかないことをも受け入れ、乗り越えて自分の形を追求しようという気持ちの表れであった。身近な自然であり、自分たちの街の文化の一部である材料に、自分の思いを表すという造形活動は、何事にも代え難い経験であったと考える。

【成果と課題】

【成果】

○札幌軟石という、地域に身近な素材を扱うこと自体に価値がある。

○授業公開と研究討議、質問紙、担任による子どもの見取り等…様々な方法を用いて、子どもたちの“すき”が輝く造形活動の成果と課題を明らかにすることができた。

○意識調査の集計及び比較の結果、「シコウ（視点１）」では質問４と７、「響き合い（視点２）」については質問５、９、13、共通では質問２、３、11で、授業後の平均数値が上がっているため、本題材は、対象学級の子どもたちの“すき”が輝く姿の実現に向けて、一定程度の効果があったと言うことができる。

○題材全体を通して、視点２に一定程度の成果が見られた。

【課題】

○研究授業後の討議では、視点２の課題面が出ていた。しかし、質問紙結果から、視点２に成果があったということは、研究授業の公開場面を研究局が見誤った可能性がある。子どもの“すき”が輝く姿が最も顕著に現れる場面はいつかを吟味する必要がある。

○質問紙の平均が下位の児童に対する手立ての構築が必要である。

○意識調査の質問項目の妥当性の検討は、継続的に取り組む必要がある。

○今回の検証は、図画工作科全般に対する意識がもともと高い特定の集団を対象とした「立体で表す（札幌軟石）」の授業に対する取組であるため、他の集団や領域への適応の汎用性については未知数である。

研究構造図

〈北海道造形教育連盟　研究主題〉

“わたし”を創る
～ 今を生きる、共に生きる造形教育 ～

〈研究仮説（上 位 仮 説）〉

“すき”が輝く造形活動を展開すれば、子どもたちは「“わたし”を創る」だろう。

〈研究主題（授業テーマ）〉

“すき”が輝く造形活動

〈研究仮説（下 位 仮 説）〉

シコウと響き合いが生まれる授業を展開すれば、子どもたちの“すき”が輝く姿になるだろう。

《“すき”が輝く姿》
子ども一人一人が感性を働かせて自分にとっての“すき”を表したり、感じたりする姿

《“すき”とは》
◇よさ
◇美しさ
◇面白さ
◇楽しさ
◇快さ
◇心地よさ
◇望ましさ
◇憧れ
など

授業の視点 1

シコウが生まれる題材の工夫

- 子どもが「こうしたい」「こうあったらいいな」という自分なりの思いを基に、表したいことを考えたり、感じたことから見方や考え方を深めたりする題材を設定する。（思考）
- 子どもがワクワクするような、魅力ある題材との出合い方を設定する。（ワクワク）
- 表し方や見方をいろいろと試したり、工夫したりできる場などを構成する。（試し）
- 目的や憧れをもって取り組めるように、活動のねらいを明確にする。（目的意識）

授業の視点 2

響き合いが生まれる場所・場面の工夫

- 鑑賞の能力を働かせながら、自他の表現からよさや美しさなどを感じるようにする。
- 友人の活動から、「やってみたい」「こうしたい」という思いや願いをもつようにする。
- 友人の活動のよさや面白さなどから、表したいことを生み出したり、深めたりするようにする。
- 友人の活動のよさなどを取り入れることで、自分の表現を追求したり、深めたりするようにする。

視点が機能的に働くための環境の構成

目指す授業像
“すき”が輝く造形活動

“すき”

うれしいな

思考
目的意識
（志向）

ひらめきや工夫の響き合い
- 評価（自己、他者、相互）
- 思いを作品カードに
- 作品の展示の工夫
- 振り返り

もっとしたい

思考
試し
（試行）

工夫の響き合い
- 他者からの承認や評価、試しを保障するための十分な材料や時間、場所など
- 自分の表現の追求

こうしてみたい

思考

ひらめきの響き合い
- イメージの根拠の理解
- 吟味・精選された材料の種類や数
- 関わり合いを生む場所

やってみたい

思考
ワクワク
（嗜好）

思いや願いの響き合い
- 題材の提示や学習課題の投げ掛けなど
- 場所の設定

“すき”

見合う、感じ合う
鑑賞の能力を働かせながら、自他の表現からよさや美しさなどを感じる。

子ども主体の造形活動にするために、私たち教師が大切にすること

- 「つくりだす過程を大切にします！」
- 「子どもが学び合うことを大切にします！」
- 「子どもの思いを大切にします！」
- 「どのような力を育てたいのかを明確にします！」
- 「子どもの力を信じます！」

参考文献
「幼稚園教育要領解説」　「小学校学習指導要領解説　図画工作編」　「中学校学習指導要領解説　美術編」
引用文献
※1　「造形のABC」、阿部宏行、日本文教出版、2013年
※2　「ワークショップと学び2：場づくりとしてのまなび」、刑部育子、東京大学出版会、2012年

MEMO

大会指導案

題材名	指導学年	提言者
子どものまなざしで ～造形遊び・ごっこ遊び～	３歳児　２２名 ４歳児　２４名 ５歳児　３５名 計　８１名	札幌市立白楊幼稚園 上田　克美（うえだ　かつみ） 造形活動で大切にしていること 「子どもの思いを受け止める」

視点１ シコウが生まれる題材化の工夫

◆思わず自分の気持ちを表したくなる状況づくり。

◆やりたい、表したいと思った時にすぐに実現できるような環境構成。

◆自分のイメージに合った材料、用具を選択できるような環境構成、経験の積み重ね。

◆じっくりと楽しんだり、繰り返し取り組んだりできる場や時間の保障。

◆遊びに必要な物を自分でつくったり、目的に向かって試行錯誤したりする経験を積めるように。

◆子どものイメージを十分に認め、実現できるよう支える教師の関わり。

◆多様な発見、驚きに出会い、イメージを豊かにしたり、素材経験が豊かになったりする自然との関わり。

目指す子どもの姿

安心して自分の思いを表し、友達と一緒に遊ぶ楽しさや充実感を味わう子ども。

白楊幼稚園で大切にしていること

○“自己の思いを表すこと”が自然にできるようにする。

○生活の中で、感じたことを表現する機会をつくる。

○幼児一人一人のどんな表し方も受け止める。

＜造形活動にかかわる遊び＞

【３歳児】
・なっているつもり、見立て。
・つくっている中で見立てが変わる。
・教師に認められる喜びを感じる。

【４歳児】
・自分のイメージが少しずつはっきりしてくる。
・目的が明確になってくる。
・友達からの刺激や認めが自信につながる。

【５歳児】
・よりイメージ、実物に近い物をつくりたい。
・経験を生かして素材や用具を選ぶ。
・友達と考えを出し合う、工夫、試行錯誤。
・友達に認められることで、自信を深めたり、次への意欲につながったりする。

視点２ 響き合いが生まれる場所・場面の工夫

◆どのような表現もその子どもの思いとして受け止める教師の姿勢。

◆自分とは違う思い、イメージがあることに気付けるような教師の働きかけ。

◆一人一人のイメージを互いに分かり合えるような仲立ち。

◆目的を共有し、イメージを実現するために考え合う場面をつくる。

◆友達の遊び、異学年の遊びを見合えるような場の構成。

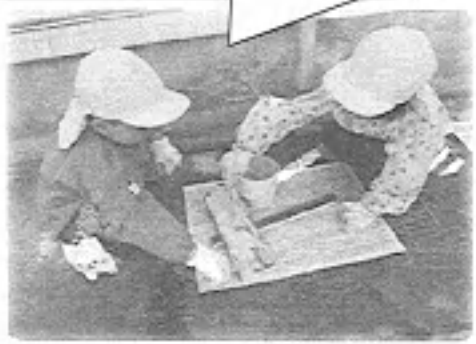
◆刺激を受けた後に、やり方を教え合えるような促し。

◆表現を見合う機会をつくる。

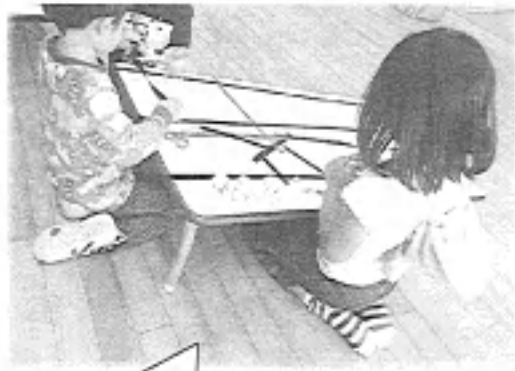
◆力を合わせる、協力する必要がある題材の提示。

遊びの様子

おいしいジュースだよ。
お客さん、来てくれるといいね！（4歳児）



自分たちで作った畑の看板だよ、おいしい野菜ができるといいね。（5歳児）



ペットボトルのキャップや芯を転がすコースだよ。（3歳児）

ドングリの迷路。僕が作ったのよりも難しいなあ。（5歳児）

僕が作ったロボットだよ。足のところが難しかったよ。（5歳児）

雪で恐竜を作ったよ。葉っぱのとげがすごいでしょ！（3歳児）

題材名	領域及び項目など / 時数	指導学年	授業者
クリスタル星の仲間たち	A表現(2) / 全4時間	札幌市立稲積小学校　第3学年 男子11名 女子14名計25名	札幌市立稲積小学校 三浦　真奈美（みうら　まなみ） 造形活動で大切にしていること： 「子どもが生き生きと表現できる授業」

子どもの実態

○様々な活動に意欲的で、驚きや感動を素直に表しながら取り組んでいる。経験を重ねることで思いを実現する方法を身に付け、つくりだす喜びをより強く味わうことができると考える。
○これまで空き箱などの身辺材は扱ってきたが、光を通す材料は初めてである。

教師の願い

○初めて出会う材料に心を動かし、工夫することで思いついたことを立体に表す喜びを味わうことができるよう期待している。
○自他の活動や作品に自分なりの価値を感じられるよう期待している。

題材設定について

○クリスタル集めや、みんなの作品を集めて展示するクリスタル星などで、「ワクワク」や「目的意識」をもてると考える。
○吸水ポリマービーズ（プニプニ）や投影台（クリスタル星）、くらやみボックスを提示することで、光を通した時の美しさや面白さを感じたり組み合わせ方を工夫したりできると考える。

題材の目標

○表したい形を考え、光を通す材料の組み合わせ方を試しながら、工夫して立体に表す。

シコウが生まれる子どもの姿

○きれい！もっと集めたい！つくってみたい！
○どんな風に切ろうかな？どんな風につけようかな？
○もっときれいにしたい！面白くしたい！
→どのように組み合わせるといいかな？

響き合いが生まれる子どもの姿

○友達と一緒にクリスタル星の仲間をつくりたい！
○友達の組み合わせ方を取り入れたよ。
○友達の作品から、新しいことを思い付いた。

＜題材の評価規準＞

【造形への関心・意欲・態度】
光を通す材料を組み合わせて立体に表すことを楽しもうとしている。
【発想や構想の能力】
光を通すと美しい形や色、面白い形や色の組み合わせを考えている。
【創造的な技能】◎
思いついたものに合わせて、材料の組み合わせ方を工夫している。
【鑑賞の能力】
友人と作品を見合うなどして、よさや美しさを感じ取っている。

視点１　シコウが生まれる題材化の工夫

◆身の回りのクリスタル集め【ワクワク】
◆くらやみボックスで試し【試行】
◆光を通す材料、暗闇、LEDライトの組み合わせ【思考】

視点２　響き合いが生まれる場所・場面の工夫

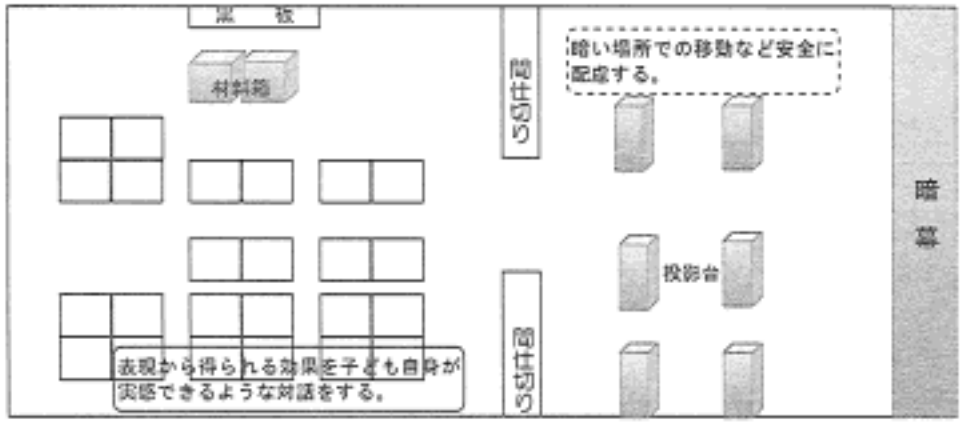
◆みんなで「クリスタル星の仲間」【思いや願い】
◆くらやみボックスで自他の作品の感じる場【工夫】
◆見合い話し合う場面【ひらめき】

題材構成：

時		活動内容及び視点１とのかかわり	評価
0	活動 視点	○身の回りのクリスタルを集めよう。 材料を集めながら、その形や色に関心をもち活動への期待をもつ。【ワクワク】	関
1	活動 視点	○材料に光を通してみよう。プニプニを入れたり形を変えたりしよう。 ・材料にLEDライトの光を通す。さらに吸水ポリマービーズを入れたり、切るなどして形を変え、いろいろな見え方を試す。 材料に光が通った時の美しさや面白さに気付く。【思考】 光が通った時に美しく見える組み合わせ方を試す。【試行】	発 技
2	活動 視点	○どんなクリスタル星の仲間にしようかな。 ・みんなの作品を集めてクリスタル星をつくることを知り、前時に試した形から思い付いたことを立体に表していく。 自他の作品をよく見たり友人と話し合ったりして、クリスタル星にいたら「きれいだな。」「面白いな。」と感じる仲間を思い付く。【目的意識】 思い付いたことを立体に表すための材料の組み合わせ方を工夫する。【試行】	発 技
3本時	活動 視点	○仲間をもっと「パワーアップ」させよう。 ・前時までの気付きを生かしたりクリスタル星（投影台）で光を通してみたりして、より美しさや面白さを表現できる組み合わせ方を工夫する。 投影台の光や友達の作品と一緒に並べた感じから、表現への思いを深めたり自分なりのストーリーを思い浮かべたりし、形や色の組み合わせを考える。【ワクワク】 暗い所で見て気付いたことから構想を練り、飾りを付けたり吸水ポリマーなどと組み合わせたりして工夫をする。【試行】【思考】	発 技
4	活動 視点	○みんなの仲間を集めて楽しいクリスタル星にしよう。 ・ワークスペースの暗い場所で友人の作品とともに展示し見合い、より美しさや面白さを表現できる組み合わせ方を工夫する。 自他の表現をよく見て思い付いたことから構想を練り、組み合わせ方を工夫する。【思考】	技 鑑

本時の環境構成図：

本時の目標にせまるための支援　　配慮事項



本時の目標：光を通して感じたことからもっと美しくなったり面白くなったりする形や色の組み合わせについて構想を練り、工夫して表す。

本時の展開：

主な学習活動	視点１・２とのかかわり
仲間をもっと「パワーアップ」させる作戦を見付けよう！ 前の時間では・・ きらきら作戦 ⇨ 切りとる　曲げる　くっつける いい形作戦 ⇨ 入れる　開く　つなげる クリスタル星に置いてみよう！ 「きれい！」　「おもしろい！」　「もっとよく見える！」	◎導入では、これまでの学習で気付いた組み合わせ方を共有し、本時の活動に生かすことができるようにする。【視点１】【視点２】
仲間をもっと「パワーアップ」させる作戦を見付けたい！ もっときらきら作戦 ⇨ 光が当たってきれいに見えるように切る。　光がたくさん当たるように曲げる。　光がよく当たる場所に付ける。 もっといい形作戦 ⇨ プニプニの色が周りに映るように入れる。　開いた所に材料を重ねる。　中身が見えるようにつなげる。 構想　前時までの気付きから　友達の表現から　暗い所で感じたことから　工夫 友達と作戦を伝え合おう！ クリスタル星で気付いた作戦で「パワーアップ」！　友達のを見て気付いた作戦で「パワーアップ」！ 仲間がもっと「パワーアップ」したね！	◎暗い所で光を通した感じから、より美しさや面白さを感じられる形や色について構想を練り、工夫して表すことができるようにする。【視点２】 ○投影台のまわりに集まった子ども同士で気付きを共有し、自分の表現に生かすことができるようかかわる。【視点２】

題材名	領域及び項目など / 時数	指導学年	授業者
ようこそ！ 空の国へ！	A表現（2）/ 全2時間	小学校　第2学年 男子17名 女子17名 計34名	札幌市立星置東小学校 篠原　貴（しのはら　たかし） 造形活動で大切にしていること： 「子どもの心に寄り添う！」

子どもの実態

○新しい題材に興味をもって取り組むことができる。
○発想が豊かで、自分の思いをのびのびと表現することができる。
○友達の活動のよさを取り入れようとする。

教師の願い

○自分の雲から思いを広げ、自分の描きたいものを見付け出す姿や、友達の表現を見て自分のよさに気付く姿、透明なビニールにクレヨンで描く心地よさを感じながら自分の表現に夢中になる姿を期待している。

題材設定について

○自分の雲を透明シートに描く。
○ビニールシートに直接描き込むことで自分や友達の描いた雲などの重なりを楽しむ。
○透明で大きなビニールシートに空の国を描く面白さを味わうことができるようにする。

題材の目標

○雲の中からどんなものが現れたら楽しいか想像を膨らませながら、自分の表現を広げる。

シコウが生まれる子どもの姿

○自分の雲も友達の雲もきれいだな。どんなものがあったら楽しいかな。

○どんなものが、どんな風に雲から出てきたら楽しいかな。

○空の国をもっと楽しい場所にしたいな。

響き合いが生まれる子どもの姿

○自分の描いたものを動かして、友達の雲へ遊びに行きたいな。
○友達の雲の隣に描いてみたいな。
○友達のシートと自分のシートを繋げて描いてみたよ。
○友達の作品を見て、描きたいものがもっと思い付いたよ。

＜題材の評価規準＞

【造形への関心・意欲・態度】
雲から想像したことを、絵に表すことを楽しもうとしている。
【発想や構想の能力】◎
自分の雲の形や色から、出てくるものや空にあったらいいものを考え付いている。
【創造的な技能】
表したいことに合わせて、表し方や材料の使い方を工夫している。
【鑑賞の能力】
自分や友達の描いた絵を見て、想像したことを話し合い、互いの作品の面白さを感じ取っている。

視点１　シコウが生まれる題材化の工夫

◆空の国【思考】
◆空に浮かぶ透明なビニールシート【ワクワク】
◆重ねたり動かしたりできる自分のシート【試し】

視点２　響き合いが生まれる場所・場面の工夫

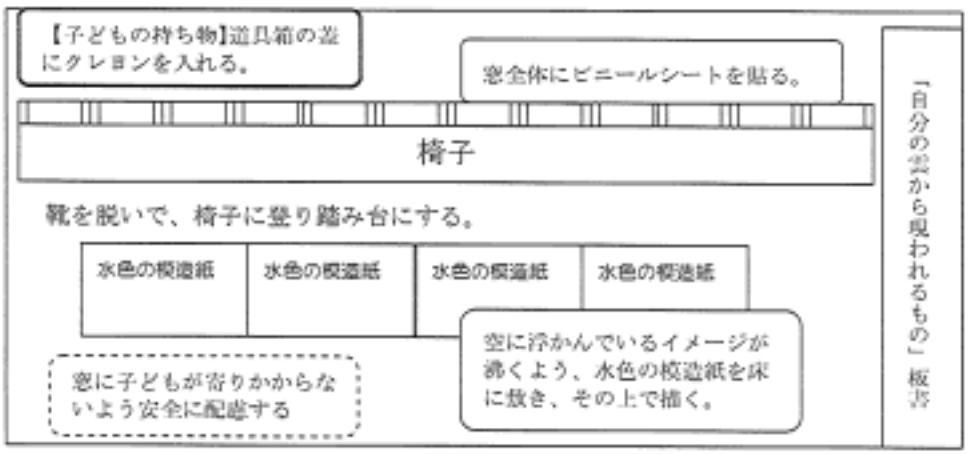
◆１枚のビニールシートで、友達の雲との重なり【思いや願い】
◆友達の活動が見える透明シート【工夫】

題材構成：

時		活動内容及び視点１とのかかわり	評価
1	活動	○空の散歩に行こう。（学校の屋上） ○自分のビニールシートに、自分の雲を描いてみたいな。 ・クレヨンで自分のシートに雲を描く。 ○雲からどんなものが現われたら楽しいかな。	関心・意欲・態度
	視点	○雲などから現われたら楽しいものを考え付く。 【視点１（ワクワク）】	
2 本時	活動	○空の雲からどんなものが現われたら楽しいかな。 ・大きなビニールシートにみんなの雲が貼られているのを見て、雲から出てくるものを更に想像しながら描く。 ○自分のビニールシートに描き込みながら、友達の作品と繋げたり、自分だけの雲から表われたら楽しそうなものを描き加えたりする。 ・自分のビニールシートに直接描き込む。	技能
	視点	○自分のビニールシートを、大きなビニールシートに重ね合わせたり、自分のビニールシートに描き込んだり、試しながら大きさや色、形を工夫したりする。 【視点１（試し）】	

本時の環境構成図：

本時の目標にせまるための支援　　配慮事項



本時の目標：空に浮かんだ自分や友達の雲を見て、形や色をもとに雲に隠れているものや空にあったらいいものを表現しながら、想像を広げている。

本時の展開：

主な学習活動	視点１・２とのかかわり
自分の雲から現われたら楽しいものを空に浮かべよう！ 自分の雲の上に車があるよ。 友達の雲は素敵だな。繋げたいな。 自分の雲はもっと高いところにあったらいいな。 **ほんとに空に浮かんでいるみたいだな！もっと描きたいな！** 三角の雲だからおにぎりが飛び出してくるよ！ 青い雲だから海の生き物を描いてみたいな！ 空のお家があったらいいな！ 宇宙まで行けるロケット！ 「友達の雲からどんなものが出てきそうかな？」 **大きなビニールシートに直接かいてみたいな！** 友達の隣に自分をかきたいな！ 空にかかる虹を友達の雲と繋げてみたいな！ 素敵なお城ができたよ！ お菓子屋さんがあったらいいな！ **発想**　重ねて見える色から 友達の表現から 自分だけのシートから　**工夫** **みんなの雲から楽しい空の国ができたね！**	大きなビニールシートに自分の雲が貼られているのを見て、雲から出てきたら楽しそうなものを描いてみたいという思いをもつようにする。【視点２】 透明シートを窓に貼っておくことで、自分だけのシートを貼ったり重ね合わせたり、移動させたりして工夫できるようにする。【視点１（試し）】 水色の模造紙（空の世界）の上で描き、友達との自然な関わり合いが生まれるようにする。【視点２】

題材名	領域及び項目など / 時数	指導学年	授業者
感じて！ ココロの形・色	B鑑賞 / 全３時間	小学校　第３学年 男子１６名 女子１７名 計３３名	札幌市立円山小学校 菊地　惟史（きくち　ただふみ） 造形活動で大切にしていること： 「子どもたちの瑞々しさを大切に」

子どもの実態

○意欲的で、発想力の豊かな子どもが多い。
○２年生から、近代美術館と連携した鑑賞学習に取り組んできている。
○形や色の要素などの根拠を示しながらの鑑賞活動の経験は少ない。

教師の願い

○２年生から取り組んできた一連の鑑賞活動に、さらに親しみをもつことを期待している。
○形や色の要素から感じることが一人一人違い、そこに面白さを感じることを期待している。

題材設定について

○抽象的な絵画を鑑賞することで、子どもたちは形や色に着目し、イメージを広げていくことができる。
○近代美術館の作品を用いることで、鑑賞がさらに身近なものとなる。

題材の目標

○作品の形や色の特徴や、表現活動の経験からイメージを広げ、感じたことや考えたことを話し合うことを通して作品のよさや面白さを感じ取る。

シコウが生まれる子どもの姿

○なんだか不思議な絵だな。どんなことを表しているのだろう。もっとよく見たいな！

○僕のココロカードとここが似ているから、この絵は・・・ということを表していると思うよ。

響き合いが生まれる子どもの姿

○友達のココロカードを見たり、話しを聞いたりしたら、別の見方を思い付いたよ！

○友達の話を聞いていたら、もっといろいろな想像ができるような気がするよ。もっとよく見たいな！

○いろいろな感じ方があるね。

＜題材の評価規準＞

【造形への関心・意欲・態度】
楽しみながら作品を鑑賞し、自分なりの見方を見付けようとしている。
【発想や構想の能力】
色の特徴からイメージを広げ、作品の表していることを考えている。
【創造的な技能】
「ココロカード」での自分の表現と作品の表現を結び付けている。
【鑑賞の能力】◎
友達と見方を話し合いながら、作品の面白さを感じ取っている。

視点１　シコウが生まれる題材化の工夫

◆馴染みのある近代美術館の作品で、あまり馴染みのない抽象画【嗜好】
◆ココロカードによる表現の経験と、作品の形・色から【思考】

視点２　響き合いが生まれる場所・場面の工夫

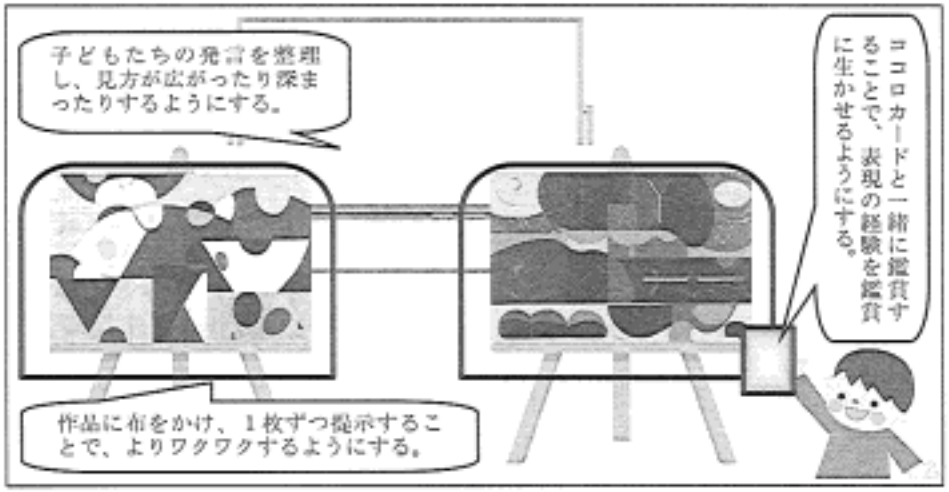
◆ココロカードと一緒に、自由に鑑賞【ひらめき】
◆イメージの言語化・交流【工夫】

題材構成：

時		活動内容及び視点１とのかかわり	評価
1・2	活動	○「ココロカード」をつくろう！ ・小さな画用紙に絵の具を自由にぬる。 ・できた形や色から「ココロカード」に名前を付ける。 ・「ココロカード」をたくさん集めて、ココロカードコレクションをつくる。	関技
	視点	・つくったココロカードの色に名前を付けることによって、色に対する感覚を豊かにし、表現の経験とつなげながら鑑賞することができるようにする。	
3 本時	活動	○近代美術館の作品をみてみよう！ ・「二月」及び「八月」を鑑賞し、見つけたことや気付いたことを交流する。 ・２枚の作品の、形や色の要素を比較しながら鑑賞する。 ・前時につくった「ココロカード」と比べて見ることで、どんなことが表されているのか考える。	関鑑
	視点	・ココロカードを持ちながら鑑賞することで、表現の経験も根拠にしながら作品の鑑賞をできるようにする。	

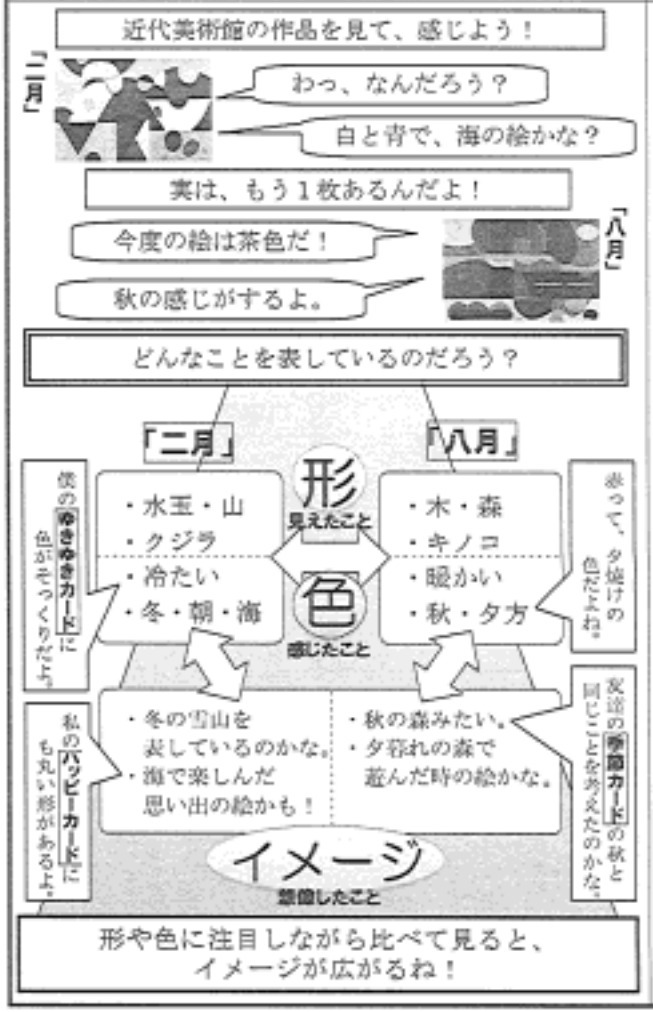
本時の環境構成図：

本時の目標にせまるための支援　　配慮事項



本時の目標：「二月」「八月」を鑑賞する活動を通して、「ココロカード」と比べながら作品の形や色の特徴からイメージしたことや考えたことを話し合い、作品のよさや面白さを感じ取っている。

本時の展開：

主な学習活動	視点１・２とのかかわり
	作品に対する率直な印象を取り上げることで、作品の面白さに気付くようにする。【視点１（ワクワク）】 ２枚の作品を自由に鑑賞しながら、見付けたことを友達と話し合う場を設定することで、自分なりの見方を思い付くことができるようにする。【視点２（ひらめき）】 自分のココロカードを意識しながら鑑賞するように関わることで、表現の経験も根拠にしながら作品について考えるようにする。【視点１（思考）】 全体交流の場面を設定し、形・色に焦点を当てながら子どもたちの考えを整理することで、感じたことやイメージしたことについて根拠をもって話し合うことができるようにする。【視点２（工夫）】

題材名	領域及び項目など / 時数	指導学年	授業者
つないでいくと…	A表現(1) / 全2時間	小学校　第3学年 男子17名 女子15名 計32名	札幌市立伏見小学校 佐藤　和音（さとう　かずね） 造形活動で大切にしていること： 「子どもの思いを受け止めること

子どもの実態

○自分の思いを、自信をもって表現する。
○自分の表現を「もっと」よりよくしようと追求する力に課題がある。

教師の願い

○材料をつないでいくことによって生まれる様々な形から活動の面白さを感じ、材料や場所を基に、様々なつなぎ方を思い付き、楽しさを共有する姿を期待している。

題材設定について

○材料は適度な抵抗感がある扱いやすい竹ひごとスチロールにした。つなぎ方によって様々に形が変わるため、変化を楽しみながら場所全体を生かし、発想を膨らませて活動することができると考えた。

シコウが生まれる子どもの姿

○ 竹ひごは柔らかいから、曲げて刺したら面白い形ができそうだぞ。

○上の方に高くしていきたいけど、うまく高くならないぞ。友達と協力したり、つなぎ方を工夫したりしないといけないな。

○ゆらゆら揺れる感じを生かしてみたいな。

題材の目標

○竹ひごとスチロールをつないでいく活動を通して、材料や場所の特徴を生かしながら自分なりのつなぎ方を思い付いて表す。

響き合いが生まれる子どもの姿

○友達がつなぎ方を工夫して、面白い形をつくっていたぞ。自分もやってみたいな。

○友達とつなげ合うことで、やってみたいことがどんどん思い浮かんでくるよ。

○椅子やテーブルの上にも置いてやってみようよ。

＜題材の評価規準＞

【造形への関心・意欲・態度】
材料や場所を生かし、友達と楽しさを共有しながら、自分が表したいことに向かって活動に取り組もうとしている。
【発想や構想の能力】◎
材料や場所とかかわり合いながら、自分なりのつなぎ方を思い付いている。
【創造的な技能】
材料や場所の特徴を生かしながら、竹ひごとスチロールのつなぎ方を工夫している。
【鑑賞の能力】
自分や友達のつなぎ方の面白さを感じ取っている。

視点１　シコウが生まれる題材化の工夫

◆竹ひごとスチロール【ワクワク・試し】
◆長さや太さが違う竹ひご【思考】

視点２　響き合いが生まれる場所・場面の工夫

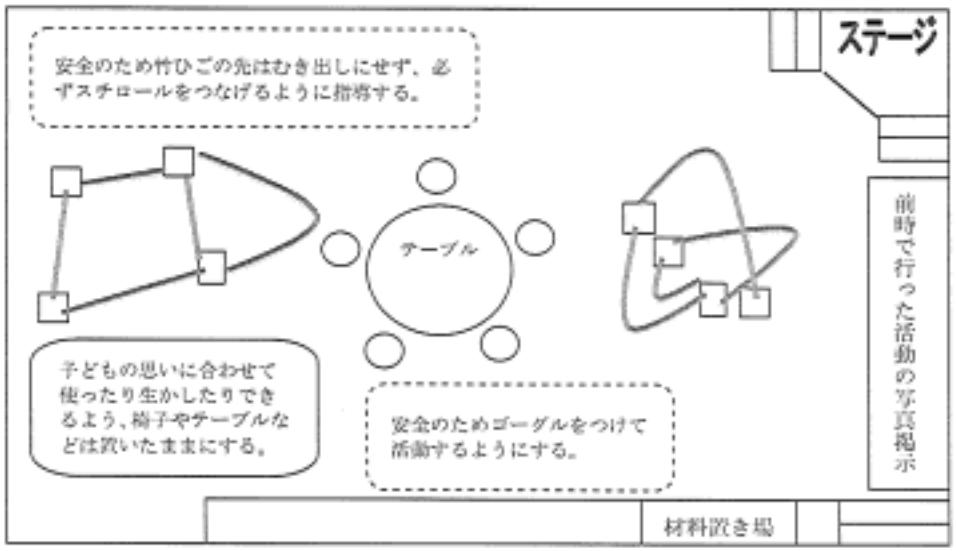
◆前時の活動写真の提示【思いや願い】
◆適度な広さの場【ひらめき・工夫】
◆材料置き場の設定【思いや願い】

題材構成：

時		活動内容及び視点１とのかかわり	評価
1	活動	○竹ひごとスチロールをつないでいくと、どんな形ができるかな ・竹ひごとスチロールをつなげていく活動を楽しみながら、材料の特徴を掴んだり場所を生かしたつなぎ方の面白さを感じたりする。	発技
	視点	・短い竹ひご２種類（太い・細い）とスチロールをつないで、表れる形や場所を生かしたつなぎ方を楽しむことができるようにする。【試し】	
2 本時	活動	○長さが違う竹ひごも組み合わせてつないでみよう ・前時で掴んだ材料の特徴や場所を生かしたつなぎ方を振り返り、大きさの違う材料や新たな場所でどんなことができそうか考え、活動の見通しをもつ。 ○いろいろなところから見て、オススメの見え方の場所を見付けよう ・離れて、下からなど視点を変えて活動を振り返ることで、場所の様子が変化したことを感じたりや自他のつなぎ方のよさや面白さを深めたりする。	発鑑
	視点	・さらにどんなつなぎ方ができそうかという思考を働かせるために、長さの違う竹ひごを用意する。【思考】	

本時の環境構成図：

本時の目標にせまるための支援　配慮事項



本時の目標：長さの違う竹ひごとスチロールをつないでいく活動を通して、材料や場所の特徴を生かしながら自分なりのつなぎ方を思い付いている。

本時の展開：

主な学習活動	視点１・２とのかかわり
曲げてつなげると面白い形ができたよ。 机から机に橋をかけるみたいにつないでみたよ。 **新しい場所で長さの違う竹ひごも組み合わせてつないでみよう！** 長い竹ひごだったら大きな形ができそうだぞ。 ステージの段差を使ったらどんなことができるかな。 **もっといろいろなつなぎ方をやってみたい！** 思考の連続：長い竹ひごで前回やった形をつくってみよう。／段差を上るようにつないでみよう。／次はどんな風につなげていこうかな。／長い短いと順番につないでみよう。／ステージの上で高くつないでみよう。 面白い形ができてきたぞ もっとつなげてみよう！ **面白い形ができるつなぎ方をたくさん思い付いたね。** **いろいろなところから見て、オススメの場所を見付けよう！** 離れて見てみると不思議な世界に見えるよ。 下から見上げると流れ星みたいに見えるよ。	前時のつなぎ方と本時で扱う材料や場所とを結び付けて考えることができるよう、写真や板書を使って整理する。【視点２】 つなぎ方に新たな思考が生まれるよう、本時の活動場所を紹介したり、長さの違う竹ひごを提示したりする。【視点１】 友人と一緒に活動することで、イメージを共有する楽しさを感じたり、工夫を取り入れたりできるよう、適度な広さの場を設定する。【視点２】 友人の活動や活動場所全体を自然と見ることができるような動線をつくるため、材料置き場を少し離れたところに設定する。【視点２】 ◎「こんな材料で」「こんなつなぎ方で」と考えることができるようにするために、どこに向かってどうつなげていくか方向性を意識する関わりを行う。【視点２】

題材名	領域及び項目など / 時数	指導学年	授業者
15歳の自我像 ～○○を見つめる瞳～	A表現（1）/ 全9時間	中学校　第3学年8組 男子２０名 女子１７名 計３７名	札幌市立琴似中学校 武井　りえ（たけい　りえ） 造形活動で大切にしていること： 「『楽しい！』をスタートに」

子どもの実態

○基礎的・基本的な学習経験を積んだ学年で、4月に透視図法、モダンテクニックを確認してから、この題材に取り組んでいる。

○学んだ知識や技法を活用する力は高いが、自由に柔軟な発想をすることに対し苦手意識をもつ生徒が多い。

教師の願い

○「今の自分」のありのままの姿を見つめ、自分の中にある考えや思いを、豊かな形や色彩に置き換えて表現することを期待する。また、生徒が苦手とする、自由で柔軟な発想を育む機会としたい。

○自分の主題を見付け、それに迫ることで、よりよい表現を追求していく姿を期待している。

題材設定について

○「目」は人の思いや願い、感情を色濃く映すものである。自分を見つめる「目」から発想することは、自分の考え、想いや願いなどと向き合うきっかけになると考えた。表したい自分を明確にもって、表現方法や配色効果を試し、選んで画面をつくっていくことで、自分を表現する力を身に付けさせたいと考え、この題材を設定した。

○「自画像」は自分の外見を写し取ることで、自分を深く見つめ、向き合ってつくる作品である。「自我」という言葉には難しさもあるが、今回は、より自分の目で自分の内面を見つめ、具象だけに限らない幅広い表現で表すということに重きを置きたかったため「自我像」という題材名にした。

シコウが生まれる子どもの姿

○自分を深く理解することで、自分をどう表すか考える。

○自己分析などを基に、いくつかの言葉のイメージから、形や色彩を思い描いていく。

○自分が見い出した主題を基に、目の表現や自分の内面の表現方法について、試し深める。

○主題を基に、納得のいく表現を目指して描画材料の選択や表現技法を工夫していく。

題材の目標

○「自分が見つめるもの」や「自分の眼差し」から「今の自分」を表す主題を見い出し、形や色彩の表し方や構成を工夫しながら、主題に合った表現を追求する。

響き合いが生まれる子どもの姿

○交流をすることで、作品に対する見方や考え方を広げたり深めたりする。

視点１　シコウが生まれる題材化の工夫

◆主題に迫るワークシート【思考】

◆構成や配色を試す用具や材料の工夫（トレーシングペーパー、スケッチのコピーなど）【試行】

◆表現の工夫のための多種な描画材料　【試行・志向】

＜題材の評価規準＞

【美術への関心・意欲・態度】
主体的に主題を生み出し、意欲的に表現しようとしている。

【発想や構想の能力】◎
主題に基づいて発想を膨らませ、形や色彩の効果を考え、表現する構想を練っている。

【創造的な技能】◎
主題をよりよく表すために、様々な表現方法を創意工夫して表現している。

【鑑賞の能力】
自他の作品の主題に応じた表現の工夫、よさや美しさなどを味わっている。

視点２　響き合いが生まれる場所・場面の工夫

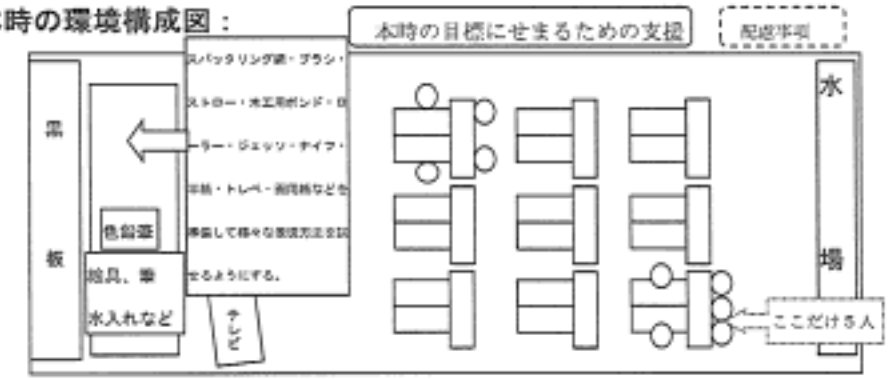
◆多様な考えや表現に触れる中間交流【思いや願い】

◆様々な表現方法の紹介【ひらめき・工夫】

題材構成：

時		活動内容及び視点１とのかかわり	評価
1	活動	○自己分析①	関
2	活動	○自己分析②　⇒　ファーストテーマ記入	関
	視点	自己イメージを深め、「今の自分」の何を表すのかを主題にしていく。【思考】	発
3	活動	○鑑賞：「目」が表すもの・作家の自画像鑑賞 ー　構想を練る。①　目のデッサン練習３～４パターン、着彩イメージ （クロッキー帳、トレーシングペーパーに着彩ー※以後、「トレペ」）	関 発
	視点	主題に合った目の表情を試し、吟味する。【試行】	
4	活動	○構想を練る② ・目のデッサンの選択、構成や色彩イメージの試行 ～トレペ[色鉛筆で着彩]を目のデッサンに当ててイメージしてみる。	発 技
	視点	主題に合った目の表現から、形や色彩へ発想を広げる。【思考・試行】	
5 本時	活動	○構想を練る③～前時までの自分の作品を確認する。 ○中間交流～それぞれの取り組みについて発表・交流し合う。 ○目のデッサン・着彩の試し→作品制作に進む。	発 技
	視点	自分の主題に合った形や色彩、構成を試しながら追求していく。【試行】	
6	活動	○作品制作①（デッサン→着彩）	発
	視点	主題に近づく「目」のデッサン、構図・表情の工夫【志向】	技
7	活動	○作品制作②（着彩）	発
	視点	主題に合う技法や色彩イメージの工夫【試行・志向】	技
8	活動	○作品制作③（着彩）⇒ 完成　ファイナルテーマ記入	発・技
9	活動	○相互鑑賞	関・鑑

本時の環境構成図：



本時の目標：構成や色彩を試しながら、自分の主題に合った表現を追求する。

本時の展開：

主な学習活動	視点１・２とのかかわり
自分の主題に、より近付ける構図や色彩を見つけよう	
◎自分の主題をよりよく表す形や色彩、構成はどれだろう？ ・前時の作品の確認	主題に迫る目のデッサンを追求する。 自分に関わる言葉から形・色彩へイメージを広げる。【視点１（思考・試行）】
どの表現が「今の自分」らしいだろう？	
□グループで交流してみよう。 ◆中間交流◆　４人グループ 発表者１名～現在の自分の姿について、エスキースを見せながら発表する。(試行したもの・選択したもの・迷っているもの・こんなふうにしたい) アドバイザー２名～「良いところ」「プラス１の工夫」など 記録者１名～アドバイザーの発言を付箋に書いて発表者に渡す。 ※　役割をローテーションしながら進める。	他者の意見を聞いたり、自分の考えを話したりすることで思考を整理するとともに、自分の課題の発見や、自信につなげる。また、他者のアイデアを見ることで、新たな表現の発見など、見方や考え方を広げる。【視点２】
□考えを発表しよう。 □自分の考えをまとめよう。 ・交流で得たことをもとにクロッキー帳にエスキースを整理する。 ・表現の方向性が見える。 ○着彩の試し	見たり話したりする中で気付いたことを基に、自分の表現を工夫しようとしている。【視点２】 あらためて、自分の主題に迫る表現を追求する。【視点１（思考）】
主題に合った自分らしい表現が見えた	

題材名	領域及び項目など / 時数	指導学年	授業者
開くとそこにある 自分だけの宝物	A表現(2) / 全7時間	小学校　第4学年 男子20名 女子14名 計34名	札幌市立北都小学校 矢野　宜利（やの　たかとし） 造形活動で大切にしていること： 『『あり方』に根ざした『やり方』』

子どもの実態

○学年テーマ「宝さがしの旅」を基に、4月から様々な題材に取り組んできている。
○事前に材料や道具を積極的に集めるなど、図工の時間を楽しみにしている。
○自分なりの発想をすることに困難を感じる子が少なくない。

教師の願い

○「宝物」に込められた自分の思いを大切にし、それを表現することを楽しむと同時に、友達の思いや表現も大切にして、互いに学び合える関係を築くことを期待している。
○様々な飛び出す仕組みや表現方法を試しながら、自分の思いに合った表し方を発見することを期待している。

題材設定について

○「自分だけの宝物」を考えることは、10歳の自分を見つめ、友達の「宝物」にも思いを巡らす活動につながることをねらう。
○様々な飛び出す仕組みを基に、「宝物をさがす旅」を考えることは、適度な抵抗感と楽しさを生むと考える。

題材の目標

○飛び出す仕組みを基に、「自分だけの宝物をさがす旅」のイメージを広げ、そのイメージが伝わるよう工夫して表す。

シコウが生まれる子どもの姿

○もっと自分の「気持ち・思い」が伝わるようにしたいな…！
○こう飛び出すと、「自分だけの宝物」がよりはっきり伝わりそうだ。
○紙以外の材料も使うと、自分の「気持ち・思い」をより表せそうだぞ。

響き合いが生まれる子どもの姿

○自分の「気持ち・思い」は、友達に伝わるかな？
○友達の「気持ち・思い」が伝わるようにするにはどうしたらいいだろう？
○友達の工夫を自分にも取り入れることができそうだぞ…！

＜題材の評価規準＞

【造形への関心・意欲・態度】
「自分だけの宝物」と飛び出す仕組みに興味をもち、「自分だけの宝物をさがす旅」を表そうとしている。
【発想や構想の能力】◎
見た人に「自分だけの宝物をさがす旅」が伝わるように、飛び出し方、絵や模様、動きなどを思い付いたり、考えたりしている。
【創造的な技能】◎
飛び出す仕組みをいろいろ試しながら、材料や用具を生かし、動きや装飾などを工夫して表している。
【鑑賞の能力】
友達と作品を交流し、表し方の共通点や相違点、表現の工夫を感じ取っている。

視点1　シコウが生まれる題材化の工夫

◆大きな飛び出すカード【ワクワク】
◆「自分だけの宝物をさがす旅」と段階的な題材構成【思考】
◆飛び出す仕組みを試す機会の保障【試し】
◆「宝物をさがす(見つける・つかむ)自分」の写真【思考】

視点2　響き合いが生まれる場所・場面の工夫

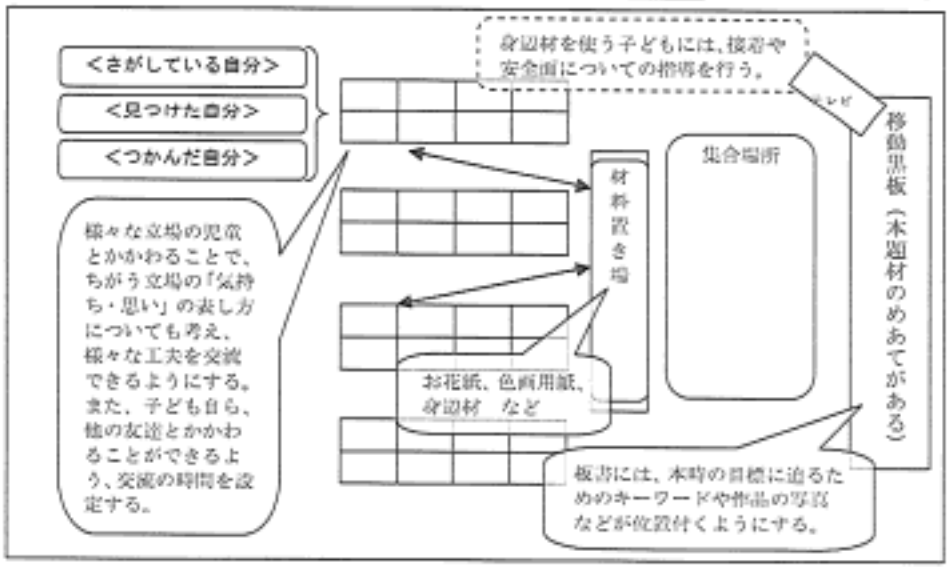
◆「気持ち・思い」が伝わる工夫を共有するための、全体での鑑賞【見る・感じる】
◆自分の写真を基に、「気持ち・思い」を表す工夫についての交流【ひらめき】
◆材料置き場の配置と子どもの動線【工夫】

題材構成：

時		活動内容及び視点１とのかかわり	評価
1	活動	○飛び出す絵本・カードを鑑賞し、「自分だけの宝物をさがす旅に出たのなら…？」を考える。	関発
	視点	・ワークシートを活用し、「自分だけの宝物」について深く考える。【思考】 ・飛び出す仕組みをいろいろ試すことで、表し方の見通しをもてるようにする。【試し】	
2 3 4 5	活動	○「自分だけの宝物」をいろいろな材料を使い表す。 ○飛び出す仕組みを基に、「宝物をさがす旅」を表す。 ○「宝物をさがす(見つける・つかむ)自分」の写真を撮る。	発技
	視点	・どんな色・形で、どう表すと「自分だけの宝物」になるのかを考える。【思考】 ・ワークシートや交流を基に、旅カードに「どんな世界、どんな人・もの・ことがあったらおもしろいか」を考えながら表していく。【思考】 ・「自分はこんな旅をして宝物を～している」を考えてポーズなどに表す。【思考】	
6 本時	活動	○「宝物をさがす(見つける・つかむ)自分」がどんな「気持ち・思い」なのかを考え、その「気持ち・思い」がより伝わるように工夫して表す。	技
	視点	・「気持ち・思い」を表す工夫について考えるために、全体交流や小交流の場面を設定する。【思考】	
7	活動	○「自分だけの宝物をさがす旅」を完成目指して表す。友達の作品を鑑賞する。	技鑑
	視点	・互いの作品を鑑賞し合い、自他の表し方のよさを確かめ合う。【志向】	

本時の環境構成図：

本時の目標にせまるための支援　　配慮事項



本時の目標：　自分の「気持ち・思い」が伝わる表し方を交流し考える活動を通して、自分の「気持ち・思い」がより伝わる表し方を工夫する。

本時の展開：

主な学習活動	視点１・２とのかかわり
○全体交流 「宝物を～する自分」はどんな気持ち・思いだろう？ ＜さがしている自分＞ 早く見つけたい！　一生懸命　必死　さがすのが楽しい ＜見つけた自分＞ うれしい！　やったー！　やっと見つけた…！！ ＜つかんだ自分＞ とったぞー！　幸せ！　うれしい　達成感 どうすれば自分の「気持ち・思い」がもっと伝わるかな？ ○グループ交流 **自分の「気持ち・思い」がもっと伝わるように工夫したい！** ＜宝物をもっと！＞ ○宝物をあえてかくすことで、さがしている感じを表現したい。 ○もっと飛び出させたい。 ○光り輝かせて、目立たせたい。 ＜旅カードをもっと！＞ ○見つけたうれしさが伝わるように色を工夫しよう。 ○飛び出す仕組みをもっと増やそう！ ○紙以外の材料も使って、旅カードをパワーアップしたい。 自分だけの宝物　自分 ＜自分をもっと！＞ ○自分の写真も飛び出させることで、気持ちをはっきり伝えたい。 ○自分の周りに明るい材料を組み合わせて思いを表したい。 友達の作品からどんな「気持ち・思い」が伝わるかな？ 宝物をかくす工夫で、必死でさがしている様子が伝わる！ 他の材料も使って、うれしさがより伝わってくる。 **「気持ち・思い」が伝わるように工夫して表せてきたよ。**	自分の写真を基に、「気持ち・思い」を確認する。【視点１（思考）】 ◎友達の作品を全体で数点鑑賞し、「気持ち・思い」が伝わる工夫について共有する。【視点２】 授業のねらいを子どもに伝え、それに迫る手立てを子どもと共に考える。【視点１（目的意識）】 ◎「さがす・見つける・つかむ」など様々な立場の人と交流することで、様々な「気持ち・思い」の表し方について考えられるようにする。【視点２】 材料置き場所を子どもの動線を考えて配置することで、自然と互いの表現を鑑賞し合えるようにする。【視点２】

題材名	領域及び項目など / 時数	指導学年	授業者
TOWER OF LIFE ～人生の塔～	A表現（1）/ 全９時間	中学校　第１学年 男子１５名 女子１５名 計３０名	札幌市立あいの里東中学校 寺林　陽子（てらばやし　ようこ） 造形活動で大切にしていること： 「たくさん悩み、最後は自分で決める。」

子どもの実態

○素直に感動を態度に表すことができる生徒が多い。
○発想を形にし、広げることが苦手な生徒も多い。
○４月から小刀で鉛筆削りを行っている。これまで、ハッチング、色彩、ポスターカラーの平塗を学習した。
○本題材が、１年生では初めての長時間題材となる。

教師の願い

○生徒が自身についての関心を高め、希望と好奇心をもち、これからの人生（未来）に思いを巡らせることを期待している。
○自身の思考から形を生み出し、お互いが生み出した形を交流することで刺激を受け、認め合うことを期待している。
○構成美の要素を自らの思考や他者との交流を通して体得することを期待している。

題材設定について

○本題材は、色の学習（知識）やポスターカラーの平塗（技能）を活用した心象表現の題材である。また、構成美の要素などは事前に学習せず、生徒の作品鑑賞を行う中で見いだすことをねらう。
○「塔」と設定したのは、希望をもった中学校１年生という時期に、この先の自分の未来を想像し、人生を歩んでいくことと、地に足を着けて様々な方向に広がっていく塔（タワー）のイメージがつながりやすいと考えたからである。また、発想の段階で、塔（タワー）の概念を超えた独自の形を生み出す生徒も出てくることが予想されるが、それぞれの発想を認めることがよいと考える。

題材の目標

○自己への関心を高め、自身の人生を思い描き、形・色彩・構成で人生の塔（タワー）を表現する。

シコウが生まれる子どもの姿

○自分のこれからの人生のイメージを基に、形や色彩を生み出す。
○人生の塔と、背景の効果的な画面の構成を行う。
○色の知識を生かしながら、混色によって自分だけの色彩を用いた配色を考える。

＜題材の評価規準＞

【美術への関心・意欲・態度】
自分のこれからの人生を表現することに関心をもち、主体的に人生の塔を生み出そうとしている。
【発想や構想の能力】◎
主題などを基に、人生の塔を形や色彩の効果を生かして表現する構想を練っている。
【創造的な技能】
表したい人生の塔のイメージをもちながら、意図に応じて形や色彩などを創意工夫して表現している。
【鑑賞の能力】
作者の心情や意図と表現の工夫、造形的な美しさなどを感じ取り、自分の思いや考えをもって味わっている。

響き合いが生まれる子どもの姿

○「感情の変化が形や色彩によってわかるって面白い！」
○「一人一人の個性や考えていることで、形も色彩も変わってくることが分かった。」
○「未来というテーマだけで、これだけたくさんの絵が出来てくるのが面白い。」

視点１　シコウが生まれる題材化の工夫

◆アート パスポート【思考・試し】
◆人生を塔に置き換えるという投げかけ【思考】
◆自由にアイデアを描くことが出来るワークシートの工夫【試し】

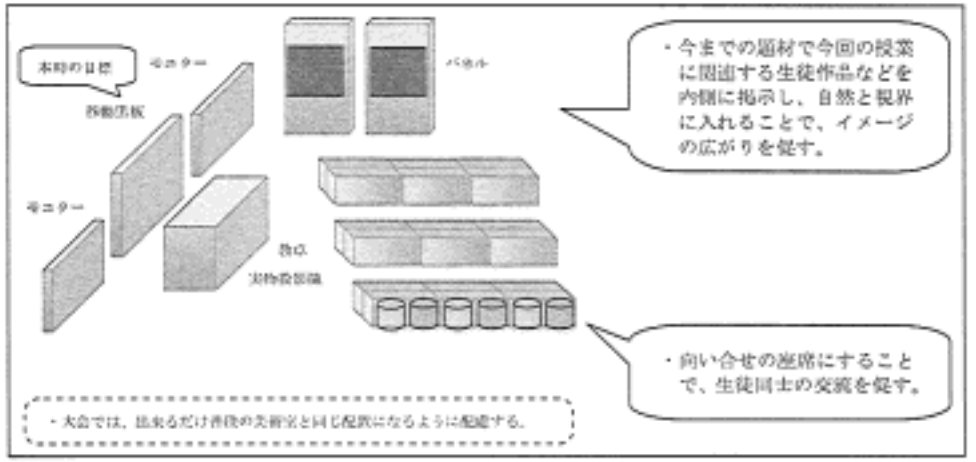
視点２　響き合いが生まれる場所・場面の工夫

◆アイデア交流【ひらめき】
◆発言を促すための向い合せの座席【場の構成】

題材構成：

時		活動内容及び視点１とのかかわり	評価
導入		○「つみきのいえ」（短編アニメーション映画）鑑賞 ・自分の人生を振り返る登場人物の気持ちを想像する。	関 鑑
1	活動	○自分の人生はどのような人生になるか、希望をもってイメージする。 ・形・色・言葉などをワークシートに描き込みながら、イメージを膨らませている。	関 発
	視点	活動への意欲を高める。【ワクワク】	
2 本時	活動	○自分の人生をタワー（塔）にすると、どのような形になるか考える。 ○他者のアイデアから作者（他者）の心情や意図と表現の工夫を知り、発想の幅を広げる。	関 発
	視点	人それぞれ、思考や塔（タワー）の捉え方も違うことを知り、幅広く形を考え始める。【思考】	
3	活動	○作品アイデア考案→決定	関 発
4 ～ 9	活動	○下描き→着彩 ○完成　作品カード記入（題名、作品に込めた思い）	関 技
鑑賞		○作品交流会「TOWER OF LIFE」 ・他者の思いや工夫を想像しながら、作品を味わい認め合う。	関 鑑

本時の環境構成図：　本時の目標にせまるための支援　配慮事項



本時の目標：自己への関心を高め、お互いの発想を尊重しながら、自身の人生を思い描き、それを「形」で表現する。

本時の展開：

主な学習活動	視点１・２とのかかわり
○他者の人生のイメージを知る（前時のワークシート紹介） ・前時に感じたことを生かしながら、ワークシートに美しい形や色を生みだそうと考える。	前時に形・色・言葉に表した他者のイメージを知り、自身のイメージをさらに具体的に形へ置き換えていく。【視点２】
ぼく・わたしの未来の形は○○な形！	
○自身の人生のイメージを形に展開する① ・前時の初発のイメージ（形・色・言葉）から、「形」に焦点化してアイデアを展開する。	枠の無い用紙に描くことで、たくさんアイデアを増やしながら、自分の形を見つけていく。 【視点１（試し）】
○アイデア交流 ・４人でお互いの考えを述べ合う。 ・思いや考えが伝わってきた他者のアイデアを生徒が実物投影機で紹介する。 ・自分のグループ以外のアイデアを広く見て回り、刺激を受ける。	他者のアイデアを尊重しながらその表現の良さを見つける。【視点２】
人生のイメージに合う形にしたい	
○自身の人生のイメージを形に展開する② ・他者の表現意図と表現の工夫を知り発想の幅を広げる。 ・自身のアイデアで大切にしたい所を残しながら新たにひらめいた形や色を展開したり、再構成したりする。	描き出した形のある部分を抽出したり、別々だった形を組み合わせたりすることで自身の思考が具体化されていくことを実感する。【視点２】
曖昧だった塔の形が再構成するうちに明確になってきた	
○納得のいくタワーの形が出来てきた生徒から、画面構成や配色を考える。	

MEMO

提　言　集

子どもの『自主性』を育む活動を目指して
～豊かな表現力を大切に～

提言者　幼保連携型認定こども園さつなえのもり　高橋　　梓

保育の在り方　好奇心や豊かな感性、創造性の芽生えを養う

子どもたちは日々の生活の中で様々なことを経験し、楽しさを知り、イメージを膨らませたりするなど夢中になる遊びと出会う。私が保育の中で大切にしていることは、子どもたちの好奇心や意欲、そして活動後の満足感から得られる自信と次への期待である。

活動内容を決定するにあたり、幼児の発達の特性としてあげられる「ファンタジーの世界」で安心して遊び込める工夫、自分で考え行動する自発性や主体性を大切に夢中になれる遊びに納得のいくまでかかわることができる環境づくりを心がけている。また、子どもたちが今、どんな事に興味や関心をいだいているか、季節感や発達状況によって養われる能力に合わせ適切な素材の工夫も大切にしている。

題材づくりのきっかけ　日々の子どもたちの遊びから

題材づくりのきっかけになるのは、子どもたちの生活や遊びである。北海道の季節感を大切に、自然物を使った製作も多く用いている。草花での色水遊びや野菜スタンプ、ままごとが流行るとそれに合わせてアイテムづくり、発表会シーズンになると新聞やカラーポリ袋での衣装づくりや、楽器づくりなど、その時の子どもたちのイメージを大切に製作の工夫をするようにしている。そうすることで遊びへの興味は更に広がり、それと共に一緒に活動している友達や保育教諭との絆も深まりを見せる。

今回の題材（次ページ）においては昨年度の夏、虫とりに夢中なる子どもたちが大勢いたため、その遊びを更に広げようとしたものである。また、3歳児で「虫が怖い」と苦手意識をもっていた子どもがいたため、少しでもその気持ちを和らげ興味をもってほしいとの願いもあり行った。

公園作りの様子。
小山やトンネル、虫が沢山遊べる場所の工夫をしました。

活動に必要な材料は、自然とつながりをもてるように葉っぱや木の枝・実を活用した。子どもたちが自分で考えてつくれるよう接着用品も多様な種類を用意した。またつくった後に作品で遊び込めることをねらいにしていた為、活動場所を公園（森の中）のイメージにした。つくった虫を通して友達や保育教諭とのかかわりを楽しめるよう隠れ場所や広場をつくるなどの工夫を子どもたちと相談をしながら進めた。

題材を通して 虫をつくろう!!

男の子たちが「先生！見てみて！」と捕まえた虫を嬉しそうに持ってきた。そこから広がった虫への興味。『自然と友達になろう！』と公園へみんなで行き、虫のおうちを探したり、絵本を見て虫の種類を知ったり、虫をイメージし自分がなりきって遊んだりした。活動の中で「虫ってどんな所に住んでいるかな。」「ご飯はたべるのかな。」「何をして遊ぶのが好きなんだろう。」と保育教諭が子どもたちに尋ねると、自分のイメージした虫像を話す様子が見られた。「虫のお城もあるんじゃない？」「みんなで一緒に住んでるんだよ。」「きっと見つからないようにかくれてるんだよ。」などファンタジーの世界に入り込み目を輝かせて周りに伝えたいと発言する子が大勢いた。子どもたちのイメージからの遊びを大切に虫づくりがスタートした。

まずは虫の体選び。子どもたちは好きな大きさのダンボールを選び、虫の体の模様を描いていった。「僕の虫は羽をつけるんだ。飛ぶんだよ！」「私はおしゃれな虫にする！」と葉や木の実をつける様子も見られた。手や足には、木の枝をつける子の姿もあった。制作中は、友達同士で見せ合い「それいいね。」と褒め合ったり、制作途中で虫を動かし何かを確認するなど夢中になって取り組む様子が見られた。顔づくりでは、目を木の実にしたり、マーカーペンで思い思いの虫の表情を描いていた。優しい顔、強そうな顔、口をあけている顔（何か食べたいのかな）など表情豊かな作品に仕上がっていた。

『作ったもので遊ぼう！』これが制作後のお楽しみ!!保育教諭とクラスのみんなでつくった公園で虫ごっこが始まった。カクレンボをしたり、かけっこなど虫の運動会が開かれたり、一緒にご飯を探しに行ったり、おうちをつくったりなど遊びは盛り上がった。この活動は１度だけではなく、子どもたちの希望から１週間程継続して昼食後の遊びなどに行われた。遊びの回数を重ねるごとに公園や虫がバージョンアップするなど環境や遊び方にも変化が見られた。

子どもが夢中になれる活動 まとめ

今回の活動を通して子どもたちは、虫への興味が深まっただけでなく、自分でイメージしたものをつくって遊ぶことの楽しさを味わうことができた。初めはどうやってつくったら良いかに困っていた子も友達と一緒に話をしながら活動を進めることで、「こうしてみたい。」という意欲やイメージが膨らみ友達と楽しさの共有を図ることができた。また、遊びの継続から工夫することの面白さも感じられたようである。造形活動から様々な人間関係の幅が広がり、今後の活動への期待にもつながった。子どもたちが自分で試したくなるような環境づくりと、友達や保育教諭も一緒に楽しみ、お互いの思いを共感し合える場をこれからも大切にしていきたい。

子どもの見方や考え方を大切にし、感性を働かせる授業づくりの在り方

提言者　札幌市立幌南小学校　山　　薫

授業の在り方　表現活動に主体的にかかわる授業

図画工作科は、子どもが感性を働かせながら、つくり出す喜びを味わい、造形的な創造活動の基礎的な能力を発揮していく教科である。

子どもが、「もっとやってみたい。」「もっと満足いくものにしたい。」という思いをもち、自分の感覚や活動を通して主体的にかかわることができる授業を大切にしている。学びを主体的に継続させていくには、子どもの感覚や感じ方を大切にし、感性を働かせていくことができる活動を積み重ねていくことが必要である。様々な対象や事象から感じ取る働きを感性とするとき、子どもは自分の感じ方や考え方をもとに、思いを広げ表現したり、鑑賞したりすることを通して感性を働かせている。このような感性を働かせる活動を通して、子どもは自分の形や色、イメージをつくりだし、見方や考え方を広げていき、資質や能力を高めていくと考える。

題材づくりのきっかけ　「やってみたい。」が生まれる題材との出合い

魅力的な題材との出合いから子どもは「おもしろそう。」「やってみたい。」と表現への意欲をもち、つくりだす喜びや楽しさを感じていく。そのために、材料や参考作品、活動の提示の仕方など様々な工夫をしてきた。

教科書を見せながら「今日は、これをつくるよ。」と投げかけるだけでは、子どものつくりたいという思いが深まらず、子どもの中につくる目的が生まれないのではないか。また、上手につくらないといけないという作品の出来栄えに子どもも、教師自身も目が向いてしまうのではないかと考え、活動の提示の仕方を工夫するようになった。

空き箱をつかった工作では、教師のつくったキャラクターから子どもたちへ「僕の友達をつくってほしい。」という手紙が届くという導入を行った。そうすることで、子どもが「どんな友達がいるのかな。」「楽しい友達をつくりたい。」と題材に対する世界観をもち、つくりたいという思いを膨らませ、「自分はこういう友達をつくろう。」と主体的に取り組むようにした。また、画用紙で帽子をつくる授業では、教室を「世界中から素敵な帽子が集まる帽子屋さん」、子どもは「帽子職人」という環境を設定した。ここでも、子どもがどんな帽子をかぶりたいか自分の気に入った帽子のイメージをもち、作品に愛着をもちながら自分の作品と向き合う姿が見られた。さらに、今まで経験したことのない材料や用具、新しい見方が生まれる表現方法、生活との関わりや意外性があるものなども題材との出合いとして大切であると考えた。

しかし、出会いやつくりたいという思いだけでは、資質や能力を十分に高めることはできない。材料に触れたり、作品から感じたりするなど、子どもの感覚や感じ方を重視することが大切である。これまで子どもがどのような材料経験や活動経験を積み重ねてきたかを分析し、題材と出会った子どもの表現活動やイメージの広がりを想定する。子どもが、どのような材料や用具、方法を選び、活動に見通しをもつのかを明確にすることで、その題材で育てたい資質や能力が見えてくる。子どものつくりだす喜びの先にある、資質や能力の高まりを考えて題材を構成することで、「自分の表したいことが自分でできた。」という主体的な関わりから生まれる自信を高めていけると考えるようになった。

1ねん2くみのみんなへ

みんなは、どんなたのしいなかまをつくりたいかな。はこをいろいろくみあわせて、せっちゃくのしかたをくふうしながらつくってね。いま、のびのびランドには、だれもいなくて、さみしいんだ。できたなかまを、のびのびランドにおいて、たのしいかんじがでているかみながらつくってね。

みんなが、どんなたのしいなかまをつくるか、とてもたのしみにしているよ。　（子どもに送られてきた手紙の一部）

にっこにこ　ぼうしやさん

ここは、「にっこにこぼうしやさん」

ここにしかない、すてきなかたちや色のぼうしがうられています。きょうも35人のぼうしやさんが、すてきなぼうしをかんがえて、つくっています。どんなぼうしができるのか、たのしみにしていてください。

（帽子屋のちらし）

子どもの「やってみたい。」「つくりたい。」思いを広げる手立て

題材を通して 色水での造形遊びを通しての表現活動

低学年での絵の具を使った題材は、画用紙に筆で色を塗ったり、ローラーで転がして写し取ったりするなどの用具として扱う場面が多い。また、対象物に合わせて色を選んだり、色のついた線の形から見立てたりするなど、色そのものを対象として考えることは少ない。

そこで、単色の色水の量を考えながら混ぜてできた色水のカップを並べたり、積んだりすることで、色そのものに目を向けたり、並べてできる形を工夫したりしていく題材を考えた。

子どもは、絵の具に水を加えると薄くなることを知っているが、水自体に絵の具を入れるとどうなるか実際に体験している子どもは少ない。導入では、教師が水の入ったペットボトルにほんの少しの絵の具を入れる様子を提示した。水に入った絵の具が煙のようにもやもやと溶けて色水に変化していく様子に子どもは強い興味を示し、「やってみたい。」という思いをもった。

ここで扱った色は、赤・青・黄の３色だが、子どもは、１つの色でも絵の具や水の量を変えることで様々な濃さができることを試行しながら体験的に学び、自分のつくりたい色水のつくり方を主体的に身に付けていった。

次に、子どもは色水を透明カップに入れて新しい色をつくっていった。絵の具を混色することで違う色ができることを経験的に知っている。ここでは、色水を混ぜることでも違う色ができることを知る。始めは、無作為に混ぜて色が変わることを楽しみ、「オレンジジュースみたいだ。」と色を意味付ける感覚的な働きかけをしていく。どの色を混ぜるとどんな色ができるか分かってくると、次の段階では、これを経験として自分のつくりたい色になるように色水を選択していく。また、薄い色にするためには、水を多くした色水同士を混ぜることや、青と黄の２つの色水の量を段階的に変えていくことでだんだん青から緑に変わっていくことなど多様な見方や考え方を身に付けていく。

様々な色水が入ったカップを使って、並べたり、積み重ねたりしながら形をつくっていく活動へと広げていった。ここでも、子どもは思考しながら活動していく。色水をいろいろな形に並べる感覚的な思考、色がきれいに見えるように色水の並べ方や重ね方を工夫する経験を基にした思考、色がだんだん変わるようにしたり、きまりを考えたりして並べ方や重ね方を工夫する要素を関係付けた思考など様々な思考を行き来しながら、工夫して形を表現する姿が見られた。様々な色のカップを長くつなげていく行為から、色の順番を考えて置き換えながら並び替える活動へと移ったり、同系色をまとめて虹色になるように積み重ねてピラミッドの形にしたり、友達の活動に刺激され、合わせることで個数を増やしてより大きな形にしたりするなど、活動を通して形や色への見方を広げていった。

授業で輝く児童の姿 まとめ

この色水の題材は、２年生で扱ったが、ここで得た経験が、今後絵の具で彩色する時に、自分の描きたい思いに合う色をつくりだすことに活用されていく。教師が、紫は、赤と青を混ぜる、薄くするときは水を多くすると全てを教えるのではなく、子どもが自らの経験や活動で身に付けることで、自分の学びを実感し、次の活動へつなげていくことと考える。

また、活動を通して「いいこと思い付いた。」と発想し、「こうしたらどうだろう。」と試行していき、「自分のつくりたいことが工夫してできた。」と工夫して表現するよさを感じることの積み重ねにより表現が広がり、そのことが感性をさらに働かせることにつながる。

このような、子どもの意欲を引き出す手立てや、思考の分析とそれに対する教師の関わりを意識して題材を設定することで、子どもは授業の中で輝いていくと考える。

「おいしい」だけで終わらない おなかいっぱいの授業を目指して

提言者　札幌市立星置東小学校　森實　祐里

満足を見直す　子どもが納得するまで

図画工作の授業の楽しさは、題材や材料の目新しさだけでなく、自分の表現に浸ることだと考えている。

そこで、授業では材料に浸り、思いを膨らませることはもちろん、自分の表現に満足するところを目指したい。子どもが納得するまでの活動時間を保障することで「獲得した自分の表現」を実感できると考えるものである。

楽しさだけでいいのか　やりきること＝学びの実感、自分の表現の獲得

ある時、教育美術展で入賞した子どもに「私の絵、貼られたくなかった。」と言われた。理由を聞くと、自分の絵の隣に貼ってあった「船」の絵の方がうまく、貼られていた自分の絵の仕上がり具合が恥ずかしかったと言うのだ。「(貼られるのであれば、) もっとしっかり描いたのに」とつぶやいた。その子の絵のよさを私から説明したが、この言葉とこの子どもの浮かない顔が忘れられない。

これまで、子どもの「面白そう！」「やってみたい！」「楽しい！」という意欲を醸成する授業を目指してきた。少ない時数の中で、より多くの材料経験と少しでも楽しい活動を生み出そうと努力してきた。その結果、どの子も「楽しい」と思えるような題材を提供できてきたと自負している。しかし、この経験以来、子どもにとって「しっかり描く」ことはどのようなことなのか考えるようになった。

絵画の授業　「もっと」が続く

夢の家を建てようという実践を4年生で行った。自分の家を八つ切り画用紙に描く。その後、模造紙にグループごとで町内会を発足して、家を貼っていく活動を予定していた。絵の具で画用紙に直接描くことを積み重ねてきている子どもたちは、2時間もかからず、家を完成させることができる。絵を描き終わった子から模造紙に貼ろうとしていたところ、私の授業を参観していたある先生に、「子どもの表現活動がまだ6割」と指摘を受け、もう少し題材の時間を延長することにし、子どもが自分の表現に満足することを目指した。

しかし、短時間での題材構成しか経験のない子どもたちがじっくりと描き続けられるだろうか、出来上がったと思った子が多い中で本当にまだ描きたいと思うだろうか、無理に描かせるとせっかくの作品が雑に仕上がったりふざけて題材から離れたものを描き加えたりするのではないか、など不安が募った。子どもの作品が「教師が描かせた絵」になるのではないかと怖かったのである。

そこで、友達の作品を鑑賞し「もっと描きたいこと」を問うことにした。そうすると、子どもは「もっと～な形にしたい」「～を描き加えたい」などたくさんの意見を出し合い、活動の再開と同時に夢中になって描き続けたのである。

そして、周りの友達の作品からアイディアを得たり友達からアドバイスをもらったりしながら、子どもの思いがたくさんつまった作品へと変化する様子が見られた。

もう一度、絵の具で家の形や模様を描く子、家の周りで遊んでいる自分や友達を全芯色鉛筆で描く子、背景に木や鳥などを描く子など、様々な工夫が生まれていった。どの子の絵からも、子どもの楽しい声が聞こえてきた。

詳しく描けば描くほど、丁寧に描くようになり、全体の色のバランスも考えるようになっていった。絵を離れた所から何度も見ては描く中で「ここ（の形）がすごい！」「これは〇〇ちゃんの好きな色だね！」と友達から話しかけられ、自分の表現のよさを実感しながら活動を進める姿が見られた。また、もっと絵を詳しく描きたいという思いをもったことで、どのようにしたら苺らしく見えるか、どのようにしたら一緒に遊んでいるようなポーズになるかを考えたり相談し合ったりする姿も見られた。

自ら活動を広げる子ども

このように「個」の活動を保障することで、次は「グループ」の活動に「もっと」が生まれた。夢の家を建てる模造紙に家を貼り、隙間に少し道路が描かれるだろうという教師の予想を遙かに越え、授業が終わっても活動は終わらなかった。休み時間や朝の時間などを使い、夢中になって町内会をつくる姿が見られた。町内会には川が流れ、公園があり、次々とお店が建ち並んでいった。まさに模造紙自体がグループによる共同の作品となっていった。子どもたちは模造紙の周りに自分たちの家を貼り、また自分の家の周りに庭を描き、模造紙を自分たちの街にしたのである。

満足するまでを目指す　子どもの声に耳を傾けて

子どもの思いに寄り添い、子どもの意欲を減退させない活動を考えてきた。そして、その活動の構成を見直すことにより、子どもが本当に表現したかったことが見えてきた。

子ども自身が自分の表現を楽しむためには、教師が子どもを信じて満足するまで活動時間を保障することの重要性が見えてくる。それは、無駄に時間を延長することではなく、思いを深めて、その実現に向けてじっくりと活動する時間を保障することである。

子どもの満足は「できた！」と言う瞬間である。「できた！」とは、満足いくまで取り組み自分の力を出し切ったこと、自分の作品を最後まで仕上げたことなどの実感が伴うと考えられる。そのためには「もっと～したい！」と思うような意欲が連続するような題材の構成を工夫することが大切である。

こうすることで子どもにとって「自分だけのおいしい表現がもうおなかいっぱい！」と思える満足のいく活動になり、自分の表現がより豊かになっていくと考えている。

思いがあふれ、試して、楽しむ授業づくりの在り方

提言者　札幌市立西岡北小学校　福島由紀子

授業の在り方　思いがあふれ、試して、つくることを楽しむ授業を

子どもの「やってみたい。」「つくってみたい。」ことが次々に生まれてあふれてくるような授業を目指してきた。

子どもが試してみたいこと、工夫したいなと思うこと、子どもがもっとこんな風にしたいと考えること、こんなことをしたら楽しそうだとか、面白そうだと思うことを実現できる授業、みんなで一緒につくったものや、一緒にやってみたことを共有し一体感がもてる授業をしたいと常々思っている。

さらに、自分が大切にしていることは、教師である自分も授業づくりや、授業そのものを楽しみ、子どもと一体感をもって授業に取り組むことだ。

題材づくりのきっかけ　思いがあふれ思いが連続する題材を

題材づくりの際には、子どもはどんな資質・能力を発揮するのか。子どもはどんな力をつけるのか。子どもの思考の流れを想定し、目標に沿って題材を考えていく。「この目標であるならば、材料を変えてもいけそうだ。」「環境を変えたほうがおもしろい。」「地域性を考えた授業に変えられるのでは。」など、教科書に例示されている授業とは違った授業展開を実践していくことも少なくない。

特に目標に沿って授業づくりをしていく上で、材料や用具の吟味は欠かせない。初めて扱う材料や用具は自分でも散々試してみる。色が美しかったり、思わず触りたくなる面白さがあったり、動いたり、光ったり、変化がありそうで楽しみだったり…そのような材料に強く心がときめいてしまう。材料は、子どもの発想の基となったり、技能を高めたり、想定を超えた資質・能力も引き出したりする。試しにやってみて、思いが膨らんでつくりかえる。またつくって、考えて、つくり続ける。大人である自分も思わず没頭してしまうようなものを、子どもの生活に近いところから探していく。

環境もしかり。光を扱った授業は子どもの心をくすぐり、表したい思いを生み出す。教室に光のカーテンをつくる学習では、最初にセロファンを光に透かしてみる。みんな一緒のセロファンを持っていても、セロファンを通して窓の外を眺めている子どもや、セロファンを通す光を影のようにして壁や棚に映している子ども、さらにはアイマスクのようにすべての世界を一色に見ている子どもがいる。光が透ける面白さが一段落すると今度は重ねてみる子どもが出てくる。重ねると色が変わることに気付く。面白くなって何枚も重ねてみる。すると今度は透けなくなって、重ねすぎると黒っぽくなってしまうことに気付く。

このように題材の最初に材料や用具、または環境を試す場面があれば、子どもたちは表したい思いをもち、その材料の特性に気付く。ただ、そのままでは資質・能力を十分に高めることはできない。思いをもち、「いいこと考えた。」と子どものやってみたことを教師が価値付け、また活動したりみんなで交流したりすることで、「いいこと見つけた！」「やってみたい。」と試してみる…、さらに「いいこと考えた！」と思いをもつ。教師は一人一人に価値付けしつつ、題材の要所に子どもの思いを広げる交流や、新しい材料や「えっ！」と思う要素などを組み込んでいくことで子どもの思いは連続し追究していくことで力を伸ばしていく。

試して発見したことは話したくなる

題材を通して「まほうのめいろ」の実践から

年間の指導計画をつくるとき、光や色があふれる授業を各学年、年に１回程度組み込むことにしている。低学年の子どもたちは、はっきりした色を好むことから蛍光絵の具をつかった題材は光と色の面白さを実感できそうだと考えた。蛍光色の発色のよさはそれだけで、惹きつけるものがあると感じたからだ。

最初は単純にローラーをつかって行為を楽しむ。農作業に使われる養生用のビニールシートにローラーで描く。何か形にしたくて描こうとする子もいるがいつもの筆やクレヨンのようにはいかないので、長く道のような線がつながっていく。床に敷いたブルーシートにローラーの線が浮かび上がる。

「道みたいになったよ。」

「なんだか光っているみたいにみえる。」

基本的には、ローラーに夢中なのだが蛍光色の発色に心奪われるつぶやきも出てくる。

「実はね、今日の絵の具は魔法の絵の具なんだよ。」

「みんなで、魔法をかけてみよう。３・２・１！」

教室の照明を消して、ブルーライトで見ると、本当に絵の具が光って飛び出してくる。子どもたちの歓声が上がる。わくわくした思いが子どもたちの気持ちを一体化させ、もっとやってみたい気持ちが高まったところで次の提案をする。

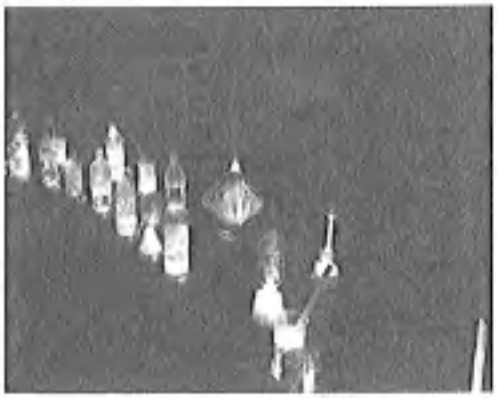
「魔法の絵の具をつかって『まほうのめいろ』つくりましょう！」

実は蛍光色ではない色を１色だけ混ぜておいたことも子どもたちは気付いていて交流の場面で、その話題が出てくる。

次の時間はシートを大きくしてグループで活動した。『めいろ』という言葉からローラーの線の形にこだわりが出てきたり、隠れる色をうまく使って迷路の種明かしが現れるような仕組みを考え出したり、友達と線をつないでいく中で一緒に相談したりするなどの姿が見られた。

最後に、出来上がったシートを教室中に張り巡らし、その中を探検する。大人の感覚だと、色の線があふれる空間にいるだけで子どもは迷路にいるような気持ちになるのではと考えていたのだが、子どもたちは自分がつくった迷路を指で一生懸命たどったり、友達と一緒に迷路をたどっている様子も見られた。

授業で輝く まとめ



６年生になって、この学年の授業を実践させてもらうことができた。LEDライトを使って光そのものを素敵に見せようとする授業である。

心を動かされたことが２つある。

１つ目は、材料への自由度が高かったことで子どもの表したい思いが広がったことである。「光が揺れる動きが出したいので水が使いたい」「水に色を付けたいから入浴剤を持ってきた」など、「こんなものも使えそうだ」と考えて自主的にたくさん材料を集めてくる。子どもたちが学習の主体者として成長しているのがわかる。

２つ目は、年に１度ずつ行ってきた光を使った授業で培われた力が、子どもたちの中に既習として働いていたことである。みんなと一緒になってつくったり、一体となって見たり感じたりした記憶は心に残るのだと思った。

個の輝きを響かせ合う図画工作科の学習

提言者　札幌市立富丘小学校　八田　博之

個の輝きを　活動への意欲が作品への思いを高める

図画工作科の授業でまず大切にしたいことは、造形活動への意欲を高め、作品への思いを豊かにできるようにすることだと考える。意欲を生むために、題材を生活に関連させたり、物語に浸らせたりするなど、子どもたちの興味や関心につながるような構成を工夫していく必要がある。ただ、高い意欲をもった活動は、表現する楽しさや喜びに浸るが必ずしも満足感には結びつかなかった。自分が思い描いていたよさ（楽しさや美しさなど）が作品に表れなかったこともその要因であった。

そこで、作品が二面性をもつように題材を構成するようにした。開くと…、裏返すと…、動かすと…といった作品の変化は、その工夫や楽しさが伝わりやすいものになった。その中でも子どもたちを夢中にさせた変化は「暗くすると…。」であった。暗所で光る素材は、その美しさに浸ることができる作品を生み、子どもたちの満足感につながったと考える。

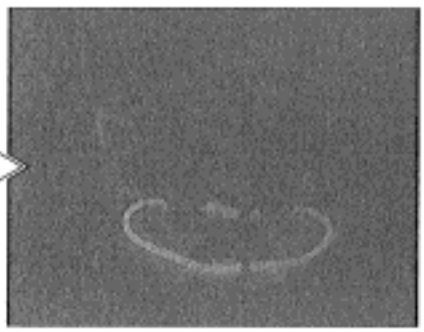
認め合う仲間　仲間と認め合う喜びを目指して

暗所でほの明るい光を放つ蓄光性の素材は、明るいところで見るときと暗い所で見るときの違いが大きく、暗くした瞬間の驚きや感動が歓声となって表れた。友達同士で作品を鑑賞し合う際に「友達から認められた」という思いにつなげることができたと考える。

ただし、認められたのは、光ることやその美しさなど、素材の魅力に頼る部分が大きく、「おやすみなさいよい夢を」という題材でつくった作品に対する作者の思いが伝わったわけではない。「きれいだね。」「楽しいね。」といった感想の交流だけでなく、作者の思いや意図にも触れてほしいと考えるようになった。

鑑賞による交流でお互いのよさを認め合う

明るいところ



暗くすると…

題材を通して

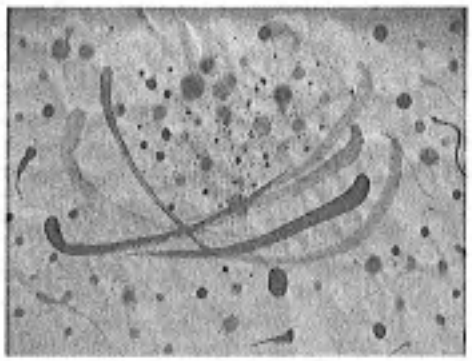
6年生の教科書に墨を使った表現を扱う題材がある。墨の濃淡やかすれやぼかしといった技法や筆や刷毛などの用具などを総合的に生かして表現する題材である。『私の墨曲（すみきょく）』と題し、題材を構成した。はじめに、技法や用具に浸る時間をとり、その後、音楽を2曲鑑賞してどちらかの曲を表す流れとした。曲は華やかで迫力のあるイメージの「カルメン」と落ち着いた柔らかなイメージの「春の海」とした。曲の鑑賞前に、その後、墨で表現することを伝え、曲調からイメージを広げやすいようにタイトルは伝えずに曲を聴いてから取り組んだ。

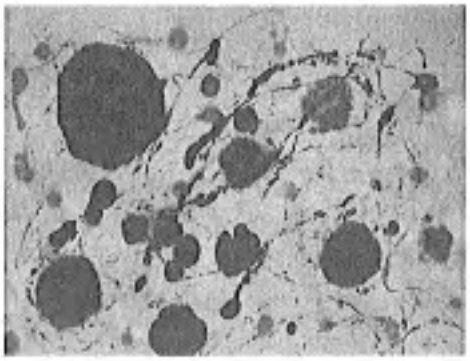
思いが伝わる喜び

作品には曲想から受けるイメージの違いが如実に表れた。「カルメン」を表現した作品は力強く濃い色で、打楽器のイメージなのか、円形が描かれた作品が多く、一方の「春の海」は、曲線や淡い色を中心に使った作品となった。

鑑賞交流でもお互いに相手の表現した曲やそれぞれの表現の意図にまで触れた交流につながった。作品で表現することでお互いの思いが伝わり合ったという実感は、積極的に人と関わろうとする姿勢を育み、図工の学習だけでなく、学級での生活でもよい人間関係をつくる基盤となったと考える。これからも、お互いの表現のよさを具体的に認め合える、よさが響き合う題材を構成し、よりよい人間関係づくりにつながる学習を模索していきたい。

「カルメン」を表した作品





「春の海」を表した作品

「もっと○○○！」を生み出す授業づくりの在り方

提言者　札幌市立盤渓小学校　櫻田　悟

授業の在り方　「いいこと考えた！」が自然と生まれるために…

「いいこと考えた！」「先生、次はね…」

こんな言葉が自然と生まれる授業ってステキだとは思いませんか？！

正直、最初から聞こえていたものではありません。恥ずかしながら、この年になって、ようやく…。

そんな授業を目指し、日頃考えていることは、目の前にいる子どもの姿である。

この授業を通し、何を伝えていくのか…。何を学んでほしいのか…。

そしてどういう自分に成長していってほしいのか…。

そこで、授業づくりで大切にしていることは、３つ。

『出会い』『場づくり』『なかま』である。授業をスタートさせたとき、目の前にいる子どもたちが、ここではあの子が…、ここではあの子が…輝ける…。そんな授業づくりを大切にしたい。

『出会い』場づくり　大切なのは『出会い』

『出会い』こそが、授業のいのちと言っても過言ではない。子どものやる気スイッチをそこでどれだけ入れられるか…。それは、花火みたいな大きなものもあれば、ちょっとしたものでも良い。毎日子どもと関わっているのであれば、日頃の生活に根ざした**プラスＯＮＥ**が大切だと考える。

たとえば、青空に自由な発想を広げていく授業。低学年であれば特に、外でのちょっとした活動を大切にしたい。みんなで天気の良い日に、あさがおに水やりをする時がチャンスである。空を見上げて…。ふわふわの雲を見て、「あっ　アイスクリームだ！」「こっちこっち　ワニが大きな口を開けてるよ…。」「うんうん　そうそう。おもしろいね！」その思いを広げる経験が子どもの心を豊かにしていくのである。

また、遠足の絵をかくとき…。遠足気分をいかに教室に持ち込むかが大切である。「もっと　よく見て…。」「すき間があるよ…。」は、子どもがかいている最中の言葉としてはタブーである。楽しかったこと、その時の情景が生まれるよう、みんなで歌った歌を流したり、先生自ら、リュックを背負い、水筒をぶら下げて登場！したり、…というきっかけも子どもをその気にさせるのである。子どもから、「あのとき○○だったよね！」「あそこに、すてきなお花見つけたよね。」…こう思わせたら、かきながら自分なりのストーリーが膨らんでいくのである。

また、ちょっとした間を有効活用。給食を食べ終えたとき、また朝教室に入ってきたときに、教師がもくもくと何かに取り組んでいる。「なんかおもしろそう！」「えっ！」「やりたいやりたい！」でもその材料がない…。そうなると、やる気スイッチの入った子どもたちは、こんなもの・あんなものと材料を準備し始める。教科書のこのページ見て…と言わなくても、「やりたい！」意欲満々の子どもたちは、材料を集め、集めながら、つくりたいものの発想を広げていくのである。

見せて見せて！おもしろそう!!

生活の中に結び付けたり、今の自分にちょっと乗り越えてみようと思わせたり、そういうちょっとした場づくりが子どもの心を揺さぶるのである。そこで、豊かな経験をし、実際の活動に生かしていける…そういう道筋と引き出しをもたせてあげたい。ただ、それはマニュアル化したものではない。だからこそ、教師は、目の前にいる子どもの情報源をキャッチし、その子たちのために、『今』『何を』を常に考え、チャンスを見逃さない確かな目を養っていくことが必要であろう。

話す・聞くだけでなく、歌ったり、かいたり、つくったりするのも自己表現のひとつだと考える。我々図工・美術に携わっているものとしては、かいたり・つくったりすることで自己表現できる子どもを育てていきたい。決してうまくなくてもいい…。表現する喜びを小さいころにたくさん経験しておくことがその子の人間性を豊かにしていくものだと信じている。

なかまを大切に… 「ならべて　つんで」の実践から

子どもの発想ってすばらしい。そのすばらしさをみんなで共有し合えるのが「造形遊び」。準備に、活動に…教師としては大変な分、子どもにとっては魅力的な活動である。ねらいと方向性をしっかりともっていれば、子どもを見取れたり、可能性を引き出せたりするチャンスである。また、子どもたちは、図工を通し、造形活動のよさを経験することと同時に、あの子のよさやこの子のよさをお互いに認め合ったり、励まし合ったり、協力し合ったりと、「学校って、クラスって、楽しいよ。」と豊かな心を養っていくチャンスにもなっていく。

「今日はね…みんなが算数で使った箱で遊ぶよ！」

「えっ！…やったあ!!　何してもいいの？！」

１年生の「ならべて　つんで」という造形遊び。算数の授業でつかった家から集めてきた箱を用い、積んだり、並べたりする造形遊び。算数では、高く積んだり、かたちのおもしろさを感じ取った子どもたち。今度はその経験を生かし、教室一杯に活動を広げていく。

「でも　ひとつだけ…　みんなとなかよく…

あと、みんなのすごい　をあとで聞くからね！」

とひと言先生から付け加え。

子どもは精一杯のアンテナを広げ、自分のやりたいこと、おもしろいことをどんどん見付け、並べたり、積んだり活動が広がっていく。

そこで、プラスＯＮＥ！

・空き箱に今回は、カップやお皿をプラスして…

・並べることをより意識させて…

・お互いの「キラリ」を見付け、よければどんどん真似もＯＫにして…

そうしていくことで、左のような形のおもしろさや、光のおもしろさも発見するようになって…。

授業が始まり１時間ちょっと。あっという間に教室いっぱいに…。また材料もなくなって…。

「先生！めいろみたい！」

並び方のおもしろさ、色合いの工夫、積み方のおもしろさ、組み合わせのおもしろさ…

一人では経験できない、みんなで取り組んだからこそ味わえた豊かな経験・体験の数々…。

お互いに満足しきって、「もうちょっと…」というところで次へ**ツナゲル活動**を…。

そこで、「じゃあ　みんなのげんきーズランドを探検して見てみよう！」と。

もっと○○○！ まとめ

右の写真は、「げんきーズランド」を探検する直前の様子である。『早く！』の気持ちと共に「見て見て！　あそこ！」と指を指しそれを説明する子、そして真剣に聴き合う姿が、確かにそこには生まれているのである。

「○○さんの積み方がおもしろくて、まねしちゃったよ。」

「みんなでいっぱい並べて　迷路みたいになったよ。」

「今度は　色も付けたりしてみたいよ。」…

ふりかえりの中で、よさを発見した子どもたち。『もっと○○○したい！』と活動の満足感と共に期待感を得ることができた。この日々の積み重ねが、子どもの表現したい心を豊かにしていくものだと信じている。

自己を拓き、協創する生徒を育成する美術の授業の在り方

提言者　北海道教育大学附属札幌中学校　寺田　実

授業やカリキュラムの在り方　個の自律と集団の成長をねらったカリキュラムデザイン

グローバル化や知識基盤社会の到来により、環境や経済、生活など様々な分野において、これまでの知識や一分野の専門家の力では解決が難しく複雑な問題が生みだされている。これからは、「何を知っているか」のみならず、身に付けた資質、能力も活用して「何ができるか」「他者と協働してどのように解決するか」というように、より主体的かつ協働的に社会と関わろうとする力が求められているのである。

美術の学びにおいては、自ら他者や作品と対話し、自己を更新するよう導くことが個の自律を促し、他者との関わりを積極的に求め、互いのよさを活かしながら新たな美しさを発見しようとする学びの風土を醸成することが集団の成長に寄与するものと考える。さらに、個のパーソナリティや成長は集団を活性化し、集団の機能が個の自尊感情や成長を引き上げるのである。このような生徒像を「自己を拓き、協創する生徒」として研究をしている。以前、私も、ともすれば生徒への説明一辺倒で展開する授業、個別での無言の制作に偏った授業であった。それを、生徒が主体的に他者との関わりを求められる環境設定や学び合う時間も大切にした授業スタイルへと考え方を変えている。

カリキュラムについては、生徒の発達段階を踏まえた資質や能力の育みを重視した題材間のネットワーク化、「A表現」と「B鑑賞」が相互に関連する題材配列の工夫、総合的な学習の時間や他教科、領域との連携などを踏まえた見直しを図っている。

シコウが生まれる授業デザイン

転機となったのは、色彩に関する学習である。この題材は、12色相環の空枠が描かれたワークシートに4時間かけてポスターカラーで平塗りをして仕上げるというものであった。色彩について興味をもち始めていた生徒の授業の振り返りに「塗り方がうまくいかなかった」という記述を見て、果たしてこの授業のねらいはどこにあったのだろうかと問い直した。色彩に関する基礎的・基本的な知識の習得と平塗りの技能の両面の育みとなるのだろうが、結果としては、いかにムラなく変化のバランスも正確に塗るかという作品づくりになっていた。色彩の学習については、様々な導入の仕方の可能性が広がり、実生活とも密着したとても魅力的な題材になり得るのに、その可能性を消していたように思えたのである。

そこで、創造的な技能よりも「生徒の思考と試行」「協働性」を重視した題材へとデザインし直したものが「色のいろいろ」という題材である。この題材はポスターカラーを用いず、三原色の色水の混色から12色相環をつくり出し、補色や彩度変化などへとグループで色の性質を探究していく学習として展開する。他者と共に活動する楽しさを感じながら、課題を解決するために考えを交わし、異なる発想に触れることで他者が自分にとって有益なものと感じ、グループのために自分も貢献しようという協創の意識も育むことができた。

色がどのような場面で役に立っているか考える場面と色水による実験では、グループ活動としたことで、実に様々な視点から考えを交流することができ、大きな効果を得られた。生徒たちは、自ら次の課題を求め、動機付けで得た学びの推進力が最後まで衰えずに持続していた。意味付けとして行ったワークシートの記述には、色の性質の面白さから広がりを見せ、日常生活や生きていくことまで学びをつなげていく生徒も見られた。また、更に深く学びたいという探究心が次の学習への動機付けになっていくものと考える。

実践を通して 「メタルアート」 内容：A表現(1)アイ　第2学年　時数：9時間

この題材は、動物をモチーフとして表したい主題を生み、金属を用いた彫刻として表すものである。日常生活で使われなくなった金属廃材を用い、動物の体の一部に活用するという条件を設定することで「見立て」の力を育てることもねらう。素材として扱う金属は、自然材料の石や木などと比べて、強度や耐久性などの面で優れており、その可塑性を生かした表現の工夫ができるという利点がある。構想に当たっては、主題を基に考えをまとめる構成的な側面と、金属材料や技法などの表現方法から実現可能かどうかを考えて練ることとの調和を図りながら心豊かに構想を練る能力を育む。

1 「シコウ」が生まれるアイディアプロセススケッチ

制作が始まって2時間目。生徒は、その時点での制作の手順をアイディアプロセススケッチにおおまかに描いている。作品の軸となる形ができてきたあたりで、学級全体で参考作品を鑑賞する機会を設ける。他者との意見交流から参考作品に見られる接合の工夫点を見付けることから、自分の作品を見つめ直し、構想を練り直す機会を設ける。より工夫した表現を見い出すことで、新たな接合技法や材料を組み替えた表現を早く試してみたいという意欲が喚起されるのである。その際、スケッチに加筆して確認し、修正を図る機会を設ける。このように、自分のアイディアを適時修正し試行する機会を保障することで、自分の作品や制作過程を見つめ直す習慣が身に付き、「シコウ」が生まれる授業へと導くのである。

2 響き合いを生む他者と交流する習慣

これまで、課題解決に向けた制作の場面は個別の制作を基本としてきた。そこをあえて、自分の作品から距離をおき、少し離れて自分の作品を見つめたり、他の仲間の作品を見て回ったりする。ときには、個人の制作より仲間への貢献を優先して制作を支援する。

自分の作品について自由な発想で制作を進めつつ、他者への支援も自ら考えて行動することで、思考や行動を自ら調整する機会を保障する。美術における主な制作スタイルは個別であるものの、他者の作品の課題にも気付き、自他の作品を共に制作している感覚となる。また、仲間の作品制作に関わることで、その発想や技法を参考にし、取り入れつつ、独創的な表現をしたい、他者に依存しないという意識について習慣化するよう導く。このような他者の作品を見る機会の充実によって、個と個の関わりが結びついた響き合いが生まれる学びを展開する。

生徒の変容

アイディアプロセススケッチは、生徒が自分の発想や構想における思考の過程を可視化するという難しさはあったものの、見通しをもって制作を進める上で効果があった。また、スケッチの技能の向上とともに、他教科や領域の学習活動にも活用できるものとしての可能性が見えた。また、昨今の課題として見えてきたのが、このメタルアートのような立体構成の表現分野である。前年度までは、構想を思うように描けなかったり、構想した形にしようと思っても創造的な技能面での課題を克服できず、作品が仕上がらなかったりする生徒が多く見られた。アイディアプロセススケッチの導入と他者の作品を見る機会を充実させることで、他者との関わりを自然な形で求め、ときに他者と協働して互いの制作を支え合いながら、行き詰った状況を克服し、自分なりの工夫を込めた作品の制作を進めていた。

考えるための時間

提言者　札幌市立平岡中央中学校　**椿野　衣江**

生徒達を取り巻く環境は豊かである。今よりも便利なものがなく、新しく生み出すこと、つくり出すことに喜びを感じていた自分たちの時代とは、比べものにならないほどの変化だと思う。簡単便利でもある。授業で少々抵抗感の強い課題に挑戦させたいと考えても、限られた授業時間や評定のタイミングのこと、何よりそういう環境の中に育った生徒達の「面倒くさいぞー」という心の声を思い、何度も題材を練り直すことが多くなった。以前から扱っていて、自分にとっては慣れたはずの題材であっても、そのままでは何か生徒の反応が予想と違うと感じることが増えてきた。そんな日々の授業の試行錯誤の様子である。

オリエンテーションで考える

授業の始めに必ず伝えていることがある。それは、美術の時間は「今の自分」を見つめる時間である、ということ。人は日々成長し変化する。10年前、中学生にとっては幼児期の自分が描いていた絵を、中学生の自分に描くことができないように、10年後の大人の自分には中学生の表現は不可能である。「中学生の今」という時間が一度だけの時間であるということを考えさせてみる。また、表現が苦手だと思い込んでいる生徒へは、一生懸命表現することの価値を伝えてみる。走るのが得意で、速く走ることができる人もいれば苦手な人もいるように、絵を描くことについても同じかもしれないということや、出来栄えよりも一生懸命取り組んでみることが肝心なのではないかと伝えてみる。時には、人生初めて描いた絵を、今も大切に保管している家庭もあるのではないかと問いかけてみる。そしてそれがなぜかを考えさせてみる。少しだけ「上手な作品」に対するバリアを外して美術の授業をスタートしてみることにしている。

絵を描くことで考える

生徒たちに毎年１冊のスケッチブックを与え、卒業までに100枚の人物クロッキーを描く取組を続けている。１年生が初めて描く（初回はあえて何も指導せず描かせてみるが）クロッキーを見ると、描く機会や経験が随分と少なくなっていることに気付く。そこで、少し濃い鉛筆の使い方から始まり、筆圧の話、プロポーションの話では最新のアニメのキャラクターの話もしてみる。もっと単純にものを「見て描くこと」について語るようにしている。動くことのないモデルをただジッと見ているが、「そもそも何を見るのかがわからない」と、正直な生徒は言う。描き方よりも見方なのではないかと感じる。ニワトリの足を４本平気で描く大学生がいると、以前大きく話題になったが、このようなことは決して珍しい話ではないと思う。それでも根気強く続けていく。そして３年生の終わりまでには、筆ペンやパステルなど、鉛筆以外の画材も選択できるようにしている。また最終的には、モデルを教室の中心に据えて好きな角度からのクロッキーに挑戦できるようにする。その頃にはモデルも自由なポーズを決め始める。時々１年生のクロッキーに、匿名の上級生からアドバイスメッセージを入れる機会を試みている。メッセージを書く側、受ける側のどちらにも緊張感が生まれる。総じて好評である。なお入学直後に初めて描いた各自のクロッキーは、卒業期まで大切に保管する。返却する頃には、間違いなくすべての生徒がかなり上達しているはずであり、楽しみな瞬間でもある。他者との比較ではなく、自己の成長を感じてほしい取組でもある。

色を学ぶことで考える

たくさんの色に囲まれて生活していると、色のことをわざわざ意識することが少ないようである。かつての時代のように白黒がカラーになる感動も、もはや今どきの生徒には理解されにくい。このあふれるばかりのたくさんの色を、もっと感覚的に学んだり考えたりする機会を大事にしたいと取り組んだ１年生の１学期の授業である。

①カラーイメージ

約200色の配色カードを用いて色のイメージトレーニングを行う。まずは「温かい」「冷たい」と感じる色のカードを200色の中から選択させ確かめ合うことから始める。「強い」「弱い」や「重い」「軽い」など資料集にも紹介されているテーマで練習を進める。「春」「夏」と季節のイメージを考え、慣れた頃に「札幌のイメージ」「北海道のイメージ」「中学生のイメージ」「自分自身のイメージ」など、徐々に複雑なテーマを与え、自分のイメージを色に置きかえる練習をくり返していく。それぞれの理由を発表し、互いに交流させてみる。発表時に周囲から共感を得ることができるかどうかも重要なポイントである。最後はイメージテーマを自分で決めさせる。以降のあらゆる作品の配色決定のための下敷きともなる学習となる。

②カラーハント

絵の具の混色練習では、１年生を美術室から屋外に連れ出し、校舎周りで見つけて気になった色を、その場で混色により再現する学習に取り組ませている。それはその日その時刻の空の色であったり、植物の葉の色であったり、たまたま見つけた昆虫の色であったりと、まさに色々である。色の複雑さに気付くとともに、パレットの上では、本物に近づくための混色の工夫が自然と繰り返される。ここではものを見つめることや、手を動かし、頭で考え、心で感じることを意識させている。

形を学ぶことで考える

色と同様に形についてのイメージも、紙に描いたり粘土で表現したりする中で何度も試行錯誤する時間を大切にしたいと考えている。アイデア用紙をたくさん用意し、その努力の跡やアイデアの変遷が一目でわかるように、小さな走り書きのメモさえも消すことをなく全部提出させる。最後に完成する作品にたどり着くまでの考えの変化や葛藤が大事な学習だと考える。

２学年では「14歳の心のカタチ」を粘土で表現する題材に挑戦している。思春期の心の揺らめきを抽象的な形に置き換え表現してみようというものである。マインドマップを使って自分の内面を深く見つめ、自己理解を進める。絵画表現が苦手だと感じている生徒でも、練習用の油粘土を１時間手に持って試作を繰り返している間に、自分らしいカタチが見えてくる。完成時には制作意図を書くようにしているが、抽象表現の場合には特にその思いを表すことが不可欠である。また、それを野外彫刻に見立てて屋外の設置場所を想定し、画像として記録する。季節の空気や光による陰影の効果などを計算して撮影する生徒の姿は、映像に慣れた今の時代なのだと思う。学校の敷地に設置されている作家の彫刻作品も、空間と作品との関係について考える好材料となっている。

学校生活で生きる美術の力を考える

授業で学んだ形や色彩の学習成果を、学校生活の中で生かし活用することは、美術科の役割である。学級旗のデザインや学校祭での装飾活動、儀式を盛り上げるための装飾づくりなどはもっぱらであるが、そのほかにも教科として手がけられるところがないか模索を続けている。

旅行的行事で用いる「しおりの表紙のデザイン」は、年度始めのデザインの授業として取り組んでいる。目的に合う構成作品を制作するため、授業でも行事のねらいを全員で確認する。その上で１学年では色紙を使った構成で、２学年ではコラージュの技法を用いた構成で表紙を制作する。また３学年では、学年全員の構成を一つにまとめたものを表紙とするなど、学年によって技法やまとめ方は毎年少しずつ変えている。作品をコンピュータでデータ化し、共通のデザイン枠を利用してカラープリントし、学年の一体感を生み出している。行事を彩るための一役を担っている。

考えることで成長する生徒の姿

まとめ

表現活動を通じて、じっくり「考えること」を大切にしたい。そうしてつくった作品を通して自分と向き合い、他者とのつながりを認識する。世の中がどんなに変化しても、たくさんの形と色彩を駆使して表現することの面白さ、手をかけることの価値や意義など、美術科でなければできない学びを、根気強く伝えていこうと思う。

「感性」を育むための授業づくりの在り方

提言者　札幌市立啓明中学校　**平井　歩**

授業の在り方　「目的」があって「手段」が生まれる

私が授業を通して生徒に育んでほしいことは「感性」である。感性と一口に言っても捉え方は様々だが、私の考えるところは美術に対してだけでなく、様々なことや相手に対して感じ取り、受け入れ、考え、表現・発信できることである。それらのことを育むための授業とはどうあるべきかを考えて、カリキュラム・題材づくりや授業づくりをしている。

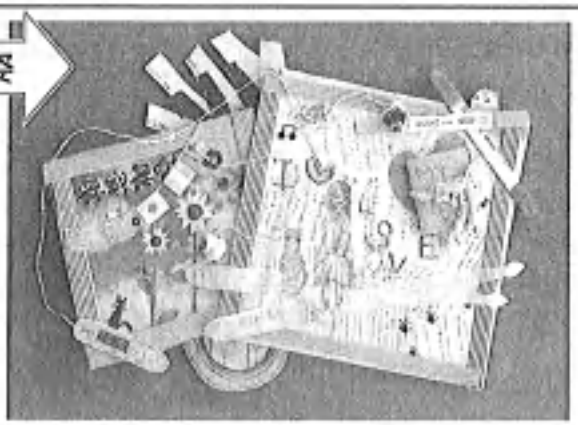
そこで大切になってくることは、「何のために表現するのか」という目的意識を明確にした題材・カリキュラムづくりと授業の進め方であると考える。また、３年間を見通し、発想・構想の能力や創造的な技能を関連付け、ステップアップさせる題材設定も資質・能力を高めていくうえで重要である。これらを意識することにより、授業に対する関心・意欲が高まり、主体的な活動の基、感性を働かせながら資質や能力を育む授業になると考える。

題材づくりのきっかけ　描くこと・つくること自体が目的とならない表現活動

現在、題材やカリキュラムを考えるうえで、前述した考えに至ったきっかけは、「自画像」の指導にある。

「自画像」という題材は多くの小・中学校で扱われている題材の一つであり、私自身も教師になった早い段階から自画像に取り組んでいる。その当時は、「鏡をひたすら見つめて、鉛筆や絵の具を使って立体的にリアルに描く。」という題材であった。私は美術教師であり、絵を描くことが好きで美術教師になったので、その「ひたすら鏡を見て描く」行為になんの疑問も抱かないし、嫌なことは一つもない。しかし、この題材で果たしてどれくらいの生徒が、主体的に関心・意欲をもって取り組めているのか…。描いている生徒の様子やでき上がった作品を見て感じたことは「描いて楽しい！」と思える様子や「生き生きした姿」を描けている作品があまり多くはないということ。考えてみれば学校には様々な生徒がいて、全ての生徒が美術を得意としているわけではなく、また、14歳前後の年齢の生徒たちは、自分たちの容姿に少なからずコンプレックスを抱いている者もいる。そのコンプレックスの根本を１時間いっぱい見つめ続け、しかも思うように描けないとなると、それは苦痛以外の何物でもないのではないか…。と考えるようになった。

表現の目的は…生き生きとした自分の姿



そこで初めて「リアルさを追求するため」の「自画像」ではなく、「中学生時代の自分を生き生きと表現するため」の「自画像」に取り組もうと考えた。そこで考えたのは、様々な素材や表現方法を組み合わせるミクストメディアで自分を表現する題材である。この題材の考え方をきっかけに、他の表現題材についても、「目的」を何にするかを明確にして、そのためにどのような素材や画材を用意するのか、また、自己表現はどうあるべきかを考えるようにしている。

※自分の気に入るような作品をつくるためには、技能面の高まりが必要なのは言うまでもありません。

題材を通して 水墨画を通しての自己表現

絵画表現には様々なものがあって、画材や描き方の選択は描く人の思いや意図によって変化するものである。しかし、中学生は「描く」=「写実的」という考えに陥りがちで、とにかく正確に精密に描くことを意識することが多い。

今回紹介する題材では、水墨画を通して、絵画における表現方法の多様性や「描く」=「写実」という固定観念を変えることで、自己表現の幅を広げ、深めることを意識してた。

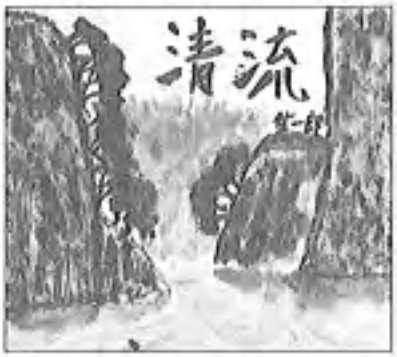
生徒にとって墨とは、国語科における書写でなじみが深く、絵画制作のイメージはあまりないと思われる。そのため、絵画を描く時に、画材にすることへのためらいや抵抗があったり、鉛筆代わりに使おうとする生徒も少なくない。であれば逆に、その書写を出発点とすることで、墨に対する抵抗感を減らせるのではないかと考えた。

上記のように、まず「書写・書道」を導入とし、漢字を「書く」ことで、「にじみ」や「ぼかし」、「濃淡をつける」などといった様々な表現方法を模索する。また、生徒同士の交流から、新たな発想を引き出し、表現の幅をさらに広げたいと考えた。次に、書道の表現と水墨画の表現に酷似性を見出せるような書道と水墨画の作品を比較鑑賞することで、文字を書いた時に身につけた表現を絵画表現へとつなげていった。

生徒たちは書道表現と水墨画表現との酷似性や「かすれ」や「にじみ」がただの模様のようなものではなく、別な具体的なものに見えることに驚き、墨・水・筆が織りなす多様な表現世界に興味を沸かせていた。

これらの体験をもとに風景の写真を水墨画で描く挑戦をした。その中で、筆で文字を書くように樹木を生き生きと描く生徒や薄墨を点でにじませるように慎重において描く生徒など、それぞれが考え工夫した表現をする姿が多く見られた。

この水墨画の題材は2学年時に行ったが、この経験を3学年時に取り組む水墨画の題材「修学旅行の思い出」につなげて考えている。最終的には修学旅行で東北の自然や文化に触れた思い出を自分なりの表現で色紙に描いていく。



授業で輝く生徒の姿 まとめ

今回取り上げた題材では、墨を使って描くことへの抵抗感を減らすことや「描く」=「写実的」と考えがちな意識を変え、豊かな表現活動をしてほしいと考えたものである。また、今回の題材だけで完結するのではなく、最終的には3学年の水墨画までつなげて考えカリキュラムに組み込んだ題材である。この水墨画の授業での試行から生まれた表現方法を水墨画にとどまらず、他の描く活動やつくる活動など、様々な場面で生かし、発展させてほしいと考えている。

今回例示した自画像や水墨画は自分自身の思い入れやこだわりを独自の表現方法を用いて目指すための表現活動になる。自分のこだわりを作品中に込めることで、より関心・意欲を引出すことができると考えるし、活動中の主体性や集中力も増すと考える。また、これ以外にも、自分以外の誰かのために描く、または、つくるといった目的や実際に生活の中で使うことのできるものをつくる目的の題材設定も行う。「贈って喜ばれるものはどんなものだろう？」「実際に使ってみたい」など、でき上がった作品のその向こうに自分や相手の喜ぶ顔が浮かぶような、自分たちの生活をより豊かにする表現活動も、表現活動に対する意欲や関心が高まると考える。

どの題材でも、座席をグループとして、常に周りの人たちとコミュニケーションがとれるようにしているが、これも自分たちの表現の幅を広げるための工夫である。また、グループでの表現活動は鑑賞授業時の対話にも大いに役立つ。

上記のようなことを意識したカリキュラム・題材の設定することで、様々なことや相手に対して感じ取り、受け入れ、考え、表現・発信することが育まれると考える。

一人一人が生かされる授業づくりの在り方

提言者　札幌市立福住中学校　久蔵美和子

授業の在り方

特別支援学級における美術科の授業は、美術の時間を設けて展開する教科別の指導と遊びの指導、生活単元学習及び作業学習として展開する教科等を合わせた指導（領域・教科を合わせた指導）となる場合がある。本学級では、知的障害学級５名、情緒障害学級４名であり、１学年１名、２学年２名、３学年６名の全学年が美術の授業を一斉に受けている。授業のカリキュラムを立てる上で、全学年同じ題材となるため、個別の指導計画に個々の目標を立てている。現在在籍している生徒の障害の状態、造形活動への興味・関心等により、生徒一人一人の表現及び、鑑賞の能力は異なっている。特に、小学校の時に通常学級に在籍していた生徒や中学校の途中から特別支援学級に転級した生徒へは、特別支援学校中学部学習指導要領だけではなく中学校の学習指導要領に示されている美術の目標を考慮しながら題材を設定している。現状では、前述した「合わせた指導」ではなく、「美術」として授業を行っている。

授業の内容は、中学校美術の教科書、資料集の中にある題材を選び、かつ自分でもできそう…と思える題材を、と日々考えている。だが、その内容では難しく、取り組むことを躊躇する生徒もいるので、一人一人が活動しやすい内容になるよう工夫することが必要である。学級の一人一人が自分の想いを表現することができるようになること、それが私の授業をつくっていく上で大事にしていることである。

苦手意識からの脱却

特別支援学級の生徒を見て思うことは、自由に自分の思うままに描き独自の世界観をもっている子たちと上手に描けないから美術はやりたくない、描きたいけれど描けない、取り組みたいけどうまくいかない…と、自己肯定感が低い子たちがいるということだ。絵が描けないと思っている子への支援としては、手順書を渡し、その通りにやっていけばうまくいくという自信をもたせたり、うまく描けるような見本を教師が提示したり、実際に描き方を見せたりしていた。うまく描くことが表現として大切ではないことを何度も本人に説明し、よさを教師が評価しても、作品を見た保護者の評価が本人のやる気を大いに左右してしまうのも現実である。独自の世界観をもって描ける子も、見た人の評価により、嬉しくなったり、残念な気持ちになったりする。

人物画は、そのことが顕著に表れる題材である。似顔絵ではないので、似ている・似ていないによって評価するのではなく、線の勢いや画面構成などを全体として評価することを心掛けている。

授業では、生徒作品の鑑賞時の教師の褒め方や、認め方がとても大事であると日々感じている。その褒め方についても、「お世辞」としか受け取らない生徒もいるので褒め方にも配慮が必要である。以前の作品と比べてどんなところができるようになったのか、具体的にできている部分を示したり、参考作品と比べてどんなところがよいかを示したりするのである。生徒が満足する作品ができるような支援の工夫が必要となっている。そして、造形活動が苦手と思う前に「楽しさ」「面白さ」を感じ、もっとやってみたい…と感じることができるようになってほしいと願うばかりである。

一人で作り上げる作品に限界を感じているならば、グループでの共同制作を…と考えたのが学校祭の学級展示作品である。大きめの作品で、自分が担当できるものをグループ内で分担し制作する。学年がまたがっているので、上の学年の生徒が下の学年の生徒に教えたり、一緒に考えたりする場面を設定し、美術の時間が苦手な活動の時間ではなく、楽しい一時になるように授業づくりをしている。

グループ制作を通して 学校祭学級展示 「空・大地・海のイメージ作品」グループ活動

美術と生活単元学習を合わせて指導を行った。この題材は、グループごとに「空・大地・海」いずれかを表現する課題を与えた。

1 「シコウ」が生まれるグループごとの話合い・活動

班長が中心となり、選んだテーマから一人一人が考えるイメージを発表してもらい、その言葉を書き留めながらまとめていった。作品の題名を決めてから、実際の作品づくりとなった。生徒の中で、混色担当、ローラー担当、具体物の描写担当を相談して決めた。ローラーやスポンジスタンプなどを使い、色の重なりや形を相談しながら、制作していった。

絵を描くことが苦手な生徒もいたが、先輩と一緒に取り組むことができる嬉しさから、とても楽しく活動していた。色を混ぜる楽しさ、重ねられるスタンプの楽しさ…造形の楽しさを、自分一人だけではなくグループ活動の中から見い出していた。他者との交流の中で、「シコウ」が生まれているのだと思う。

2 響き合いが生まれる学習展開

何も見なくても動物や昆虫をどんどん描き進められる生徒もいる。具体物の描写が得意な生徒は、描写が得意ではない生徒からは羨望のまなざしを向けられた。グループそして学級の中で、その生徒の描写が他者から認められながら作品づくりは進められていった。「ローラーで美しく色の重なりを塗ることができる」「大きな紙の上で転がすローラーの動きが楽しい」「スタンプを点々・点々…と色を着けるのが面白い」などと周りの活動を見て、自分もやってみたいと思う生徒が何人もいた。その響き合いが生まれてくるのがグループ制作の良いところであろう。

展示教室では、普段展示することのない天井に作品を飾り、電気の光を通して作品が輝いているのを見て、そこで色の美しさに気付く生徒もいた。床に置いた海の作品から、波打ち際の音が聞こえてくるようなイメージを膨らませながら見ている生徒もいた。展示した作品の新たな息吹を感じた瞬間であった。

授業で輝く生徒の姿 まとめ

今回の共同制作の題材から、制作していく中で自分が活躍できることをグループ内で分担し、先輩に教えてもらいながら実践したり、色の重なる面白さを友達と共有したりしながら制作を進めた。一人ではできない大きな作品へ取り組み、完成作品を鑑賞し、達成感を感じていた。

今後は、自分の作品づくりの際に、隣の友達が工夫している表現を取り入れながらつくり進めることができる題材に発展させていきたい。周りの人とコミュニケーションをとりながら、表現の幅を広げることができるように、一人一人が楽しさや、面白さを感じることができる教材を用意することが重要となってくる。

一人一人が自分の想いを作品に表すことができるような題材設定を今後も模索していきたい。

MEMO

各地区サークル活動報告

札幌市造形教育連盟

研究主題

"すき" が輝く造形活動

Team Hokkaido

第66回全道造形教育研究大会
札幌大会　プレ授業

平成27年11月30日

授業者　三浦真奈美　札幌市立稲穂小学校

札幌軟石の成り立ちや歴史を知り、手で触れ、光に当て、様々な見方をしながら、石と向き合う授業でした。自分で選んだ「わたしの石」に自分の表したい思いをのせ、様々な道具を駆使して表現しようとする子どもの姿がたくさん見られました。

研修会「札幌軟石をさわってみよう」

平成26年11月1日

教育大学札幌校　講師菅原尚俊先生

プレ研究授業で扱う札幌軟石を実際にさわってみようという内容です。菅原尚俊先生に道具の使い方、札幌軟石の特徴などを教えていただきました。

石狩造形教育連盟

子どもの表現意欲を高める授業のために

～「おもしろそう」「おもしろい」「おもしろかった」～

石狩教育研究会 図工美術部会の活動として

☆石教研二次研究協議会の様子から

小２研究授業　江別市立江別第二小学校　村田麻己教諭

つないで　つないで　―ビルダーカードを使って―

【授業の様子】

２分間のカードをみんなでつなげてつなげて、みんなが元もともつながって！最後は"パンダーイ！"の歓声があがり、授業を終わらせたくないと言う子どもたちでした。

小６研究授業　江別市立対屋小学校　佐々木博司教諭

おもいを版に

【授業の様子】

子どもたちが、自分の作品をとても大事にしていることが伝わってくる、すんなり授業でした。作品の完成が本当に楽し

中２研究授業　江別市立大麻中学校　樋田裕美教諭

私のカード　―トランプの１４をデザインしよう―

【授業の様子】

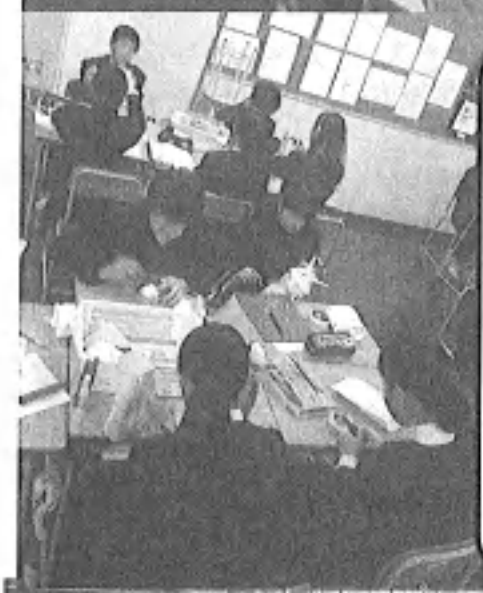
アイディア満載の生徒たちの中に、本当に授業をとても楽しんでいるのがとてもうれしかったです。どんなものカードが完成するのでしょうか。

◎実践アトラクション

☆石狩の作品集 第２０集

上川造形教育研究会

研究主題　『「わたし」の喜び』あふれる造形活動
～創造の喜びを実感できる造形活動をめざして～



平成２７年度上川造形教育研究会
平成２７年１１月２３日　名寄市立名寄中学校
授業者：山路　藍
題材名「紙と光の響演～ランプシェードをつくろう～」

- LED ライトにプロッキーで着色し，意図に応じて塗り替えるという素材や用具の活用が研究されていた。
- 発表場面が工夫され，作品の交流発表もあり，学び合って高め合う授業であった。
- 上川管内から１９名の教員が集まり，有意義に研修を深めることができた。

旭川市教育研究会 図工美術部会

研究テーマ「わたしの喜び」あふれる造形活動

【彫刻出前授業】

- 彫刻巡回展出前授業（第二中）　7月 6日
- 彫刻巡回展出前授業（忠和中）　7月13日
- 彫刻巡回展出前授業（北光小）　7月17日
- 彫刻巡回展出前授業（西御料地小）7月21日
- 彫刻巡回展出前授業（近文第一小）10月5日
- 彫刻巡回展出前授業（東五条小）　10月7日

旭川彫刻美術館と連携し，旭川彫刻美術館に収蔵している作品を，希望する学校へ持ち込んで展示する「巡回展」と，作品の鑑賞の出前授業を実施しています。彫刻作品を身近に感じられる機会であり，とても人気があります。

【パレットの仲間展】

1月17日～23日

旭川・上川の図工・美術に携わる先生方による展覧会を開催しました。旭川西イオンを会場に，多数の方に御観覧いただきました。

【児童生徒作品展】

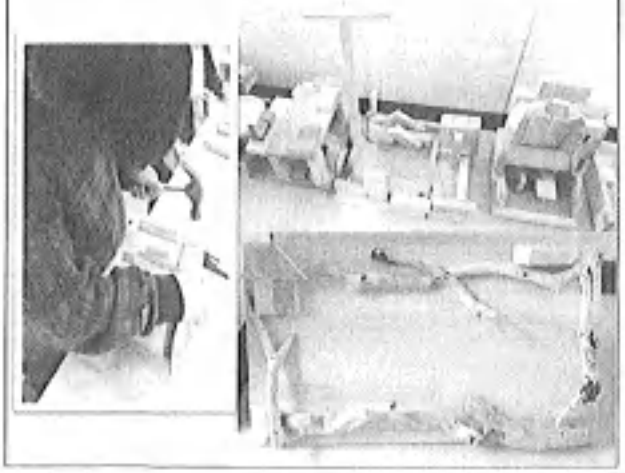
2月18日～21日

旭川の小中学校を対象に，児童生徒作品展を開催しています。審査には図工や美術が専門ではない先生方にも審査に加わっていただき，作品の見方や指導に関することを交流しながら作品選考を

【10月研】

「ギコギコクリエーター」10月20日

教科書題材をテーマに，4年生の「立体に表す」学習の公開授業をしました。午後は，北海道教育大学旭川校の教授による造形遊びのワークショップを開催しました。



平成27年度も盛りだくさんな内容で，大変アクティブに活動しました。部員の減少など課題もある中ではありますが，内容を濃く意義のある活動を目指して取り組みを進めています。

留萌地方美術教育研究会

研究主題 「喜びひろがる　心つながる造形教育」

研究授業「天中の花を咲かせよう！」

Team Hokkaido

第45回留萌管内造形研究大会

9月15日

天塩町立天塩中学校　　米澤卓也先生

本年度は天塩中学校を会場として、米澤卓也先生が絵画専門の知識と技術を駆使した研究授業を行ってくださいました。
子どもたちは、モダンテクニックを活用したピースをグループで持ち寄り、ふるさと（天塩町）のイメージを「花」のかたちに託して表現しました。

子どもの作品を語る会

研究授業終了後、同会場にて管内小中学校の子どもたちの作品を並べて、授業を通した子どもの変容や授業づくりのポイントなどを交流しました。うまくいったことよりも、子ども・先生の失敗や苦労を打ち明け合いながら、より良い方法を具体的に探っていく機会になりました。

版画集「版」　17集発刊

本年度も管内の力作が揃った版画集を発刊することができました。カラー版画はフルカラー印刷ページになっています！

函館市美術教育研究会

研究主題　夢・つくる・人～未来はぐくむ造形教育～

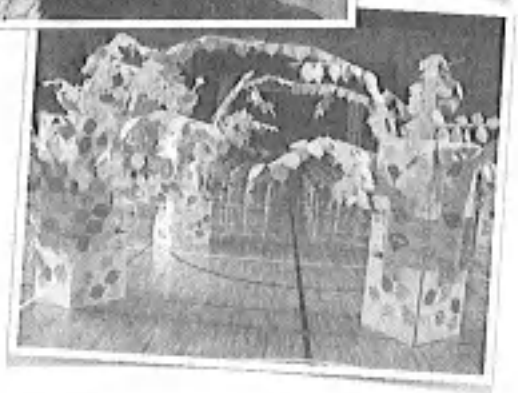
全道大会実施報告・実技研修会・美術館連携授業など

Team Hokkaido

1

第６５回全道造形教育大会函館・渡島大会の実施

研究主題「夢・つくる・人～未来はぐくむ造形教育～」のもと、全道各地・東北方面からたくさんのご参加をいただきました。また、フューチャーリーフへのご協力もありがとうご



2

美術館「勅使河原蒼風の眼と美の潮流展」

小・中学校と美術館の連携授業（股浜小・深堀小・的場中・深堀中の４校）の教材制作した屏風が、１１月初旬、美術館講堂に展示されました。

3

「学力を伸ばす美術鑑賞法VTSの進め方」の研修会

１月１３日にダブルヘッダーで開催した美術館で瀬戸英樹さんの絵の独特の 世界に触れ、その後教育大で、鑑賞での三つの問いかけ 1この絵の中でどんな出来事が起こっているか 2絵のどんな所からそう思うか 3その後さらに発見したことは? 等を通じて、子どもの思考を深める事を 楽しく学ぶことができました。

十勝造形サークル

研究テーマ「豊かな表現力の育成」

・研究サークル合同研究会　・十勝子ども大会　・出前授業　・美術館連携授業など

部員数　25名　※小学校5名（管理職1名含む）　中学校20名（管理職1名含む）

十勝子ども大会（図工・美術作品展）
11/6～8　場所：幕別町百年記念ホール
サークルの**メインイベント**です。小中学校から応募された約１５００点を審査し、絵画・工作・工芸・彫刻・版画・デザイン、約350点を展示しました。

第45回十勝管内教育研究サークル合同研究会
「抽象彫刻～どんな自分を表現するのか～」
11/13　廣田 美智子 教諭（士幌町中央中　3学年））
石膏粘土を主材としながらも針金や紙筒など、豊富な資材を治具とし、抽象化したイメージを具現化する授業を行いました。

「美術科　特別授業」～美術家　阿部典英氏から学ぶ～
8/24～25　下倉 直江 教諭（鹿追中　全学年）
今年度も日本の現代美術の先駆者、美術家・阿部典英氏を講師として迎えました。ものの見方や考え方、他人観の多様性を学び、豊かな感性を育てることを目標として、各学年2時間ずつ、植物や貝殻などで、虫や魚や鳥などをテーマにコラージュしました。

美術館連携プロジェクト：「カタチ／コトバタチ」
10月　酒中 まゆみ 教諭（下音更中2年 × 帯広美術館）
作品から感じたこと、思ったこと、考えたことを言葉に置き換え、作品から作品を作るという連携プロジェクトを行いました。美術館の収蔵庫で「思考するアート」鑑賞を2回にわたって授業し、作品から湧き出た言葉を書き留めました。それらの言葉をクラスごとに一枚のパネルにまとめました。

帯広市教育研究会 図工美術部会

研究テーマ　豊かな心をはぐくむ造形教育

帯広市小中学校造形展

会場：帯広市民ギャラリー
会期：2015年11月19日（木）
～11月24日（火）

帯広市全小中学校、特別支援学校計43校が参加する作品展です。毎年２０００点を超える作品が展示されています。

作品交流研修及び部会

（6月・10月・2月）

年3回の部会で作品を持ち寄り、交流会を開いています。指導上の工夫や苦労を共有する有意義な時間であり、部会の要となる活動です。

授業研究「ネームカード」（中学1年）

授業者：帯広市立西陵中学校
栁津　美香教諭
日時：2015年11月14日（水）
会場：西陵中学校　美術室

大切にしたのは「自分らしさ」です。自分の名前をレタリングするデザイン分野の学習です。自分の好きな色、好きなもの、名前の由来などを作品に表しました。

釧路造形教育研究会

わたしを「つなぐ」造形活動の時間

Team Hokkaido

平成29年度の全道大会に向け、活動をより充実させるべく様々な取組を行っております。地元の先生方のため、そして研究会の先生方の研修を深めるため、北海道をつなぐ一員として今後も努力いたします。

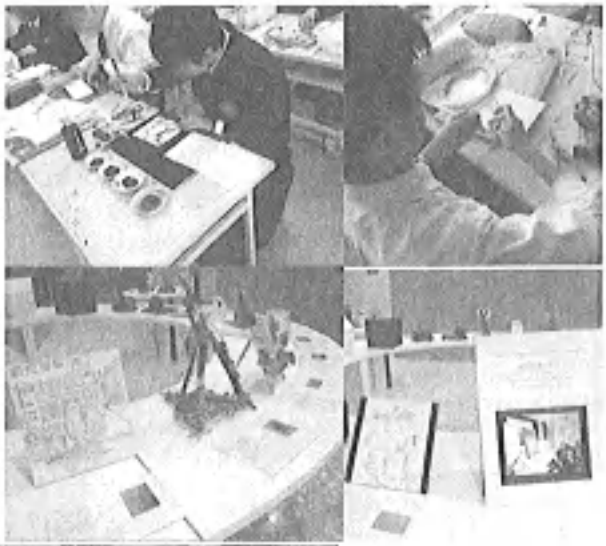
子どもの絵の見方やアートカードの実践、鑑賞についてご講演をいただき、多くの先生方が参加されました。

毎年開催している釧路管内の造形作品を集めた展覧会の様子　会場　北海道立釧路芸術館

理論研修Ⅰ　講演　聖徳大学　奥村高明教授
会場　釧路市生涯学習センター

理論研修Ⅱ　講演　北翔大学　山崎正明准教授
会場　釧路市生涯学習センター

授業で取り組んでいる作品を持ち寄り、題材の在り方や指導について、何を大切に見るべきかについてお話をいただきました。



釧路市立美術館
ロビーにて

2015
7/22【水】
↓
8/09【日】

附属釧路中学校による、美術館と協働で取り組んだ授業展の様子　会場　釧路市立美術館

次年度の研究大会に向け、小・中・高の先生方で検討してきた研究テーマ会議（2回目の様子）　会場　附属中美術室

オホーツク造形教育連盟

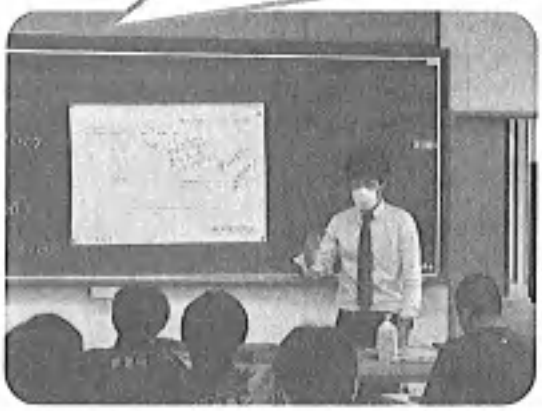
個・創・喜・感

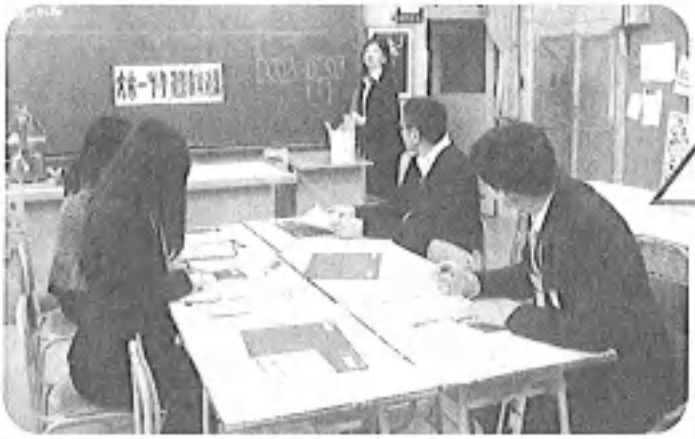
～ひとりひとりが創造的な喜びを実感するために～

Team Hokkaido

６月２６日研究授業　斜里中学校
２年生　日本の美意識　箸作り（工芸　木彫）

箸の持ち手の機能や彫刻等の堀の技法から、持ち手の形状を工夫した箸作りを行いました。研究協議の後半には、北海道教育美術展の作品鑑賞会を開き、完翔の視点や指導のポイントを学びました。

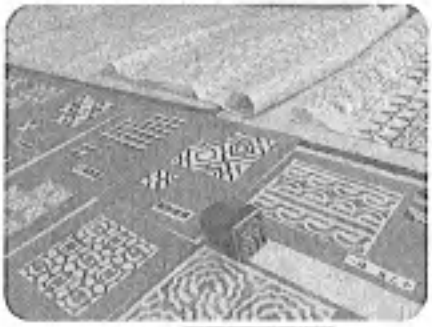


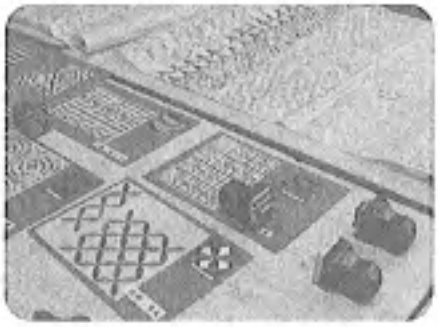


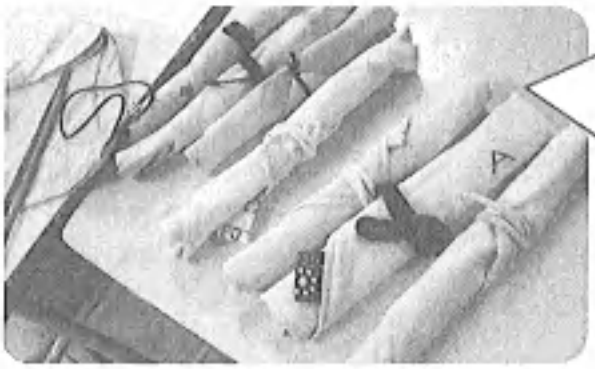
１１月６日　実技研修会
網走市立第３中学校
「和風」装飾の実践

今年度も北海道造形連盟より講師を派遣していただきました。

石川早苗先生をお迎えして消しゴムハンコの連続模様作りに挑戦。資料や材料もたくさん用意していただき参加者も楽しみながら学ぶことができました。







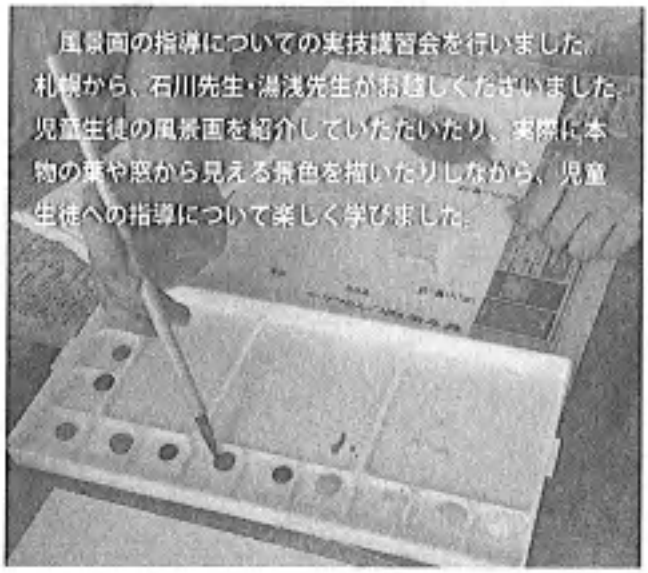
研修後の座談会では６月の研究会の完成作品もお披露目されました。

草木染めの箸袋も生徒の作品です。

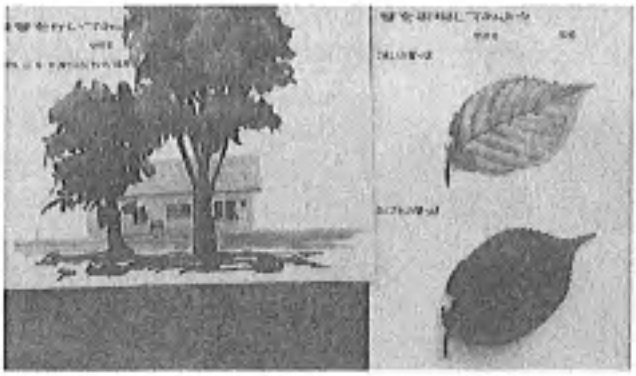
日高造形教育研究会

豊かに発想し主体的に造形表現できる児童生徒の育成

実技講習会、公開授業、日高の子どもの作品を語る会



風景画の指導についての実技講習会を行いました。札幌から、石川先生・湯浅先生がお越しくださいました。児童生徒の風景画を紹介していただいたり、実際に本物の葉や窓から見える景色を描いたりしながら、児童生徒への指導について楽しく学びました。



実技講習会「どうする？写生会」

8月12日

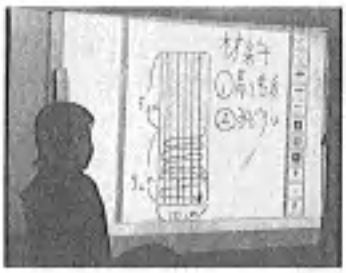
講師：石川早苗先生　ご協力：湯浅大吾先生

公開授業「アミアミアミーゴ」

12月11日

平取町立紫雲古津小学校　伊藤孝三先生

伊藤先生による、小学校5・6年生の授業が公開されました。組んで作りたいものを考え、どうやって作るか工夫し、仲間同士でプランを発表し合う姿が素敵でした。



日高の子どもの作品を語る会

1月26日　様似町立様似中学校

毎年1月に、管内の小中学校教員を対象として、この会を開催しています。様似中学校の神成先生による授業を参観した後、持ち寄った児童生徒の作品を交流し合いました。

資　　料

北海道造形教育連盟規約

1．名称と目的

本連盟は、北海道造形教育連盟といい、北海道の造形教育の振興を図るをもって目的とする

2．事　　業

本連盟は、目的を達成するため次の事業を行う
①研究会・講習会・展覧会等の開催及び後援
②造形教育に関する教科書・教材・教具等の研究
③会報の発行
④他の造形教育団体との連絡提携
⑤その他、本連盟の目的達成に必要と認められる事項

3．会　　員

会　　員　本道幼・小・中・高・その他これに準ずる学校の教職員
賛助会員　本連盟の目的に賛同するもの

4．組　　織

地区サークル　本道各地にサークルを置き、会員は原則としてこれに所属する
本　　部　本連盟の本部は、札幌に置く

5．構成及び任務

①役　　員
会　　長　1　　名　本連盟を代表する
副 会 長　若 干 名　会長を補佐する
会計監査　2　　名　会計の監査をする
②委　　員
地区委員長　地区1名　地区サークルを代表する
地区委員　地区1名　地区サークルの連絡調整にあたる
（地区委員は、地区委員長を兼務してもかまわない）
常任委員　若 干 名　会長が委嘱し、本連盟の運営に当たる
顧　　問　連盟の重要な問題につき意見を述べる
③部　　長　各部推進の要として常任委員より会長が委嘱し、会務の分掌及び執行にあたる

6．選　　任

会長、副会長、会計監査は委員総会で選出する
地区委員長及び地区委員は、地区サークルで選出する
常任委員は会長の委嘱による
顧問は委員総会において委嘱する

7．任　　期

役員及び委員の任期は1カ年とする、但し再任を妨げない

8．会　　議

総　　会　必要に応じ開催し、連盟事業につき協議する
委員総会　役員、委員をもって構成し毎年開催する
役員の選出、予算、決算及び事業の年度計画等につき審議する
常任委員会　役員及び常任委員をもって構成し、連盟の事業を執行する
役 員 会　会長、副会長、事務局長、会計により構成し、必要に応じ会の運営について協議する
部 長 会　本部役員、各部部長により構成し、必要に応じ各部事業等についての連絡調整を行う

9．会　　計

本連盟の会計は、会費・事業収入及び寄付金により執行する
会　　費　会員は、一人　年額2,000円を納入するものとする
地区サークルは、年額10,000円を納入するものとする

10．事 務 局

事務局は事務局長在勤の学校に置く
事務局長は常任委員中より会長が委嘱する
事務局には必要に応じて各部を設け、業務を分担する
事務局に事務局次長、会計担当を置く

11．年　　度

本連盟の事業並びに会計年度は、5月に始まり翌年4月に終わる

12．規約の改廃

規約の改廃に当たっては特別委員会（規約改正委員会）を設け、規約改正案を総会に提出する
本規約の改廃は委員総会の決議による

（平成6年4月29日改訂）
（平成19年4月28日改訂）
（平成21年4月総会にて改訂）

全道造形教育研究大会のあゆみ

年	回	開催地	テーマ	委員長会長	備考
1949年			（札幌美術連盟組織　全国図画工作教育講習会）		
1951年	第1回	札幌	情操教育の一環としての本道図画工作教育の進展を図るため	初代 野村　英夫	北海道美術教育会と改称 第1回全道図画工作教育研究集会
1952年	第2回	札幌	図画工作教育の新思想である創造主義美術教育の諸問題について		北海道図画工作連盟創立
1953年	第3回	旭川	美術教育の指導とは何か		
1954年	第4回	函館	図画工作教育実践上の諸問題について		
1955年	第5回	釧路	図画工作教育における学習指導上の問題の解明		
1956年	第6回	札幌	造形教育において、つくり出す力を養うにはどうしたらよいか		
1957年	第7回	室蘭	のぞましい造形教育における具体的諸問題について		
1958年	第8回	小樽	図画工作学習によって児童生徒の人間性がどのように培われるか		
1959年	第9回	帯広	新段階における造形教育のあり方		北海道造形教育連盟と改称
1960年	第10回	網走	本道における造形教育の実践を通して今後のあり方を見出そう		
1961年	第11回	滝川	子どもたちの芸術性を育てるために私たちは何を与え何をすべきか		
1962年	第12回	名寄	子どもが生活を見つめて造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか		
1963年	第13回	余市	子どもが生活を見つめて造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか		
1964年	第14回	札幌	子どもの創造能力とは何か	第2代 新妻　清	
1965年	第15回	稚内	子どもの創造能力とは何か		
1966年	第16回	室蘭	子どもの創造能力とは何か	第3代 赤石　武士	
1967年	第17回	函館	指導の構築を具体化する		
1968年	第18回	苫小牧	指導の構築を具体化する		
1969年	第19回	札幌	造形能力は、どのような指導によって育てられるか	第4代 和田　芳郎	
1970年	第20回	旭川	ゆたかに生きる子どもの造形能力をどう育てるか		
1971年	第21回	札幌	造形能力は、どのような指導によって育てられるか	第5代 伊東　将夫	
1972年	第22回	帯広	未来に生きる子どもの造形教育（生活に根ざした造形教育をどう高めるか）	第6代 高橋　栄吉	
1973年	第23回	室蘭	未来に生きる子どもの造形教育（たしかな表現力をどのように育てるか）		
1974年	第24回	美幌	未来に生きる子どもの造形教育（ひとりひとりの子どもの表現力をどう高めるか）		第1回教育美術展
1975年	第25回	江別	未来に生きる子どもの造形教育（自ら創り出す力をどう育てるか）		
1976年	第26回	岩見沢	未来に生きる子どもの造形教育（すべての子どもに造形のよろこびを）		第1回立体造形展
1977年	第27回	札幌	みずみずしい中味でしなやかな子どもを育てる造形実践		
1978年	第28回	函館	みずみずしい中味でしなやかな子どもを育てる造形実践（すべての子どもが生き生きとりくむ学習）	第7代 辻　悦平	
1979年	第29回	旭川	生き生きとしたゆとりのある子どもを育てる図工美術教育のあり方		
1980年	第30回	苫小牧	ひろがりと深まりの造形教育を求めて		
1981年	第31回	釧路	創りだす心をよびおこす造形教育		
1982年	第32回	室蘭	見る、知る、感ずる、そして創りあげる喜びを	第8代 遠藤　久男	
1983年	第33回	留萌	生活とふれ合い、創る心のひろがりを求める造形活動		

年	回	開催地	テーマ	委員長 会長	備考
1984年	第34回	札幌	知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動 （わきたつ発想・たしかな表現・つくりだす喜び）	第9代 種市誠次郎	
1985年	第35回	函館	知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動 （心をこめてつくりだす子どもを育てる）		
1986年	第36回	旭川	子どもの心をゆり動かす造形教育 （つくる心のひろがりを求めて）	第10代 森川　昭夫	第39回全国造形教育研究大会をかねる
1987年	第37回	紋別	子どもの心をゆり動かす造形教育 （表現のよろこびにひたる子どもを育てる）	第11代 松島　輝男	
1988年	第38回	滝川	子どもの心をゆり動かす造形教育 （ひたむきに創る心を育てる）		
1989年	第39回	帯広	子どもの個性的表現を授ける造形教育の充実 （君はいま創造のとりこに）	第12代 金井　秀男	
1990年	第40回	苫小牧	広がり、深まり、そして感動を！		
1991年	第41回	札幌	子どもの個性的表現を授ける造形教育 （子どものつくる喜びをひらく）	第13代 佐々木理温	
1992年	第42回	函館	子どもの個性的表現を授ける造形教育の充実 （感動、そして創造する喜びを）		
1993年	第43回	旭川	思いをあたため心をはずませる創る喜びを	第14代 鹿嶋　健	
1994年	第44回	釧路	心ときめく、創造の喜びを求めて		
1995年	第45回	千歳	豊かな心と確かな力をはぐくむ造形学習を	第15代 船蕃　昭弘	
1996年	第46回	札幌	～造形＝愛感美遊創in札幌～ 自らの心を拓く造形学習の在り方	第16代 白井　圀毅	
1997年	第47回	根室	感性から発し躍動する力を育む造形学習を！	第17代 吉田　倭雄	
1998年	第48回	留萌	楽しさにひたり伸びやかに表す造形活動と共感し寄り添う指導	第18代 芝木　秀昭	
1999年	第49回	オホーツク	オホーツク発　思・創・喜・感 ～一人ひとりが創造的な喜びを実感するために～		
2000年	第50回	函館	心の風景（ビジョン）の発信を！ ～豊かな自分づくりを生かす想創活動～		
2001年	第51回	札幌	風よ、大地よ、夢よ、北からはじまる造形の未来 ～〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉を基軸にして造形の未来をつくる		第54回全国造形教育研究大会をかねる
2002年	第52回	帯広	広い大地に紡ぐ夢　豊かな感性をはぐくむ造形教育	第19代 藤井　正治	
2003年	第53回	空知	つくる喜びを実感できる造形教育		
2004年	第54回	旭川	豊かに感じ、おもいをふくらませあらわす喜びを 生の造形教育～身体で感じ、感性を磨くための出会いを求めて～	第20代 富田　泰	
2005年	第55回	函館	めざめる感性（こころ）きらめく個性（かたち） 地域空間がいざなう造形活動のひろがり	第21代 今　裕子	
2006年	第56回	札幌	楽しさあふれ、確かな表現を実感する造形教育		
2007年	第57回	釧路	「できた！」「いいね！」の喜びが息づく時間を求めて ～つくる喜び、感動する心をつなげていく造形教育～		
2008年	第58回	北広島	豊かな心と確かな力を育む造形教育を！	第22代 菅原　清貴	
2009年	第59回	上川・旭川	身体で感じ・心はずませ・創造する喜びを ～「いま・ここで」「つなげる」造形教育を求めて		規約改正により委員長を会長に改称
2010年	第60回	函館	創造！ときめき！実感！ ～感性と知性の出会い心うるおす造形活動～		
2011年	第61回	札幌	「あったかい！」をつなげ合う造形活動		第64回全国造形教育研究大会をかねる
2012年	第62回	帯広	つくるとき・つながるとき ～豊かな心をはぐくむ造形教育～	第23代 福貫　順	
2013年	第63回	石狩	豊かな心と確かな力を育む造形教育 ～子どもの「こうしたい！」があふれる授業を通して～		
2014年	第64回	上川・旭川	『「わたし」の喜び』あふれる造形活動	第24代 安本　尚博	
2015年	第65回	函館・渡島	夢・つくる・人 ～未来をはぐくむ造形教育～	第25代 三井　哲	
2016年	第66回	札幌	“すき”が輝く造形活動		

平成28年度　北海道造形教育連盟役員名簿

会長	三井　哲	札幌市立北白石小学校長
副会長	橋詰　博	札幌市立簾舞中学校長
〃	小野　三枝子	釧路市立共栄小学校長
〃	池田　元治	千歳市立北陽小学校長
〃	菅原　良和	旭川市立嵐山小中学校長
〃	仲井　靖典	函館市立的場中学校頭
監査	加藤　雅子	札幌市立栄東小学校長
〃	杉山　浩彰	釧路市立青陵中学校
事務局長	阿部　時彦	札幌市立真駒内曙中学校長
事務局次長	八田　博之	札幌市立富丘小学校
〃	箭内　浩之	札幌市立みどり小学校
〃	松本　和彦	札幌市立屯田南小学校
〃	川島　正夫	札幌市立新琴似小学校
〃	平井　歩	札幌市立啓明中学校
会計	岡田　知之	札幌市立南月寒小学校長
会計次長	東　尚典	札幌市立三里塚小学校頭
庶務部部長	本間　真理	札幌市立西園小学校
庶務部副部長	森　久根	札幌市立西野小学校
広報部部長	櫻田　悟	札幌市立盤渓小学校
広報部副部長（ホームページ担当）	小林　知広	札幌市手稲山口小学校
研究部部長	湯浅　大吾	札幌市立三角山小学校
研究部副部長（研究部門）	森實　祐里	札幌市立星置東小学校
（ネットワーク部門）	舘内　徹	札幌市立西岡中学校
（研修部門）	石川　早苗	札幌市立八軒東中学校
（研修部門）	中村　珠世	道教大附属札幌小学校
顧問	阿部　賢一	北見市
〃	阿部　宏行	札幌市
〃	石井　久	函館市
〃	伊藤　恵	札幌市
〃	伊藤　英明	札幌市
〃	伊藤　善彬	札幌市
〃	稲實　順	札幌市
〃	檜面　和子	函館市
〃	岡澤　邦彦	札幌市
〃	鹿島　健	札幌市
〃	金井　秀男	札幌市
〃	金谷　彊	函館市
〃	桑田　正博	江別市
〃	今　裕子	札幌市

顧　　問	近藤　貢	函館市
〃	齊藤隆博	帯広市
〃	佐藤吉五郎	札幌市
〃	佐藤正幸	美唄市
〃	佐藤　靖	札幌市
〃	櫻田　豊	札幌市
〃	庄　栄一	札幌市
〃	芝木秀昭	札幌市
〃	島田　茂	石狩市
〃	白井園毅	江別市
〃	菅原清貴	札幌市
〃	角力山　旭	札幌市
〃	関　建治	恵庭市
〃	武田　誠	七飯町
〃	多田紘一	札幌市
〃	塚野昭臣	札幌市
〃	土谷　敬	函館市
〃	寺嶋文憲	札幌市
〃	寺本吉明	芽室町
〃	出村　保	留萌市
〃	伝住修一	江別市
〃	土井勝典	石狩市
〃	土井善範	札幌市
〃	富田賢司	札幌市
〃	冨田　泰	札幌市
〃	墓田充泰	札幌市
〃	早弓弘行	滝川市
〃	藤井正治	札幌市
〃	宝輪勝己	釧路市
〃	松島輝男	札幌市
〃	三浦敏勝	函館市
〃	三谷哲司	札幌市
〃	宗廣義彦	南幌町
〃	村瀬千樫	札幌市
〃	森川昭夫	札幌市
〃	安木尚博	札幌市
〃	山口長伸	別海町
〃	山宮喬也	北見市
〃	吉田倭雄	札幌市
〃	米谷哲夫	札幌市
〃	若竹隆邦	函館市

各地区サークル（地区代表・地区委員）

	サークル名・役名	氏　名	市町村	勤務校	郵便番号	学　校　住　所	学校電話
札幌	札幌市造形教育連盟						
	会　長	伊藤　正敏	札幌市	清田小長	004-0841	札幌市清田区清田1条4丁目3-30	011(881)2852
	事務局長	藤森　久美	札幌市	新陵東小長	006-0805	札幌市手稲区新発寒5条4丁目2-1	011(684)5561
道央	石狩造形教育連盟						
	委員長	池田　元治	千歳市	北陽小長	066-0032	千歳市北陽3丁目9-1	0123(42)3441
	事務局長	山口　浩	石狩市	南線小長	061-3203	石狩市花川南3条1丁目18	0133(73)2042
	空知美術教育研究会						
	会　長	篠田　俊博	岩見沢市	明成中頭	068-0829	岩見沢市かえで町1丁目1-1	0126(24)3485
	事務局長	舘山　唯郎	美唄市	茶志内小	079-0266	美唄市茶志内本町	0126(65)2120
	後志教育研究会図工美術部会						
	委員長	鵜彫　哲弥	小樽市	入船小	047-0021	小樽市入船3丁目19-1	0134(23)5296
道北	上川造形教育研究会						
	会　長	菅原　良和	旭川市	嵐山小中長	070-8051	旭川市江丹別町嵐山143	0166(61)1199
	事務局長	佐藤　仁彦	当麻町	当麻小	078-1313	当麻町3条東3丁目13-1	0166(84)2020
	旭川市教育研究会図工美術部						
	委員長	成田　慎司	旭川市	明星中	070-0025	旭川市東5条1丁目	0166(26)0468
	事務局長	吉野　法行	旭川市	第二中	078-8340	旭川市東旭川町共栄284	0166(31)2519
	留萌地方美術教育研究会						
	会　長	村元　隆一	天塩町	天塩小頭	098-3304	天塩町新地通5丁目	01632(2)1046
	委員長	小澤なつき	留萌市	留萌小	077-0038	留萌市寿町2丁目10	0164(42)1720
道南	渡島美術教育研究会						
	会　長	船橋　恭二	八雲町	八雲小頭	049-3111	八雲町住初町140	0137(63)2101
	幹事長	高島　純	七飯町	大沼中鳥谷分校	041-1355	七飯町西大沼8-1	0138(67)3378
	函館市美術教育研究会						
	会　長	仲井　靖典	函館市	的場中頭	040-0021	函館市的場町12-7	0138(52)5108
	幹事長	木村　伸仁	函館市	椴法華小	041-0601	函館市新八幡町86-1	0138(86)2051
	檜山管内造形教育研究会						
	会　長	谷口　光伸	今金町	今金小長	049-4302	今金町今金108	0137(82)0224
	事務局長	吉川　聖	江差町	江差小頭	043-0043	江差町本町170	0139(52)0140
	胆振造形教育研究会						
	会　長	佐竹　秀行	苫小牧市	啓北中長	053-0854	苫小牧市啓北町2丁目12-11	0144(72)7245
	事務局長	前田　求	苫小牧市	緑陵中	059-1272	苫小牧市のぞみ町3丁目10-1	0144(61)2727
	室蘭市教育研究会造形部						
	部　長	中山由華里	室蘭市	翔陽中	050-0083	室蘭市東町5丁目11-1	0143(41)0701
	苫小牧市教育研究会造形研究部会						
	部会長	畑瀬　恭子	苫小牧市	拓進小	059-1302	苫小牧市拓勇西町3丁目8-1	0144(52)5010
	幹事長	内村　由香	苫小牧市	美園小	053-0041	苫小牧市美園町4丁目26-2	0144(34)3013
	日高造形教育研究会造形研究部会						
	会　長	神成　浩	浦河町	浦河第一中長	057-0033	浦河町堺町東6丁目485-6	0146(22)2357
	事務局長	牧野　裕子	日高町	富川中	055-0001	日高町富川北7丁目3-6	01456(2)0026

	サークル名・役名	氏　名	市町村	勤務校	郵便番号	学　校　住　所	学校電話
道東	十勝造形サークル委員長	石割　章浩	新得町	新得中長	081-0034	新得町西4条南1丁目1	0156(64)5621
	地区委員	小泉　佳一	浦幌町	浦幌中	089-5636	浦幌町万年339	015(576)2421
	帯広市教育研究会図工美術部会						
	委員長	辻　敦郎	帯広市	第四中長	080-0015	帯広市西5条南25丁目1	0155-24-3511
	事務局長	梅津　美香	帯広市	西陵中	080-0028	帯広市西18条南2丁目2	0155(33)3007
	釧路造形教育研究会						
	委員長	小野三枝子	釧路市	共栄小長	085-0006	釧路市双葉町4-17	0154(23)1695
	事務局長	杉山　浩彰	釧路市	青陵中	085-0814	釧路市緑ヶ岡6-9-42	0154(46)1161
	オホーツク造形教育連盟						
	委員長	里見　貴史	西興部村	西興部小長	098-1501	西興部村西興部240	0158(87)2230
	事務局長	小野寺哲浩	北見市	南中頭	090-0806	北見市南町1丁目2-64	0157(24)7375
	根室造形教育連盟						
	委員長	大溝　雅之	中標津町	計根別学園(小中一貫校)	088-2682	計根別本通東8丁目1-2	0153(78)2052
	事務局長	外川　篤司	中標津町	中標津小	086-1129	中標津町西9条北1丁目2	0153(72)2565

北海道造形教育連盟事務局

札幌市立真駒内曙中学校

〒005-0018　札幌市南区真駒内曙町2丁目1-2　TEL011(582)1642　FAX011(582)9509

事務局長（校長）阿部　時彦

HPアドレス　http://hokuzou.kir.jp

eメール　tokihiko.abe@city.sapporo.jp

第66回　全道造形教育研究大会　札幌大会　運営名簿

大　会　長　三井　哲（札幌市立北白石小学校長）

実行委員長　伊藤　正敏（札幌市立清田小学校長）

副実行委員長・会場校　藤森　久美（札幌市立新陵東小学校長）　平野まなみ（札幌市立陵陽中学校長）
〃　橋詰　博（札幌市立簾舞中学校長）　岡田　知之（札幌市立南月寒小学校長）
〃　森長　弘美（札幌市立前田北中学校長）

事務局長　加藤　雅子（札幌市立栄東小学校長）
事務局員　東　尚典（札幌市立三里塚小学校教頭）

大会顧問　伊藤　聡美（札幌市立二十四軒小学校教頭）　金子　睦（札幌市立定山渓中学校教頭）
〃　佐藤　正行（札幌市立澄川西小学校教頭）　安田　仁昭（札幌市立平岡緑中学校教頭）
〃　柿崎　雅夫（札幌市立八軒中学校教頭）　大高　雅子（札幌市立開成中等教育学校教頭）
〃　北　紳二（札幌市立清田中学校教頭）　斎藤　啓代（小樽市立北山中学校教頭）
〃　福島　祥郎（札幌市立北栄中学校教頭）　石垣あけみ（札幌市立新琴似小学校教頭）
〃　西山　昇（札幌市立澄川中学校教頭）　福島由紀子（札幌市立西岡北小学校教頭）
〃　青山　秀樹（札幌市立稲陵中学校教頭）　冨波　修（札幌市立大倉山小学校教頭）
〃　本間　真理（札幌市立西園小学校）　木原　英俊（札幌市立平岡中学校教頭）
〃　花輪　大輔（北海道教育大学札幌校准教授）

会計局長　箭内　浩之（札幌市立みどり小学校）
会計次長　川島　正夫（札幌市立新琴似小学校）

事務局次長研究関係　勝田　真塩（札幌市立屯田北中学校長）

研究局長　森實　祐里（札幌市立星置東小学校）
研究担当部長　小川　健（札幌市立伏見小学校）　平井　歩（札幌市立啓明中学校）
研究発表者　上田　克美（札幌市立白楊幼稚園）
研究授業者　三浦真奈美（札幌市立稲積小学校）　矢野　宜利（札幌市立北都小学校）
〃　菊地　惟史（札幌市立円山小学校）　寺林　陽子（札幌市立あいの里東中学校）
〃　佐藤　和音（札幌市立伏見小学校）　武井　りえ（札幌市立琴似中学校）
〃　篠原　貴（札幌市立星置東小学校）
研究局員　沼田　玲子（札幌市立白楊小学校）　鈴木美奈子（札幌市立福井野小学校）
〃　大坂　華澄（札幌市立北郷小学校）　髙橋　梓（幼保連携型認定こども園　さつなえのもり）
〃　水野　一英（北海道札幌平岸高等学校）　舘内　徹（札幌市立西岡中学校）
〃　石川　早苗（札幌市立八軒東中学校）　森　久根（札幌市立西野小学校）
〃　山　薫（札幌市立幌南小学校）　鈴木　慧子（札幌市立栄中学校）
〃　中村　麻紀（札幌市立厚別東小学校）　伊藤　彩乃（札幌市立信濃中学校）
〃　椿野　衣江（札幌市立平岡中央中学校）　杉本　真紀（札幌市立屯田北中学校）
〃　石河　明子（札幌市立北辰中学校）

広報局長	櫻田　悟（札幌市立盤渓小学校）	
広報担当部長	吉伊　宏子（札幌市立西小学校）	濱口　裕子（札幌市立石山南小学校）
広報局員	根岸えみ子（札幌市立旭小学校）	岩崎　重明（札幌市立真駒内桜山小学校）
〃	中　奈津子（札幌市立真駒内桜山小学校）	豊田　ゆき（札幌市立新川中学校）
〃	後藤　弥生（札幌市立真駒内桜山小学校）	多田　絵美（札幌市立平岡中学校）

事務局次長総務関係	阿部　時彦（札幌市立真駒内曙中学校長）

総務局長	湯浅　大吾（札幌市立三角山小学校）	
総務担当部長	中村　珠世（教育大附属札幌小学校）	
総務局員	小林　充裕（札幌市立東札幌小学校）	隈本　一哉（札幌市立太平南小学校）
〃	千葉紗希子（札幌市立伏古小学校）	山崎　久子（札幌市立宮の森中学校）

会場局長	八田　博之（札幌市立富丘小学校）	
会場担当部長	小林　知広（札幌市立手稲山口小学校）	
会場局員	余川　理子（札幌市立北九条小学校）	松本　和彦（札幌市立屯田南小学校）
〃	中村　嘉宏（札幌市立手稲鉄北小学校）	今　千香（札幌市立前田中学校）
〃	佐々木雅子（小樽市立銭函中学校）	黒川　友理（札幌市立新陵小学校）
〃	八子　正人（札幌市立琴似中学校）	黒壁　幸代（平和幼稚園）

庶務局長	池田　武彦（札幌市立南白石小学校）	
庶務担当部長	藤岡　真弓（札幌市立手稲中央小学校）	中川　治（札幌市立本郷小学校）
庶務局員	久蔵美和子（札幌市立稲穂中学校）	細川亜矢子（札幌市立厚別中学校）

助言者	今　裕子（元札幌市立福住小学校長）	菅原　清貴（元札幌市立幌西小学校長）
〃	平向　功一（札幌大谷大学准教授）	益村　豊（元札幌市立資生館小学校長）
〃	土井　善範（元札幌市立光陽小学校長）	稲實　順（元札幌市立旭小学校長）
〃	安木　尚博（札幌学院大学教授）	櫻田　豊（元札幌市立八軒西小学校長）
〃	富田　賢司（元札幌市立札苗北中学校長）	塚野　昭臣（元札幌市立向陵中学校長）
〃	阿部　宏行（北海道教育大学岩見沢校教授）	篠原　寛（元札幌市立西小学校長）

第66回　全道造形教育研究大会　札幌大会

研究紀要

“すき”が輝く造形活動

2016年7月28日発行

発行者　札幌市造形教育連盟
代表　会長　伊藤　正敏
事務局　札幌市立新陵東小学校
TEL（011－684－5561）
FAX（011－684－3498）
事務局長　藤森　久美
印刷・製本　小南印刷株式会社
札幌市中央区北9条西23丁目
TEL（011－641－5373）

SAPPORO
2016